

IBM

@server

iSeries

論理区画における Linux

バージョン 5 リリース 3





@server

iSeries

論理区画における Linux

バージョン 5 リリース 3

ご注意！

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、75 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM OS/400 のバージョン 5、リリース 3、モディフィケーション 0 (プロダクト番号 5722-SS1)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。このバージョンは、すべての RISC モデルで稼動するとは限りません。また CISC モデルでは稼動しません。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： iSeries
Linux in
a logical partition
Version 5 Release 3

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2005.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2005. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2005

目次

| | | | |
|--|----------|---|-----------|
| 論理区画における Linux | 1 | NWSD の開始と停止 | 28 |
| V5R3 の新機能 | 1 | 装置パリティ保護の開始 | 28 |
| トピックの印刷 | 1 | 論理区画における Linux の管理 | 29 |
| 論理区画における Linux 実行の計画 | 2 | 論理区画に必要な論理区画権限 | 30 |
| iSeries サーバーでの Linux のサポート | 2 | ハードウェア構成の表示および変更 | 30 |
| Linux を実行する、ホストされる区画とホストされ ない区画 | 5 | 論理区画の LAN への接続 | 32 |
| Linux を実行する論理区画での仮想入出力 | 6 | 論理区画のサーバー構成の印刷 | 41 |
| Linux を実行する論理区画における、直接接続され た入出力 | 7 | 共用プロセッサ装置の動的移動 | 42 |
| Linux がサポートする iSeries 入出力アダプター (IOA) | 7 | Linux 区画へのディスクの動的追加 | 43 |
| 論理区画のための直接接続された SCSI のサポー ト | 11 | ネットワーク・サーバー記述 | 45 |
| Linux for iSeries サーバーの入手 | 16 | アプリケーションのサポート | 50 |
| 論理区画を実行できるようにするための新しいサー バーのオーダーまたは既存のサーバーのアップ グレード | 16 | 論理区画のバックアップと回復 | 51 |
| Linux を実行する論理区画の作成 | 16 | 論理区画の開始 | 66 |
| 論理区画の構成 | 17 | 論理区画で実行される Linux のトラブルシューティ ング | 69 |
| 入出力アダプター (IOA) の論理区画への割り当て ネットワーク・サーバー記述とネットワーク・サー バー記憶スペースの作成 | 22 | NWSD エラー・メッセージのデバッグ | 69 |
| 論理区画用 LAN コンソールの構成 | 24 | プロセッサ・マルチタスキング・エラーのデバ ッグ | 70 |
| 仮想コンソールの接続 | 24 | Linux のシステム参照コード (SRC) | 71 |
| 論理区画への Linux のインストール | 25 | 仮想イーサネット・ネットワーク障害からの回復 | 72 |
| 統合ファイル・システム内の CD-ROM イメージ からの Linux のインストール | 26 | 論理区画中の Linux に関する関連情報 | 73 |
| | | 付録. 特記事項. | 75 |
| | | プログラミング・インターフェース情報 | 77 |
| | | 商標 | 77 |
| | | 資料に関するご使用条件 | 77 |

論理区画における Linux

IBM® および多数の Linux™ ディストリビューターは、Linux オペレーティング・システムと iSeries™ サーバーの信頼性を統合するために、互いにパートナーとして取り組んできました。Linux は、新世代の Web ベース・アプリケーションを iSeries にもたらしめます。IBM は、以前の iSeries サーバー上で、かつ AIX® または OS/400® によってホストされる論理区画で実行されるよう Linux PowerPC® カーネルを修正して、Linux コミュニティーに修正後のカーネルを提供しました。この資料のトピックは、サーバーに Linux を正常にインストールするためのストラテジーを計画する方法、Linux を実行する論理区画を構成する方法、および、Linux を実行する論理区画の管理とトラブルシューティングです。

関連情報

区画化 (Squadron Linux) (Partitioning for Squadron Linux)

V5R3 の新機能

このトピックでは、主に論理区画における Linux のこのリリースでの変更内容について説明します。

新機能や変更内容を参照する方法

技術上の変更が加えられた場所をすぐに識別できるように、以下のイメージを使用しています。

- イメージ。これは新規情報や変更情報の開始位置に付けられているマークです。
- イメージ。これは新規情報や変更情報の終了位置に付けられているマークです。

このリリースの新機能や変更内容に関する他の情報を調べるには、プログラム資料説明書を参照してください。

トピックの印刷

ここで、関連資料の PDF の表示や印刷を行えます。


本書の PDF バージョンを表示またはダウンロードするには、「論理区画における Linux」を選択します (約 855 KB)。

PDF ファイルの保管

表示または印刷のために PDF をワークステーションに保管するには、以下のようになります。

1. ブラウザーで PDF を右マウス・ボタン・クリックする (上部のリンクを右マウス・ボタン・クリック)。
2. Internet Explorer を使用している場合は、「対象をファイルに保存...」をクリックする。Netscape Communicator を使用している場合は、「リンクを名前を付けて保存...」をクリックする。
3. PDF を保存したいディレクトリーに進む。
4. 「保存」をクリックする。

Adobe Acrobat Reader のダウンロード

これらの PDF を表示または印刷するには、Adobe Acrobat Reader が必要です。このアプリケーションは、Adobe Web サイト (www.adobe.com/products/acrobat/readstep.html  外のリンク) からダウンロードできます。

関連情報

73 ページの『論理区画中の Linux に関する関連情報』

論理区画における Linux のトピックに関連した IBM Redbooks™ (PDF 形式)、Web サイト、および Information Center のトピックを次にリストします。いずれの PDF も表示したり印刷したりできます。

論理区画における Linux 実行の計画

iSeries サーバーを Linux 用に構成する前に、ソフトウェアおよびハードウェア資源の計画と評価を注意深く行う必要があります。

ここでは、Linux を実行する論理区画を作成する前に、計画の過程をガイドします。

注: サーバー構成を変更する前に、サーバー全体のバックアップを取っておくことをお勧めします。

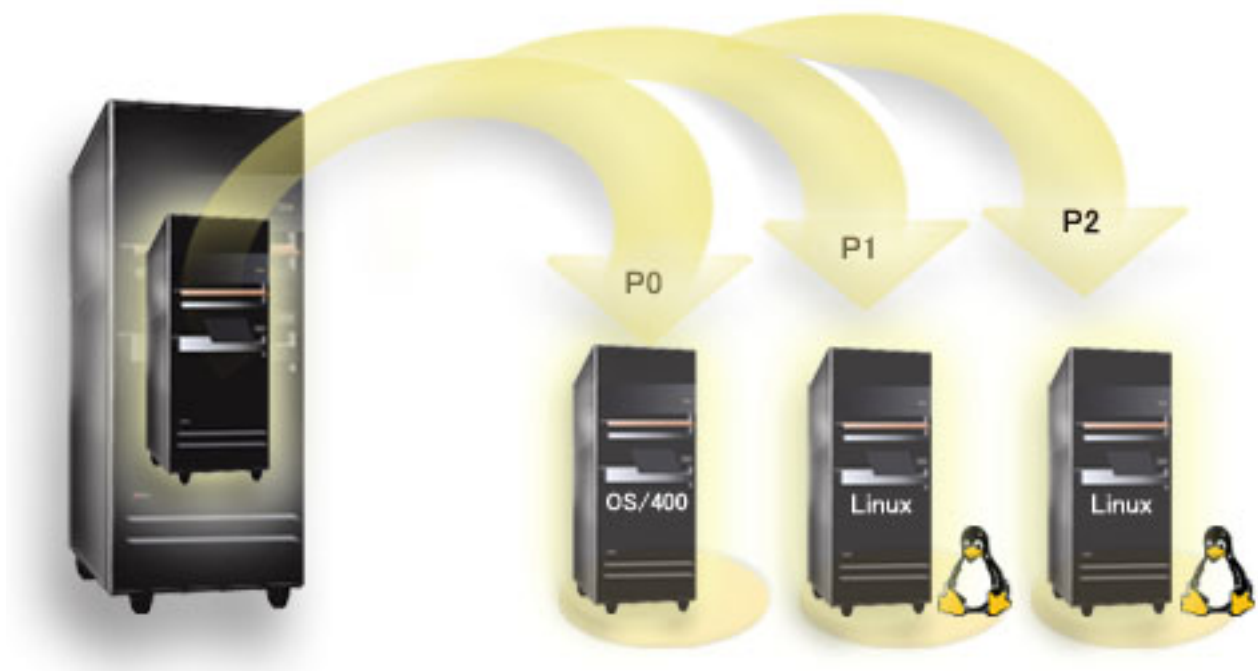
関連情報

バックアップおよび回復

iSeries サーバーでの Linux のサポート

Linux を実行できるように iSeries の区画を正しく作成するためには、サーバーには特定のハードウェアとソフトウェアが必要です。

1 次区画は、OS/400 V5R1 またはそれ以降を実行していなければならない、最新の PTF で更新されている必要があります。Linux 関連の最新の OS/400 PTF は、IBM Web サイトにあります。



Linux は 1 次区画ではサポートされていません。ソフトウェア機能の追加情報については、リリース情報別 OS/400 論理区画機能を参照してください。

一部のモデルは、共用プロセッサ・プール構成で Linux を実行できます。共用プロセッサを使用する場合、1 つのプロセッサを 10 個までの OS/400 および Linux 区画で共用できます。他のモデルは、Linux 区画用の専用プロセッサを使用する必要があります。このようなモデルでは、1 次区画を含めた全サーバーでプロセッサ・マルチタスキングを使用不可にする必要もあります。

Linux オペレーティング・システムは、シングル・プロセッサとマルチ・プロセッサのどちらかをサポートします。どちらがサポートされるかは、論理区画の作成時に決まります。マルチ・プロセッサが割り当てられている区画に、シングル・プロセッサ用に作成された Linux カーネルをロードすると、正しく機能しますが、1 つのプロセッサしか使用されません。1 つの区画にマルチ・プロセッサを割り当てる場合は、対称マルチプロセッサ (SMP) 用に作成された Linux を使用する必要があります。論理区画には、プロセッサをいくつでも割り当てることができます。次の表は、サーバーが論理区画における Linux をサポートするかどうかを判別するのに役立ちます。

表 1. モデル 270

| フィーチャー・コード | プロセッサの数 | LPAR のサポート | Linux のサポート | Linux 共用プロセッサ | プロセッサ・マルチタスキングの使用不能化機能 |
|------------|---------|------------|-------------|---------------|------------------------|
| 2248 | 1 | なし | なし | なし | なし |
| 2250 | 1 | なし | なし | なし | なし |
| 2252 | 1 | なし | なし | なし | なし |
| 2253 | 2 | なし | なし | なし | なし |
| 2422 | 1 | なし | なし | なし | なし |
| 2423 | 1 | なし | なし | なし | なし |
| 2424 | 2 | なし | なし | なし | なし |

表 1. モデル 270 (続き)

| フィーチャー・コード | プロセッサの数 | LPAR のサポート | Linux のサポート | Linux 共用プロセッサ | プロセッサ・マルチタスキングの使用不能化機能 |
|------------|---------|------------|-------------|---------------|------------------------|
| 2431 | 1 | あり | あり | あり | なし |
| 2432 | 1 | あり | あり | あり | なし |
| 2434 | 2 | あり | あり | あり | なし |
| 2452 | 1 | あり | あり | あり | なし |
| 2454 | 2 | あり | あり | あり | なし |

表 2. モデル 820

| フィーチャー・コード | プロセッサの数 | LPAR のサポート | Linux のサポート | Linux 共用プロセッサ | プロセッサ・マルチタスキングの使用不能化機能 |
|------------|---------|------------|-------------|---------------|------------------------|
| 2395 | 1 | あり | なし | なし | なし |
| 2396 | 1 | あり | なし | なし | なし |
| 2397 | 2 | あり | あり | なし | あり |
| 2398 | 4 | あり | あり | なし | あり |
| 2425 | 1 | あり | なし | なし | なし |
| 2426 | 2 | あり | あり | なし | あり |
| 2427 | 4 | あり | あり | なし | あり |
| 0150 | 1 | あり | あり | あり | なし |
| 0151 | 2 | あり | あり | あり | なし |
| 0152 | 4 | あり | あり | あり | なし |
| 2435 | 1 | あり | あり | あり | なし |
| 2436 | 1 | あり | あり | あり | なし |
| 2437 | 2 | あり | あり | あり | なし |
| 2438 | 4 | あり | あり | あり | なし |
| 2456 | 1 | あり | あり | あり | なし |
| 2457 | 2 | あり | あり | あり | なし |
| 2458 | 4 | あり | あり | あり | なし |

表 3. モデル 830

| フィーチャー・コード | プロセッサの数 | LPAR のサポート | Linux のサポート | Linux 共用プロセッサ | プロセッサ・マルチタスキングの使用不能化機能 |
|------------|---------|------------|-------------|---------------|------------------------|
| 2400 | 4 | あり | あり | なし | あり |
| 2402 | 4 | あり | あり | なし | あり |
| 2403 | 8 | あり | あり | なし | あり |
| 2351 | 4/8 | あり | あり | なし | あり |
| 0153 | 4/8 | あり | あり | なし | あり |

表 4. モデル 840

| フィーチャー・コード | プロセッサの数 | LPAR のサポート | Linux のサポート | Linux 共用プロセッサ | プロセッサ・マルチタスキングの使用不能化機能 |
|------------|---------|------------|-------------|---------------|------------------------|
| 2418 | 12 | あり | あり | なし | あり |
| 2420 | 24 | あり | あり | なし | あり |
| 2416 | 8/12 | あり | あり | なし | あり |
| 2417 | 12/18 | あり | あり | なし | あり |
| 2419 | 12/18 | あり | あり | なし | あり |
| 2461 | 24 | あり | あり | あり | なし |
| 2352 | 8/12 | あり | あり | あり | なし |
| 2353 | 12/18 | あり | あり | あり | なし |
| 2354 | 18/24 | あり | あり | あり | なし |
| 0158 | 12 | あり | あり | あり | なし |
| 0159 | 24 | あり | あり | あり | なし |

表 5. モデル 890

| フィーチャー・コード | プロセッサの数 | LPAR のサポート | Linux のサポート | Linux 共用プロセッサ | プロセッサ・マルチタスキングの使用不能化機能 |
|------------|---------|------------|-------------|---------------|------------------------|
| 0197 | 24 | あり | あり | あり | なし |
| 0198 | 32 | あり | あり | あり | なし |
| 2487 | 16/24 | あり | あり | あり | なし |
| 2488 | 24/32 | あり | あり | あり | なし |

サーバーの既存のフィーチャー・コードを更新する方法の詳細については、IBM 営業担当員または IBM ビジネス・パートナーと連絡をとってください。

関連情報

リリース別 OS/400 論理区画機能

論理区画の概念: 共用プロセッサ・プール

論理区画の概念: 専用プロセッサ

70 ページの『プロセッサ・マルチタスキング・エラーのデバッグ』

一部の iSeries サーバーで Linux を実行する場合、プロセッサ・マルチタスキングを OS/400 で使用不可にする必要があります。

Linux on iSeries

Linux を実行する、ホストされる区画とホストされない区画

Linux は、ホストされる区画とホストされない区画の両方の環境で稼働します。

ホストされる区画は、ホスト OS/400 区画に属する入出力資源を使用します。ホスト OS/400 区画は、1 次区画または 2 次区画のどちらでも差し支えありません。ホストされる区画が使用できるサーバーの入出力資源には、ディスク、CD、磁気テープ装置があります。

ホストされる論理区画は、ネットワーク・サーバー記述 (NWS D) をオンに変更してホスト OS/400 区画から開始されなければなりません。NWS D は、論理区画の制御に使用されます。サーバーがアクティブで、なおかつ制限状態にない場合のみ、論理区画をアクティブにすることができます。OS/400 が制限状態にあるとき、すべての NWS D は自動的にオフに変更されます。1 つの OS/400 区画は、複数の論理区画をホストすることができます。サーバーが論理区画をサポートできるようにするために、適切なキャパシティ・プランニングを実行する必要があります。

ホストされる論理区画は、「区画状況の処理 (Work with Partitions Status)」画面を使用して電源オンにしないでください。Linux を実行する論理区画を、「区画状況の処理 (Work with Partitions Status)」画面を使用して電源オンにする場合、使用できる仮想入出力装置はなくなります。

ホストされない論理区画は、入出力資源に関してホスト OS/400 区画に依存しません。論理区画には独自のディスク装置が設置されているか、あるいはゲスト区画がネットワークング・サポートを利用してネットワーク開始を行います。ホストされない論理区画は、1 次区画が完全にアクティブでない場合でも開始することができます。ホストされない論理区画は、「区画状況の処理 (Work with Partitions Status)」画面から開始することができます。

関連情報

Logical partitions capacity planning

Linux を実行する論理区画での仮想入出力

仮想入出力資源は、OS/400 ホスト区画が所有する装置で、論理区画への入出力機能を提供します。

iSeries Linux カーネルと OS/400 は、数種類の仮想入出力資源をサポートしています。これらは仮想コンソール、仮想ディスク装置、仮想 CD、仮想テープ、および仮想イーサネットです。

仮想コンソールは、OS/400 区画を介して論理区画にコンソール機能を提供します。仮想コンソールは、サーバーまたは 1 次区画に設定できます。仮想コンソールを使用すると、ネットワーク資源が構成される前に、インストール・プログラムがユーザーと通信できるようになります。これは、サーバー・エラーのトラブルシューティングにも使用できます。

仮想ディスク装置は、サーバーによってのみ提供されます。仮想ディスクは、Linux の NWSSTG 仮想ディスクへのアクセスを提供します。デフォルトでは、CRTNWSSTG コマンドは、FAT16 ファイル・システムでフォーマットされた 1 つのディスク区画を持つディスク環境を作成します。Linux インストール・プログラムは、ディスクを Linux 用にフォーマットし直します。または、fdisk や mke2fs などの Linux コマンドを使用して、ディスクを Linux 用にフォーマットすることもできます。

仮想 CD は、Linux のインストールをサポートするために必要であり、サーバーによってのみ提供されます。デフォルトでは、Linux 区画は論理区画上のすべての CD ドライブを認識できます。NWS D 上のオプションを変更して、Linux がこれらのドライブの一部または全部にアクセスすることを制限できます。

仮想テープは、論理区画から OS/400 テープ・ドライブへのアクセスを提供します。デフォルトでは、論理区画はホスト・パーティション上のすべてのテープ・ドライブを認識できます。NWS D 上のオプションを変更して、Linux がこれらのドライブの一部または全部にアクセスすることを制限できます。

仮想イーサネットは、1 GB のイーサネット・アダプターを使用する場合と同じ機能を提供します。論理区画は仮想イーサネットを使用して、複数の高速区画内接続を確立できます。OS/400 区画と Linux 区画は、仮想イーサネット通信ポート上で TCP/IP を使用して相互に通信できます。

関連タスク

22 ページの『ネットワーク・サーバー記述とネットワーク・サーバー記憶スペースの作成』
ネットワーク・サーバー記述 (NWS) は、構成に名前を付け、Linux 区画を開始および停止するためのインターフェースを提供し、Linux と仮想ディスクとの間のリンクを提供するために使用されます。

関連情報

32 ページの『論理区画での仮想イーサネットの使用』
論理区画は仮想イーサネットを使用して、複数の高速区画内接続を確立できます。
論理区画とゲスト区画のシナリオ

Linux を実行する論理区画における、直接接続された入出力

直接接続された入出力を使用すれば、Linux がハードウェア資源を直接管理し、すべての入出力資源は Linux オペレーティング・システムによって制御されるようになります。

直接接続された入出力を使うことにより、Linux を実行する論理区画に、ディスク装置、磁気テープ装置、光ディスク装置、および LAN アダプターを割り振ることができます。Linux を論理区画にインストールするには、NWS が必要です。Linux をインストールした後、区画が独立して始動するように構成できます。直接接続されたハードウェアの場合、すべての障害メッセージおよび診断メッセージは論理区画内に表示されます。

論理区画で直接接続された入出力を使用する方法について、詳しくは IBM 営業担当員または IBM ビジネス・パートナーに問い合わせてください。

関連概念

32 ページの『直接接続された LAN アダプター』
Linux を実行する論理区画には、独自の LAN アダプターを設置することができます。

関連タスク

17 ページの『入出力アダプター (IOA) の論理区画への割り当て』
入出力アダプターを論理区画に割り当てる方法を説明します。

関連情報

論理区画とゲスト区画のシナリオ

Linux がサポートする iSeries 入出力アダプター (IOA)

OA を論理区画に割り当てることができます。iSeries は、Linux を実行する論理区画において以下のアダプターをサポートする予定です。

Linux の acenic、olympic、および pcnet32 デバイス・ドライバーは、Linux に付属しています。これらのドライバーはカーネルの中にコンパイルされ、Linux ディストリビューターから提供されます。

ibmsis ドライバーは、オペレーティング・システムが磁気テープ、光ディスク、およびディスク装置と通信するためのインターフェースを提供します。このデバイス・ドライバーは、カーネル・モジュールとして Linux ディストリビューターから提供されます。このデバイス・ドライバーの最新バージョンは、Linux for iSeries の Web サイトにあります。

icom ドライバーは、Linux に付属のオープン・ソース・デバイス・ドライバーです。このドライバーはカーネル内にコンパイルされて Linux ディストリビューターから提供される場合があります。WAN アダプター CCIN 2745 または 2772 を注文するには、注文フィーチャー・コード 0608、0609、0610 が入手でき

ない場合、ハードウェア RPQ 847141、847142、または 847143 を注文する必要があるかもしれません。WAN アダプター CCIN 2771 は、サーバーの基本アダプターであり、Linux で使用できますが、これは個別に注文できるフィーチャーではありません。

lpfc ドライバーは、オペレーティング・システムがファイバー・チャンネルを介してディスク装置サブサーバーと通信するためのインターフェースを提供します。このデバイス・ドライバーの最新バージョンは、Linux for iSeries の Web サイトにあります。サポートされる構成には、直接接続、管理されたハブ、およびスイッチ・ファブリック・トポロジーがあります。ファイバー・チャンネル・アダプター CCIN 2766 を注文するには、注文フィーチャー・コード 0612 が入手できない場合、ハードウェア RPQ 847145 を注文する必要があるかもしれません。

e1000 ドライバーは Intel™ から提供されています。このデバイス・ドライバーはカーネル内にコンパイルされて Linux ディストリビューターから提供される場合があります。このデバイス・ドライバーの最新バージョンは、Intel PRO/1000 Single/Dual Port Adapters の Web サイトにあります。

このリストは、OS/400 のリリースごとに違っている場合があります。Linux for iSeries の Web サイトを参照してください。

表 6. サポートされる入出力アダプター

| アダプター (CCIN) | フィーチャー・コード | 説明 | Linux デバイス・ドライバー | SubSystem ベンダー/ SubSystem タイプ | PCI ベンダー ID/PCI ID |
|--------------|------------|---|------------------|-------------------------------|--------------------|
| 2742 | 0613 | 2 線 WAN (シリアル通信をサポートする 2 つの RVX ポート付き) | icom | 1014/021A | 1014/0219 |
| 2743 | 0601 | 1-Gbps イーサネット (光ファイバー) | acenic | 1014/0104 | 12AE/0001 |
| 2744 | 0603 | 100/16/4-Mbps トークンリング | olympic | 1014/016D | 1014/003E |
| 2745 | 0608 | 2 線 WAN (複数非同期通信をサポートする 2 つの RVX ポート付き) | icom | 0000/0000 | 1014/0031 |
| 2748 | 0605 | Ultra-2 SCSI (3 バス; 26 MB 書き込みキャッシュ; 拡張適応読み取りキャッシュ; RAID 5*; 内部ディスク装置および磁気テープ装置、CD-ROM、および DVD-RAM をサポート) | ibmsis | 1014/0099 | 1014/0096 |

表 6. サポートされる入出力アダプター (続き)

| アダプター (CCIN) | フィーチャー・コード | 説明 | Linux デバイス・ドライバ | SubSystem ベンダー/ SubSystem タイプ | PCI ベンダー ID/PCI ID |
|--------------|------------|--|-----------------|-------------------------------|--------------------|
| 2757 | 0618 | Ultra-3 SCSI (4 バス; 757 MB 書き込みキャッシュ; ハードウェア RAID 5**); 内部ディスク装置および磁気テープ装置、CD-ROM、DVD-RAM、および DVD-ROM をサポート) | ibmsis | 1014/0241 | 1014/0180 |
| 2760 | 0602 | 1-Gbps イーサネット UTP (対より線 (シールドなし)) | acenic | 1014/00F2 | 12AE/0001 |
| 2763 | 0604 | Ultra-2 SCSI (2 バス; 10 MB 書き込みキャッシュ; RAID 5*; 内部ディスク装置および磁気テープ装置、CD-ROM、および DVD-RAM をサポート) | ibmsis | 1014/0098 | 1014/0096 |
| 2766 | 0612 | 短波ファイバー・チャンネル・アダプター (Point-to-Point トポロジーまたはアービトラレーテッド・ループ・トポロジー用); OS/400(R) の磁気テープおよびディスク接続をサポート; Linux のディスクをサポート | lpfc | 10DF/F900 | 10DF/F900 |
| 2771 | | 2 線 WAN (非同期通信をサポートする 1 つの RVX ポート、および V.90 56k をサポートする 1 つの RJ11 モデム・ポート付き) | icom | 0000/0000 | 1014/0031 |

表 6. サポートされる入出力アダプター (続き)

| アダプター (CCIN) | フィーチャー・コード | 説明 | Linux デバイス・ドライバ | SubSystem ベンダー/ SubSystem タイプ | PCI ベンダー ID/PCI ID |
|--------------|------------|---|-----------------|-------------------------------|--------------------|
| 2772 | 0609/0610 | 2 線 WAN (V.90 56k をサポートする 2 つの RJ11 モデム・ポート付き); 非 CIM (Complex Impedence Matching) と CIM パッケージで使用可能。 | icom | 0000/0000 | 1014/0031 |
| 2778 | 0606 | Ultra-2 SCSI (3 バス; 78 MB 書き込みキャッシュ; RAID 5*; 拡張最適読み取りキャッシュ; 内部ディスク装置および磁気テープ装置、CD-ROM、および DVD-RAM をサポート) | ibmsis | 1014/0097 | 1014/0096 |
| 2782 | 0619 | Ultra-3 SCSI (2 バス; 40 MB 書き込みキャッシュ; ハードウェア RAID 5**); 内部ディスク装置および磁気テープ装置、CD-ROM、DVD-RAM、および DVD-ROM をサポート) | ibmsis | 1014/0242 | 1069/B166 |
| 2793 | 0614/0615 | 2 線 WAN (マルチプロトコルをサポートする 1 つの RVX ポート、および、V.92 56k V.92 データ・モデム、V.44 データ圧縮、V.34 FAX モデムと FAX 機能をサポートする 1 つの RJ11 モデム・ポート付き); 非 CIM (Complex Impedence Matching) および CIM パッケージで使用可能。フィーチャー・コード 0165 は CIM パッケージ。 | icom | 1014/0251 | 1014/0219 |

表 6. サポートされる入出力アダプター (続き)

| アダプター (CCIN) | フィーチャー・コード | 説明 | Linux デバイス・ドライバー | SubSystem ベンダー/ SubSystem タイプ | PCI ベンダー ID/PCI ID |
|--------------|------------|---|------------------|-------------------------------|--------------------|
| 2805 | 0616/0617 | 4 線 WAN (V.92 56k と V.34 FAX 機能をサポートする 4 つの RJ11 モデム・ポート付き); 非 CIM (Complex Impedance Matching) と CIM パッケージで使用可能。 | icom | 1014/0252 | 1014/0219 |
| 2838 | 0607 | 100/10-Mbps イーサネット | pcnet32 | 1014/0133 | 1022/2000 |
| 2849 | 0624 | 100/10-Mbps イーサネット (対より線 (シールドなし)) | pcnet32 | 1014/024C | 1022/2000 |
| 5700 | 0620 | 1000/100/10-Mbps イーサネット (光ファイバー) | e1000 | 8086/1009 | 8086/1009 |
| 5701 | 0621 | 100/100/10-Mbps イーサネット (対より線 (シールドなし)) | e1000 | 8086/100F | 8086/100F |
| 5702 | 0624 | Ultra-3 SCSI (2 バス; 書き込みキャッシュなし; ハードウェア RAID なし; 内蔵ディスク装置および磁気テープ装置 (内蔵または外付け)、CD-ROM、および DVD-RAM をサポート) | ibmsis | 1014/0266 | 1069/B166 |

関連情報

Linux on iSeries

Intel PRO/1000 Single/Dual Port Adapters

論理区画のための直接接続された SCSI のサポート

直接接続された SCSI ディスク、テープ、および光ディスク装置のサポートを使用可能にするために、ibmsis デバイス・ドライバーを使用できます。

Linux において、ディスク圧縮はサポートされていません。ibmsis デバイス・ドライバーは、インストール後に、サポートされる直接接続された SCSI 装置のために使用される 2 つのユーティリティーを持つようになります。sisconfig ユーティリティーは、直接接続されたディスクを構成したりエラー・リカバリーを実行したりするために使用されます。このユーティリティーを使用すれば、ディスク・ハードウェア状況の表示、装置パーティション保護の開始と停止、ディスクの初期化とフォーマット、および他のサービス・アク

ションの実行が可能です。sisupdate ユーティリティーは、サポートされるアダプター上でファームウェアを更新するために使用します。これらのユーティリティーは、Linux を実行する論理区画内でのみ実行されます。これらのコマンドを使用するには、root ユーザー権限が必要です。

sisconfig でディスク・ハードウェア状況を表示するためのオプションを使用すると、直接接続された各 SCSI 装置のモデル・タイプが表示されます。Linux が型式番号によってディスクにアクセスできるかどうかを判別できます。Linux がディスクにアクセスできない場合は、一般的なディスク・エラーを解決するために sisconfig を使用できます。sisconfig を使用しても論理区画からディスクにアクセスできない場合は、サポート担当者に連絡してください。

論理区画内の直接接続された SCSI ドライブは、以下の情報を表示します。

表7. SCSI ドライバー

| モデル | 説明 | システム構成作業 |
|-----|---------------------------|---|
| 020 | ディスクは無保護で圧縮されていません。 | システム構成は不要です。 |
| 050 | ディスクは無保護で圧縮されていません。 | システム構成は不要です。 |
| 060 | ディスクは圧縮されています。 | ディスクを初期化してフォーマットする必要があります。 |
| 07x | ディスクはパリティ保護されています。 | システム構成は不要です。 |
| 08x | ディスクは圧縮されていてパリティ保護されています。 | ディスクを初期化してフォーマットする必要があります。装置パリティ保護を停止する必要もあります。 |

ibmsis ユーティリティーの使用方法についての詳細な技術情報は、各ダウンロードの README ファイルに入っています。

直接接続された SCSI 装置を使用するには、特定の Linux ドライバーが必要です。ibmsis を使用する前に、以下の Linux ドライバーがあることを確認してください。

表8. Linux ドライバー

| 説明 | モジュール名 |
|-----------------------------------|------------|
| 低レベル SCSI デバイス・ドライバー | ibmsis |
| 基本 Linux カーネル内の SCSI ディスク・ドライバー | sd.o |
| 基本 Linux カーネル内の SCSI テープ・ドライバー | st.o |
| 基本 Linux カーネル内の SCSI CD-ROM ドライバー | sr.o |
| 基本 Linux カーネル内の SCSI ドライバー | scsi_mod.o |

装置パリティ保護

装置パリティ保護は、ディスク装置で障害が発生したりディスクが壊れたりした場合にデータが失われることがないように保護するハードウェア・アベイラビリティ機能です。

データを保護するため、ディスク入出力アダプター (IOA) は、データの各ビットのパリティ値を計算し、それを保存します。理論上、IOA は、装置パリティ・セットの中の他の各ディスク装置上で同じ位置にあるデータに基づいてパリティ値を計算します。ディスクに障害が発生した場合、そのパリティ値、および他のディスクの同じ位置にあるビット値を使用することによってデータを再構成できます。デー

タ再構成中も、サーバーは実行を続けます。装置パリティ保護の最終目的は、なるべく低コストでハイ・アベイラビリティを実現し、データを保護するということにあります。

装置パリティ保護は、iSeries 上で Linux を実行するゲスト区画でもサポートされています。パリティ保護の対象となるディスク装置ではデータのストライプが可能です。その場合、論理ボリューム・マネージャー (LVM) または md ドライバーによる Linux ソフトウェア RAID 0 を使用することにより、パフォーマンスを向上させることができます。LVM は、記憶スペースについてのシンプルで柔軟なビューと、実際の物理ディスクとの間でデータを対応付けることにより、ディスク資源を制御します。論理ボリューム・マネージャーまたは Linux ソフトウェア RAID については、Linux HOW TO ドキュメンテーションを参照してください。

装置パリティ状況の表示

ハードウェア装置パリティは、装置パリティ・セットごとに表示されます。

この表示には、サーバー上のすべての装置パリティ・セット、およびその時点で装置パリティ保護を使用するように構成されているすべてのディスク装置が含まれます。

表 9. 状況の説明

| 状況 | 説明 |
|--------------------------|---|
| 「アクティブ (Active)」 | この装置は完全に作動可能です。 |
| 「障害 (Failed)」 | この装置には障害が発生しています。データのバリティ保護を保守するには、ユーザー処置が必要になる可能性があります。このサブサーバー内の別の装置に障害が発生すると、データが失われる可能性があります。 |
| 「準備未完了 (Not Ready)」 | この装置は、メディア関連の機能を実行できませんが、IOA との通信は可能です。 |
| 「読み取り/書き込み保護 (R/W Prot)」 | この装置は、読み取りおよび書き込み操作を処理できません。この状態の原因として、キャッシュの問題、装置構成の問題、データ保全性に影響し得るその他の問題が考えられます。 |
| 「同期 (Synched)」 | ディスク装置サブサーバーが、データに基づいてこのパリティ・セットのパリティを作成中です。 |
| 「再作成 (Rebuilt)」 | この装置は、デバイス・パリティ保護のあるディスク装置サブサーバーの一部です。この装置のデータは、ディスク装置サブサーバー内の他の装置に基づいて再作成中です。 |
| 「無保護 (Unprotected)」 | この装置は、デバイス・パリティ保護のあるディスク装置サブサーバーの一部です。この装置は作動可能です。しかし、このディスク装置サブサーバー内の別の装置に障害が発生しているか、またはデータの再作成中です。ディスク装置サブサーバー内の別の装置に障害が発生すると、データが失われる可能性があります。 |

ディスク同時保守

ディスク同時保守を使用すれば、サーバーの電源を遮断せずにディスクを取り替えることができます。

同時保守を使用したディスク装置の追加

同時保守サポートは、サーバー装置ハードウェア・パッケージングの機能です。すべてのサーバーが同時保守をサポートしているわけではありません。装置パリティ保護またはソフトウェア RAID のないサーバーの場合、ディスクに関係したハードウェア障害が発生するとサーバーが使用できなくなります。サーバーは、障害が起きたハードウェアが修理または交換されるまで使用不能になります。一方、装置パリティ保護またはソフトウェア RAID を使用している場合、障害の起きたハードウェアをサーバー稼働中に、通常は修理または交換できます。ディスク関連のハードウェア障害が起きてサーバーが使用不能になった場合、

Linux 区画をレスキュー・モードで開始して、同時保守の処置を行うことができます。こうすれば、1 次区画の電源を遮断しないまま、障害の起きたハードウェアを交換することができます。

ディスクに障害が発生した場合、問題のあるディスクの正確な場所を確認する必要があります。誤って他のディスク・ドライブを取り外した場合、予期されない結果がデータ・ファイルに発生する可能性があります。その場合、次の再始動が完了するのに長い時間がかかります。

ディスク装置の状況モニターに、個々のディスク装置の状況が表示されます。以下のような値が表示されます。

表 10. ディスク装置の状況

| 状況 | 説明 |
|--------------------------------------|--|
| 「操作可能 (Operational)」 | ディスク装置は操作可能であり、入力または出力操作を受け入れることのできる状態です。 |
| 「操作不能 (Not operational)」 | この装置は、IOA と通信できません。装置の電源がオンになっていることを確認してください。 |
| 「準備未完了 (Not ready)」 | この装置は、メディア関連の機能を実行できませんが、IOA との通信は可能です。 |
| 「読み取り/書き込み保護 (Read/write protected)」 | 「読み取り/書き込み保護 (Read/write protected)」 |
| 「DPY/障害発生 (DPY/Failed)」 | この装置は、デバイス・パリティ保護のあるディスク装置サブサーバーの一部です。このディスク装置のデバイス・パリティ・セット内で障害が発生し、デバイス・パリティ・セットのデータ保護が失われました。 |
| 「DPY/アクティブ (DPY/Active)」 | この装置は、デバイス・パリティ保護のあるディスク装置サブサーバーの一部です。この装置は操作可能であり、入力または出力操作を受け入れることのできる状態です。 |
| 「パフォーマンス低下 (Performance degraded)」 | 装置は機能していますが、他のハードウェア障害 (例: IOA キャッシュの問題) のためにパフォーマンスが影響を受けている可能性があります。 |
| 「DPY/保護なし (DPY/Unprotected)」 | この装置は、デバイス・パリティ保護のあるディスク装置サブサーバーの一部です。他の資源の障害のために、データ保護はもはや有効ではありません。 |
| 「DPY/再構築中 (DPY/Rebuilding)」 | この装置は、デバイス・パリティ保護のあるディスク装置サブサーバーの一部です。データ保護の再構築中です。 |
| 「フォーマットが必要 (Format Required)」 | この IOA でこのディスク装置を使用するには、ディスク装置をフォーマットする必要があります。 |

ディスク・ハードウェア移行

ディスク装置をある入出力アダプターから別の種類の入出力アダプターに移行することは、多くの場合簡単な作業です。しかし、移行パスによっては、複雑になる場合があります。下記の表は、さまざまな移行シナリオと、そのために必要な処置を示しています。

表 11. アダプターの移行

| 移行前のアダプター | 移行後のアダプター | 説明 |
|-----------|-----------|--|
| 2748 | 2748 | これらのアダプターの間では、ディスク装置を相互に自由に移動できます。特に処置は不要です。 |
| 2763 | 2763 | |
| 2778 | 2778 | |

表 11. アダプターの移行 (続き)

| 移行前のアダプター | 移行後のアダプター | 説明 |
|--------------------------------------|--------------------------------------|--|
| 2757 2782 | 2757 2782 | これらのアダプターの間では、ディスク装置を相互に自由に移動できます。特に処置は不要です。 |
| 2748 2763 2778 | 2757 2782 | このバスについては、ディスク装置を自由に移動できます。パリティ保護装置は、特に意識することなく RAID 5* から RAID 5** パリティ・レイアウトへと変換されます。 |
| 2757 2782 | 2748 2763 2778 | 無保護ディスク装置については、このバスを自由に移動できます。パリティ保護されているディスク装置を移動するには、関連するディスク装置の保管および復元操作が必要です。 |
| 2748 2757 2763 2778 2782 | 5702 | ディスク装置の移動には、保管および復元操作が必要です。ディスク装置を新しいアダプターに取り付けた後で、それを初期化およびフォーマットする必要があります。 |
| 5702 | 2748 2757 2763 2778 2782 | ディスク装置の移動には、保管および復元操作が必要です。ディスク装置を新しいアダプターに取り付けた後で、それを初期化およびフォーマットする必要があります。 |
| 2780 5702 5703 | 2780 5703 | これらのアダプターの間では、ディスク装置を相互に自由に移動できます。特に処置は不要です。 |
| 2780 5703 | 5702 | 512 フォーマット済み装置を自由に移動できます。522 フォーマット済み装置の移動には、保管および復元操作が必要です。ディスク装置を取り付けた後で、それを初期化およびフォーマットする必要があります。 |
| 2780 5703 | 2748 2757 2763 2778 2782 | ディスク装置の移動には、保管および復元操作が必要です。ディスク装置を新しいアダプターに取り付けた後で、それを初期化およびフォーマットする必要があります。 |
| 2748 2757 2763 2778 2782 | 2780 5703 | ディスク装置の移動には、保管および復元操作が必要です。ディスク装置を新しいアダプターに取り付けた後で、それを初期化およびフォーマットする必要があります。 |

Linux for iSeries サーバーの入手

Linux はオープン・ソースのオペレーティング・システムです。Linux をソース形式で入手して、個人または企業組織でこれを構築することができます。

Linux オープン・ソース・コードでは、プログラマーによるフィードバックおよびさらなる開発を歓迎します。Linux 開発者たちは、特別なニーズを満たすために独自のオペレーティング・システムのディストリビューションを設計し、ソース・コードを Linux コミュニティーの利用者向けに自由に配布するよう努めています。

すべての Linux ディストリビューションには、類似した Linux カーネルおよび開発ライブラリーが含まれています。Linux ディストリビューターは、Linux サーバーのインストールと保守に役立つさまざまなカスタム・コンポーネントを提供しています。別のディストリビューターの Linux バージョンをインストールする前に、Power PC および iSeries ハードウェア用のカーネルがコンパイル済みであることを確認してください。これを行わないと、サーバーが誤って構成されて、論理区画で Linux を実行できない可能性があります。

多くのディストリビューターは、Internet または CD-ROM を介して Linux を提供しています。

論理区画を実行できるようにするための新しいサーバーのオーダーまたは既存のサーバーのアップグレード

LPAR 検証ツールは、LPAR 構成をエミュレートし、計画された区画が有効であることを検証します。

さらに、LPAR 検証ツールを使用して、OS/400 および Linux ハードウェアのサーバーへの配置をテストできるので、有効な配置を行うことができます。

IBM 営業担当員または IBM ビジネス・パートナーと連絡をとってオーダーします。iSeries コンフィギュレーターを使用してオーダーすることもできます。コンフィギュレーターは、Linux 区画が定義される時に、IOP なしの IOA のオーダーをサポートするように拡張されています。

論理区画における Linux をサポートする資源を持つサーバーをオーダーする場合は、フィーチャー・コード 0142 を指定してください。

関連情報

Dynamic Logical Partitioning

Linux を実行する論理区画の作成

Linux を iSeries 上にインストールするために必要なステップを説明します。

HMC によって管理されていない V5R1 またはそれ以降の OS/400 のある iSeries サーバー上に、Linux を実行するための区画を構成し始める前に、手引きとして計画のトピックを参照してください。さらに、論理区画を作成する前に、論理区画に関する基本的概念も習得しておく必要があります。

サーバー構成を変更する前に、サーバー全体のバックアップを取っておくことをお勧めします。サーバー全体のバックアップの実行については、バックアップおよびリカバリーの手順を参照してください。

関連情報

区画化 (Squadron Linux) (Partitioning for Squadron Linux)

バックアップおよび回復

2 ページの『論理区画における Linux 実行の計画』

iSeries サーバーを Linux 用に構成する前に、ソフトウェアおよびハードウェア資源の計画と評価を注意深く行う必要があります。

論理区画の構成

iSeries サーバー上の論理区画は、OS/400 オペレーティング・システムではない Linux をサポートできません。

注: 論理区画で Linux を実行するには、1 次区画で HMC なしに V5R1 またはそれ以降を実行していなければなりません。

前提条件

サーバーのバックアップ

サーバー上に新しい区画を作成する前に参照して、サーバー全体のバックアップを実行してください。

保守ツール・サーバーの構成

論理区画機能を利用するには、まず保守ツール・サーバーを構成する必要があります。

iSeries ナビゲーター

iSeries ナビゲーターには、論理区画の作成に役立つグラフィカル・ウィザードがあります。iSeries ナビゲーターは iSeries Access for Windows[®] に同梱されていますが、これを使用するために iSeries Access ライセンスは必要ありません。詳細情報は、iSeries のヘルプ・トピックをご覧ください。

論理区画を作成するには、以下のステップに従ってください。

1. iSeries で、「**ユーザー接続**」(またはアクティブな環境)を展開します。
2. サーバーの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開して、「**論理区画**」を選択します。
4. 物理サーバーを右クリックして、「**区画の構成 (Configure Partitions)**」を選択します。
5. 「論理区画の構成」画面から、「**物理システム (Physical System)**」を右クリックして「**新規の論理区画 (New Logical Partitions)**」を選択すると、ウィザードが開始します。

関連情報

リリース別 OS/400 論理区画機能

入出力アダプター (IOA) の論理区画への割り当て

入出力アダプターを論理区画に割り当てる方法を説明します。

ハードウェア構成を変更する前に、LPAR 検証ツール (LVT) を使用してください。このツールを使用すれば、OS/400 およびサーバー内の論理区画ハードウェアの配置をテストして、配置が有効かどうかを確認することができます。LVT によって生成される出力はハードウェアの配置を検証し、論理区画を正しく構成するうえで役立ちます。

注: 論理区画のアダプターを誤って配置すると、論理区画の動作は予測できなくなります。

論理区画で、通信回線、ディスク装置、内部テープ装置および CD 装置などの実ハードウェア装置を使用したい場合、制御 IOA を論理区画に明示的に割り当てる必要があります。これらの手順は、仮想イーサネット、仮想ディスク、仮想 CD、またはホストの OS/400 区画によって提供される仮想テープなどの仮想装置には適用されません。

IOA を識別する論理は、それらが接続される IOP に入っています。論理区画の場合、IOA は IOP に接続されず、その ID は判別できません。実際に、論理区画によって使用されるカード位置は、以下の説明のいずれか 1 つを持ちます。

空位置: IOA はインストールされていません。

占有位置: IOA はインストールされていますが、論理区画には割り当てられておらず、それが割り当てられる論理区画によってサポートされていません。

通信 IOA: 資源は通信アダプターで、それが割り当てられる論理区画によってサポートされます。

複数機能 IOA: 資源は複数機能アダプターで、それが割り当てられる論理区画によってサポートされません。

ディスク・コントローラー: 資源はディスク・コントローラーで、それが割り当てられる論理区画によってサポートされます。

汎用アダプター: IOA がインストールされており、それが割り当てられる論理区画によってサポートされます。

記憶域 IOA: 資源は記憶域アダプターで、それが割り当てられる論理区画によってサポートされます。

このように識別が非特定であるため、論理区画によって使用されるカード位置の論理および物理アドレスをメモすることは非常に重要です。論理区画は、IOA があるバスへのアクセスがなければなりません。唯一の制限は、バスが OS/400 区画と共用されている場合は、OS/400 区画はそれを共用で所有しなければならず (所有共用)、論理区画は、共用で使用しなければなりません (使用共用)。

論理区画は、IOA があるバスへのアクセスがなければなりません。唯一の制限は、バスが OS/400 区画と共用されている場合は、OS/400 区画はそれを共用で所有しなければならず (所有共用)、論理区画は、共用で使用しなければなりません (使用共用)。

関連概念

32 ページの『直接接続された LAN アダプター』

Linux を実行する論理区画には、独自の LAN アダプターを設置することができます。

7 ページの『Linux を実行する論理区画における、直接接続された入出力』

直接接続された入出力を使用すれば、Linux がハードウェア資源を直接管理し、すべての入出力資源は Linux オペレーティング・システムによって制御されるようになります。

バス所有権タイプの変更 (共用バス所有権の場合)

バスの所有権を変更するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」(またはアクティブな環境)を展開します。
2. サーバーの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開して、「**論理区画**」を選択します。
4. 「**論理区画**」を右クリックして、「**区画の構成 (Configure Partitions)**」を選択します。「**論理区画の構成**」ウィンドウが表示されます。
5. 所有権を変更するバスを右クリックして、「**プロパティ**」を選択します。
6. 「**区画 (Partitions)**」ページを選択します。

7. バスを所有する区画を「**論理区画の所有 (Owning logical partition)**」で選択して、「**共用**」を選択します。 所有権タイプが共用であれば、バスを共用している区画がリストに表示されます。これらのオプションについてさらに情報が必要な場合は、「**ヘルプ**」をクリックしてください。
8. 「**OK**」をクリックします。

未割り当て IOA の論理区画への移動

未割り当て IOA を論理区画に移動するには、以下のステップに従ってください。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」(またはアクティブな環境)を展開します。
2. サーバーの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開して、「**論理区画**」を選択します。
4. 「**論理区画**」を右クリックして、「**区画の構成 (Configure Partitions)**」を選択します。「**論理区画の構成**」ウィンドウが表示されます。
5. 移動したい IOA を右クリックして、「**移動**」を選択します。
6. IOA を受け取る論理区画を、「**移動先 -- 論理区画 (Move to -- Logical partition)**」で選択します。
7. 「**OK**」をクリックします。指定した IOA が移動します。

未割り当て IOA の OS/400 区画への移動

これを行うには、ハードウェア・サービス・マネージャーを使用する必要があります。このツールの使用法を十分に理解していない場合、ハードウェア・サービス担当者に問い合わせてください。この操作は、同時保守の使用法を十分理解しているユーザーのみが行うべきです。不適切な方法で操作した場合、装置が誤って構成される可能性があります。

注: この手順は、いずれかのハードウェアで障害が発生しているとマークされている場合は実行しないでください。これは、すべてのサーバー・ハードウェアが完全に機能している場合にのみ実行すべきです。

未割り当て IOA を OS/400 パーティションに移動するには、以下のステップに従ってください。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」(またはアクティブな環境)を展開します。
2. サーバーの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開して、「**論理区画**」を選択します。
4. 「**論理区画**」を右クリックして、「**区画の構成 (Configure Partitions)**」を選択します。「**論理区画の構成**」ウィンドウが表示されます。
5. 移動したい IOA を右クリックして、「**移動**」を選択します。
6. IOA を受け取る論理区画を、「**移動先 -- 論理区画 (Move to -- Logical partition)**」で選択します。
7. 「**OK**」をクリックして、指定した IOA を移動します。
8. IOP が希望の区画に属していることを確認します。IOP が希望の区画に属していない場合は、その IOP を移動させます。
9. OS/400 コマンド行で STRSST と入力して、**Enter** を押します。
10. 「**開始保守ツール (STRSST) サインオン (Start Service Tools (STRSST) Sign On)**」画面で、保守ツールのユーザー ID とパスワードを入力して、**Enter** を押します。
11. 「**システム保守ツール (SST) (System Service Tools (SST))**」画面で、オプション **1** (保守ツールの開始 (Start a service tool)) を選択して **Enter** を押します。
12. 「**保守ツールの開始**」画面で、オプション **7** (ハードウェア保守管理機能) を選択して、**Enter** を押します。

13. 「パッケージ・ハードウェア資源」画面で、IOA が入っているシステム装置またはシステム拡張装置の横の、オプション 9 (パッケージ内に含まれたハードウェア (Hardware contained within package)) を選択して、**Enter** を押します。
14. 希望する IOA の横にあるオプション 5 (詳細の表示 (Display Detail)) を選択して、**Enter** を押します。資源名、フレーム ID、およびカード位置に注意してください。
15. 「パッケージ・ハードウェア資源」画面に戻って、使用可能にしたい IOA の横のオプション 3 (並行保守 (Concurrent maintenance)) を選択し、**Enter** を押します。
16. 「ハードウェア資源の同時保守 (Hardware Resource Concurrent Maintenance)」画面で、選択した IOA の横のオプション 9 (制御資源の処理 (Work with controlling resource)) を選択し、**Enter** を押します。
17. 「制御資源 (Controlling resource)」画面で、IOA の横のオプション 7 (割り当て先 (Assign to)) を選択し、**Enter** を押します。IOA のタイプ/モデル、シリアル番号、および部品番号を検査します。
18. 「入出力資源の確認 (Confirm Add I/O resources)」画面で、論理アドレスを検査することによって、希望する IOA が追加されていることを検査し、**Enter** を押します。
19. 「表示」を選択して、iSeries Navigator インターフェースを「最新表示」します。
20. 「物理システム (Physical System)」を右マウス・ボタン・クリックして、「回復」→「非レポート区画資源のクリア (Clear non-reporting partitioning resources)」を選択します。

IOP に割り当てられた IOA の論理区画への移動

このアクションは、論理区画から IOP が除去できる場合に実行すべきです。

IOP に割り当てられた IOA を論理区画に移動するには、以下のステップに従ってください。

1. 移動させたい入出力プロセッサに接続された装置が、使用中でないことを確認します。この装置はオフに変更されており、使用不可のハードウェアとしてリストされたものであるべきです。
2. iSeries ナビゲーターで、「ユーザー接続」(またはアクティブな環境) を展開します。
3. サーバーの 1 次区画を選択します。
4. 「構成およびサービス」を展開して、「論理区画」を選択します。
5. 「論理区画」を右クリックして、「区画の構成 (Configure Partitions)」を選択します。「論理区画の構成」ウィンドウが表示されます。
6. 移動したい入出力プロセッサがある区画を選択します。
7. 移動したい入出力プロセッサを右クリックして、「移動」を選択します。
8. 「ソース区画からハードウェア資源情報を除去 (Remove hardware resource information from source partition)」ボックスを選択します。
9. 「移動先 -- 論理区画 (Move to -- Logical Partition)」で「未割り当てハードウェア (Unassigned Hardware)」を選択し、IOP を受け取ります。
10. 「OK」をクリックして、指定した IOP を移動します。
11. IOP が「未割り当てハードウェア (Unassigned Hardware)」と示されていることを検査します。
12. 移動したい IOA を右クリックして、「移動」を選択します。
13. IOA を受け取る論理区画を、「移動先 -- 論理区画 (Move to -- Logical Partition)」で選択します。
14. 「OK」をクリックして、指定した IOA を移動します。
15. ステップ 12 - 14 を繰り返して、複数の IOA を移動します。
16. IOP を、それを所有している論理区画に戻します。

IOP に割り当てられた IOA の論理区画への割り当て

このアクションは、論理区画から IOP が除去できない場合に実行すべきです。

これを行うには、ハードウェア・サービス・マネージャーを使用する必要があります。このツールの使用法を十分に理解していない場合、ハードウェア・サービス担当者にお問い合わせください。この操作は、同時保守の使用法を十分に理解しているユーザーのみが行うべきです。不適切な方法で操作した場合、装置が誤って構成される可能性があります。

1. 希望する IOA が割り当てられる IOP を所有するパーティションの OS/400 コマンド行で STRSST と入力して **Enter** を押します。
2. 「開始保守ツール (STRSST) サインオン (Start Service Tools (STRSST) Sign On)」画面で、保守ツールのユーザー ID とパスワードを入力して、**Enter** を押します。

注: 保守ツールのユーザーは、管理者権限を持っている必要があります。

3. 「システム保守ツール (SST) (System Service Tools (SST))」画面で、オプション 1 (保守ツールの開始 (Start a service tool)) を選択して **Enter** を押します。
4. 「保守ツールの開始」画面で、オプション 7 (ハードウェア保守管理機能) を選択して、**Enter** を押します。
5. 「ハードウェア保守管理機能」画面で、オプション 1 (パッケージ・ハードウェア資源 (Packaging hardware resources)) を選択し、**Enter** を押します。
6. 「パッケージ・ハードウェア資源」画面で、IOA が入っているシステム装置またはシステム拡張装置の横の、オプション 9 (パッケージ内に含まれたハードウェア (Hardware contained within package)) を選択して、**Enter** を押します。
7. 希望する通信ポートの横にあるオプション 5 (詳細の表示) を選択して、**Enter** を押します。資源名、フレーム ID、およびカード位置に注意してください。
8. 「パッケージ・ハードウェア資源」画面に戻って、使用可能にしたい通信ポートの横のオプション 3 (並行保守) を選択し、**Enter** を押します。
9. 「ハードウェア資源の同時保守 (Hardware Resource Concurrent Maintenance)」画面で、選択した IOA の横のオプション 9 (制御資源の処理 (Work with controlling resource)) を選択し、**Enter** を押します。
10. 「制御資源の処理 (Work with Controlling Resource)」画面で、表示されている IOP の横のオプション F7 (解放) を選択して、**Enter** を押します。
11. 資源名を確認して、希望する IOP/IOA 接続が解放されていることを確認し、**Enter** を押します。IOA は IOP によっては制御されなくなっているため、「占有位置」と示されます。後続のステップは、「LPAR 構成 (LPAR configuration)」画面を使用して実行します。
12. 1 次区画の OS/400 コマンド行で、STRSST と入力して **Enter** を押します。
13. 「開始保守ツール (STRSST) サインオン (Start Service Tools (STRSST) Sign On)」画面で、保守ツールのユーザー ID とパスワードを入力して、**Enter** を押します。

注: LPAR 構成を変更するには、LPAR 管理権限が必要です。

14. 「システム保守ツール (SST) (System Service Tools (SST))」画面で、オプション 5 (サーバーの処理 (Work with servers)) を選択して **Enter** を押します。
15. 「システム区画の処理 (Work with System Partitions)」画面で、オプション 1 (区画情報の表示 (Display partition information)) を選択します。
16. 「区画情報の表示 (Display Partition Information)」で、オプション 5 (サーバー入出力資源の表示 (Display server I/O resources)) を選択します。

17. 「システム入出力資源の表示 (Display System I/O Resources)」画面で、 **F10** を 2 度押して、物理アドレスを表示します (フレーム ID およびカード位置)。
18. 希望する占有位置を、フレーム ID およびカード位置を使用して見つけます。 **F10** を 2 度押して、所有権情報を表示してそれをメモします。バス所有権は共用する必要があります。 **F10** をさらに 3 度押して、関連付けられている論理アドレスを表示してそれをメモします。
19. 「システム区画の処理 (Work with System Partitions)」画面に戻って、 オプション **3** (区画構成の処理 (Work with partition configuration)) を選択し、 **Enter** を押します。
20. 「区画構成の処理 (Work with Partition Configuration)」画面で、希望する占有位置を所有する区画の横のオプション **4** (入出力資源の除去 (Remove I/O resources)) を選択します。

注: これはそれが表示されるバスの所有者になります。

21. 「入出力資源の除去 (Remove I/O Resources)」画面で、希望する占有位置の横のオプション **2** (ハードウェア資源の除去とクリア (Remove and clear hardware resources)) を選択して、 **Enter** を押します。バス所有権は共用する必要があります。
22. 「除去する入出力資源の確認 (Confirm Remove I/O Resources)」画面で、論理アドレスを検査することによって、希望する占有位置が除去されていることを確認し、 **Enter** を押します。
23. 「区画構成の処理 (Work with Partition Configuration)」画面に戻って、占有位置を追加したい論理区画の横のオプション **3** (入出力資源の追加) を選択し、 **Enter** を押します。
24. 「入出力資源の追加 (Add I/O Resources)」画面で、論理区画に割り当てられる占有位置の横でオプション **1** (占有所有 (Own dedicated)) を選択します。論理区画にバスへのアクセスがない場合は、占有位置の横のオプション **3** (共用でバスを使用 (Use bus shared)) と **1** を選択します。
25. 「入出力資源の確認 (Confirm Add I/O resources)」画面で、論理アドレスを検査することによって、希望する IOA が追加されていることを検査し、 **Enter** を押します。
26. 「システム保守ツール (SST) (System Service Tools (SST))」画面で、 オプション **5** (サーバーの処理 (Work with servers)) を選択して **Enter** を押します。
27. 「システム区画の処理 (Work with System Partitions)」画面で、 オプション **4** (構成データの回復 (Recover configuration data)) を選択し、 **Enter** を押します。
28. 「構成データの回復 (Recover Configuration Data)」画面で、 オプション **4** (非レポート論理区画資源のクリア (Clear non-reporting logical partitioning resources)) を選択して、 **Enter** を押します。

ネットワーク・サーバー記述とネットワーク・サーバー記憶スペースの作成

ネットワーク・サーバー記述 (NWS) は、構成に名前を付け、Linux 区画を開始および停止するためのインターフェースを提供し、Linux と仮想ディスクとの間のリンクを提供するために使用されます。

デフォルト・パラメーター値または推奨されるパラメーター値が、括弧の中に示されています。これらの設定値は、単に論理区画にのみ当てはまります。パラメーターについての詳細説明は、NWS パラメーターとその説明を参照してください。

Linux を実行する論理区画の仮想ディスクを作成するには、以下のステップに従ってください。

1. ホスト区画上の OS/400 コマンド行で、CRTNWS を入力してプロンプトの **F4** を押します。
2. 「ネットワーク・サーバー説明の作成 (From the Create Network Server Description)」画面で、以下の情報を入力します。

NWS (NWS の名前)

RSRCNAME (*NONE) TYPE (*GUEST)

ONLINE (*NO または *YES)

PARTITION (Linux 区画の名前)
CODEPAGE (437)
TCPPOPTCFG (*NONE)
RSTDDEVSRSC (仮想 CD および磁気テープ装置用) (*NONE)
SYNCTIME (*TYPE)
IPLSRC (*NWSSTG)

重要: ストリーム・ファイルのカーネルを使って NWSD を開始するには、IPLSRC パラメーターを *STMF に設定し、IPLPATH パラメーターがカーネルをポイントするように設定します。これによって、カーネルのみがロードされます。いったんカーネルを実行し始めると、ルート・ファイル・システムを検出する必要があります。初期インストールでは、カーネルに物理的に接続されている RAM ディスクがルート・ファイル・システムになっている可能性があります。

NWSSTG の区画にカーネルを保管して、そこから開始することも可能です。NWSSTG の区画タイプは "PreP Boot" (type0x41) でなければならず、開始可能になっている必要があります。

IPLSTMF (*NONE)

重要: これは、ストリーム・ファイルからのカーネル開始を指定した場合のロード元のファイルです。オンに変更するコマンドを使用するには、ファイルおよびパスをあらかじめ読み取っておく必要があります。

IPLPARM (*NONE)

3. 「ネットワーク・サーバー記憶スペースの処理 (Work with Network Server Storage Spaces) (WRKNWSSTG)」から、オプション 11 (ネットワーク・サーバー記憶スペースの作成 (Create Network Server Storage Space)) を選択して、**Enter** キーを押します。

4. 以下の情報を入力します。

NWSSTG (名前)

NWSSIZE (ご希望の Linux ディストリビューターのインストールに関する資料を参照してください)

FROMNWSSTG (*NONE)

FORMAT (*OPEN)

5. **Enter** を押します。

重要: ネットワーク・サーバー記憶スペースは、1 つの記憶スペースに関して最大で 1000 GB にすることができます。1 つのサーバーに対して、最大で 64 個の記憶スペースをリンクできます。

6. 作成したばかりの記憶スペースの隣のオプション 10 (リンクの追加 (Add link)) を選択して **Enter** を押し、「サーバー記憶域リンクの追加 (ADDNWSSTGL)」で以下の情報を入力します。

NWSSTG (名前)

NWSD (名前)

DYNAMIC (*YES)

DRVSEQNBR (*CALC)

関連情報

47 ページの『ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) のパラメーターと説明』

ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) は、構成に名前を付け、Linux 区画を開始および停止するためのインターフェースを提供し、Linux と仮想ディスクとの間のリンクを提供するために使用されます。

論理区画用 LAN コンソールの構成

オペレーション・コンソールは、iSeries Access for Windows に含まれるインストール可能なコンポーネントの 1 つです。これを使用すれば、PC をサーバー・コンソールとして使用したり、コントロール・パネル機能を実行することができます。

オペレーション・コンソールを使用して、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) 上の iSeries サーバーを管理できます。さらに、さまざまな場所 (例: 他の LAN) にあるいくつかの iSeries サーバーをリモート管理することもできます。サーバーのセキュリティを向上するために、コンソールと iSeries サーバーの間のすべてのトラフィックが暗号化されます。

LAN ベースのオペレーション・コンソールがすでにセットアップされている場合、同じ接続を使用して Linux コンソールを実装できます。こうすることの利点は、iSeries サーバーとコンソールとの間で、Linux コンソールのすべてのトラフィックが暗号化されることです。

オペレーション・コンソール LAN 接続を使用して Linux コンソールを実装するには、仮想コンソールへの接続で説明されている Telnet コマンドと同じものを使用します。ただし、オペレーション・コンソールを実行中の PC からコマンドを実行する必要があります。TCP/IP アドレス 127.0.0.1 とポート 2301 を Telnet コマンドで使用する必要があります。127.0.0.1 は、TCP/IP ではローカル・サーバーとして設計済みです。これによって、Telnet プログラムがオペレーション・コンソール・プログラムに接続し、さらに Telnet クライアントが Linux コンソールに接続されます。

オペレーション・コンソール・プログラムが複数の iSeries サーバーに接続される場合、現在のところ、Linux コンソールの接続先サーバーを指定することは不可能です。したがって、Linux コンソール・サポートを利用する場合、オペレーション・コンソール・クライアントを同時にただ 1 つの iSeries サーバーに接続するようお勧めします。

iSeries サーバーへの直接的な Telnet 接続に代わる方法として、オペレーション・コンソール・プログラムを使用して Linux コンソールに接続することもできます。

関連タスク

『仮想コンソールの接続』

仮想コンソールは、Linux サーバーのコンソール機能を提供します。

関連情報

オペレーション・コンソール

仮想コンソールの接続

仮想コンソールは、Linux サーバーのコンソール機能を提供します。

仮想コンソールは、主に Linux の初期インストール時に使用されます。仮想コンソールは、サーバー・エラーを表示したり LAN への通信を復元するために使用することもできます。このコンソール接続は、TCP/IP を構成する前に使用されます。

任意の Telnet クライアントを Linux コンソールとして使用することができます。複数の Telnet クライアントが、同じ仮想コンソールへのアクセスを共用できます。コンソールに接続するには、1 次区画またはサーバーのポート 2301 に Telnet でログインする必要があります。TCP/IP が、少なくとも 1 つの OS/400 区画上で構成され実行されている必要があります。以下の例では、IBM Personal Communications クライアントを使用しています。

NWSD を開始して停止するには、以下のいずれかの方式を使用してください。

関連概念

24 ページの『論理区画用 LAN コンソールの構成』

オペレーション・コンソールは、iSeries Access for Windows に含まれるインストール可能なコンポーネントの 1 つです。これを使用すれば、PC をサーバー・コンソールとして使用したり、コントロール・パネル機能を実行することができます。

関連情報

論理区画権限

IBM Personal Communications を使用した仮想コンソールへの接続

IBM Personal Communications を使用して仮想コンソールに接続するには、以下のステップを実行してください。

1. 「スタート」ボタンから、「**IBM Personal Communications**」、「**セッションの開始または構成 (Start or Configure Session)**」を選択します。
2. 「通信のカスタマイズ (Customize Communication)」画面から、ホストのタイプとして **ASCII** を選択し、**リンク・パラメーター**を選択します。
3. 「Telnet ASCII」画面から、1 次区画またはサーバーのホスト名または IP アドレスを入力し、1 次区画またはホスト区画のポート番号 **2301** を入力して「**OK**」を押します。
4. 「OS/400 ゲスト区画コンソール (OS/400 Guest Partition Console)」画面から、コンソールとして接続したい区画を選択します。
5. Linux 区画に接続するための OS/400 サービス・ツール ID およびパスワードを入力します。

MS DOS コマンドを使用した仮想コンソールへの接続:

MS DOS コマンドを使用して仮想コンソールに接続するには、以下のステップを実行してください。

1. MS DOS コマンド・プロンプトから、サーバーとポート 2301 に Telnet でログインします (`telnet xxxxxx 2301`)。
2. コンソールとして接続したい区画を選択します。
3. Linux 区画に接続するための OS/400 サービス・ツール ID およびパスワードを入力します。

Linux 仮想コンソールを使用するには、Linux 区画用のリモート・パネル特権が必要です。QSECOFR サービス・ツール・ユーザー ID では、Linux コンソールを使用できません。

論理区画への Linux のインストール

iSeries 上の論理区画への Linux のインストール情報。

Linux を区画にインストールする前に、iSeries サーバーが Linux を実行するよう構成する必要があります。

現在 IBM 社は、iSeries サーバー上で Linux をサポートする IBM ビジネス・パートナーと協力しています。Linux を iSeries にインストールする方法について、ご希望の Linux ディストリビューターが詳細な資料を提供する予定です。

関連タスク

26 ページの『統合ファイル・システム内の CD-ROM イメージからの Linux のインストール』

ほとんどの Linux ディストリビューターは、Web サイトからダウンロード可能な ISO CD-ROM イメ

ージを提供しています。Linux インストール・アクション用の実際のディストリビューション CD が複数ある場合、ISO ファイル・イメージを使用すれば、iSeries サーバー上のディレクトリーから簡単にインストールすることができます。

17 ページの『論理区画の構成』

iSeries サーバー上の論理区画は、OS/400 オペレーティング・システムではない Linux をサポートできます。

関連情報

Linux on iSeries

統合ファイル・システム内の CD-ROM イメージからの Linux のインストール

ほとんどの Linux ディストリビューターは、Web サイトからダウンロード可能な ISO CD-ROM イメージを提供しています。Linux インストール・アクション用の実際のディストリビューション CD が複数ある場合、ISO ファイル・イメージを使用すれば、iSeries サーバー上のディレクトリーから簡単にインストールすることができます。

Linux のインストールに使用する ISO イメージには、以下のいずれかの記述が適用されます。

- アンロード: このオプションによって、光ディスク・イメージを仮想光ディスク装置からアンロードできます。アンロードできるイメージは、ロードされた状況にあるイメージのみです。
- ロード: このオプションによって、光ディスク・イメージを仮想光ディスク装置にロードできます。ロードできるイメージは、アンロードされた状況にあるイメージのみです。
- マウント: このオプションによって、光ディスク・イメージを仮想光ディスク装置にマウントし、活動化することができます。マウントできるイメージは、ロードされた状況にあるイメージのみです。

統合ファイル・システムに保管された CD-ROM イメージからインストールするには、以下のステップに従ってください。

重要: 以下の一連のコマンドを実行するのは、初期セットアップのときだけです。

1. OS/400 コマンド行で、コマンド CRTDEVOPT を入力して **Enter** を押します。
2. 「装置記述作成 (光ディスク) (Create Device Description (Optical))」画面で、以下の情報を入力して **Enter** を押します。
 - 「装置記述 (Device description)」(新しい装置記述の名前を指定します)
 - 「資源名 (Resource name)」(*VRT)
 - 「装置タイプ (Device type)」(*RSRCNAME)
3. OS/400 コマンド行で、コマンド CRTIMGCLG を入力して **Enter** を押します。
4. 「イメージ・カタログ作成 (Create Image Catalog)」画面で、以下の情報を入力して **Enter** を押します。
 - 「イメージ・カタログ名」と「ディレクトリー名」
5. OS/400 コマンド行で、コマンド WRKIMGCLGE を入力して **Enter** を押します。
6. 「イメージ・カタログ項目の処理 (Work with Image Catalog Entries)」画面で、光ディスク・イメージをイメージ・カタログに追加するために「追加」(オプション 1) を選択して、**Enter** を押します。

重要: ISO イメージを使用するためには、以下のコマンドを実行する必要があります。
7. OS/400 コマンド行で、コマンド WRKIMGCLGE を入力して **Enter** を押します。
8. 「イメージ・カタログ項目の処理 (Work with Image Catalog Entries)」画面で、以下を行います。

- a. 最初の CD イメージに関して「マウント (Mount)」(オプション 6) を選択します。
- b. 装置をオンに変更して、**Enter** を押します。 OS/400 コマンド行で、コマンド VRYCFG を入力して **Enter** を押します。
- c. 「装置をオンに変更 (Vary on the device)」画面で、以下の情報を入力します。
 - 「仮想光ディスク装置記述 (Virtual Optical Device Description)」
 - 「構成タイプ (Config Type)」(*DEV)
 - 「状況の変更 (Turn the status)」(*ON)
9. OS/400 コマンド行で、コマンド LODIMGCLG を入力して **Enter** を押します。
10. 「イメージ・カタログのロードまたはアンロード (Load or Unload Image Catalog)」画面で、以下の情報を入力して **Enter** を押します。
 - 「イメージ・カタログ (Image catalog)」(仮想光ディスク装置からロードするイメージ・カタログを指定します)
 - 「装置名 (Device name)」(イメージ・カタログのロード先となる仮想光ディスク装置の名前を入力します)
11. OS/400 コマンド行で、コマンド WRKOPTVOL を入力して **Enter** を押します。
12. 「光ディスク・ボリュームの処理 (Work with Optical Volumes)」画面で、表示されている情報が正しいことを確認します。
重要: 以下のコマンドによって、IFS 内の ISO イメージからインストールするためにネットワーク・サーバー記述がセットアップされます。
13. OS/400 コマンド行で、コマンド WRKCFGSTS を入力して **Enter** を押します。
14. 「構成状況の処理 (Work with Configuration Status)」画面で、以下の情報を入力します。インストールが開始します。2 枚目の CD を挿入するよう促されたら、以下のステップを行ってください。
重要: ISO イメージを変更するためには、以下のコマンドを実行する必要があります。
 - WRKCFGSTS *NWS
 - 8 Network Server Description
 - 2 Update
 - IPL source = *STMF
 - IPL stream file = /qopt/path to start image (これは、CD-ROM からアクセスする場合と同じです)
 - IPL parameters = *NONE WRKCFGSTS *NWS
 - 1 (区画をオンに変更)

インストールが開始します。2 枚目の CD を挿入するよう促されたら、以下のステップを行ってください。

重要: ISO イメージを変更するためには、以下のコマンドを実行する必要があります。

15. OS/400 コマンド行で、コマンド WRKIMGCLGE を入力して **Enter** を押します。
16. 「イメージ・カタログ項目の処理 (Work with Image Catalog Entries)」画面で、以下の情報を入力します (すべての CD がインストールされるまでこのステップを繰り返します)。
 - マウント済み CD の「アンロード (Unload)」(オプション 9)
 - 次の CD の「マウント (Mount)」(オプション 6)。

関連タスク

25 ページの『論理区画への Linux のインストール』
 iSeries 上の論理区画への Linux のインストール情報。

17 ページの『論理区画の構成』

iSeries サーバー上の論理区画は、OS/400 オペレーティング・システムではない Linux をサポートできません。

関連情報

Linux on iSeries

NWSD の開始と停止

Linux を実行している論理区画の IPL を実行するには、NWSD を開始して停止する (オフに変更してからオンに変更する) 必要があります。

NWSD を開始して停止するには、以下のいずれかの方式を使用してください。

関連タスク

63 ページの『論理区画の NWSD の復元』

災害時回復の状況では、すべての構成オブジェクトを復元します。これらのオブジェクトには、論理区画のネットワーク・サーバー記述 (NWSD) も含まれます。

iSeries ナビゲーターでの NWSD の停止

NWSD を停止するには、以下のようになります。

1. 「ネットワーク」、→ 「Windows 管理」、→ 「Integrated xSeries Server (統合 xSeries サーバー)」をクリックします。
2. 停止したい NWSD の名前を右クリックします。
3. 「シャットダウン (Shut Down)」をクリックします。

iSeries ナビゲーターでの NWSD の開始

NWSD を開始するには、以下のようになります。

1. 「ネットワーク」、→ 「Windows 管理」、→ 「Integrated xSeries Server (統合 xSeries サーバー)」をクリックします。
2. 開始したい NWSD の名前を右クリックします。
3. 「開始」をクリックします。

CL コマンドでの NWSD の停止

構成状況の処理 (WRKCFGSTS) CL コマンドを使用して NWSD を停止するには、以下のようになります。

1. WRKCFGSTS *NWS と入力して、**Enter** キーを押します。
2. 停止したい NWSD の隣に 2 と入力して、**Enter** キーを押します。

CL コマンドでの NWSD の開始

構成状況の処理 (WRKCFGSTS) CL コマンドを使用して NWSD を開始するには、以下のようになります。

1. WRKCFGSTS *NWS と入力して、**Enter** キーを押します。
2. 開始したい NWSD の隣に 1 と入力して、**Enter** キーを押します。

装置パリティ保護の開始

装置パリティ保護を、サーバーに新しいディスク・サブサーバーを取り付けた時点で開始します。

装置パリティ保護は、Linux で使用するために関連するディスク装置の構成作業を実行する前に開始しておく必要があります。というのは、その処置によりすべてのデータが失われることになるからです。パリティ・セットにインストールする場合は、インストールの前に論理区画を開始してレスキュー・モードにした後、下記の手順に従ってください。

注: ディスク・サブサーバーの要件に応じて、装置パリティ保護の作業で表示される画面がここに示す画面と違う場合があります。各手順で正しい処理を実行するためには、画面のタイトルを参照するようにしてください。

装置パリティ保護を開始するには、次のようにします。

1. 論理区画から SISCONFIG を開始します。
2. 「ディスク装置の処理 (Work with Disk Units)」メニューで、オプション 2 (「装置パリティ保護の処理 (Work with device parity protection)」) を選択します。
3. 「装置パリティ保護の処理 (Work with device parity protection)」画面で、オプション 2 (「装置パリティ保護の開始 (Start device parity protection)」) を選択し、実行キーを押します。「装置パリティ保護の開始 (Start device parity protection)」画面が表示されます。そこには、装置パリティ保護を開始できるディスク装置サブサーバーのリストが表示されます。
4. 装置パリティ保護を開始するディスク装置サブサーバーの横にある「オプション (Option)」欄に「1」を入力します。Enter キーを押します。

注: 異なる IOA に接続された複数のディスクを同時に選択できます。

5. 構成に問題があることをサーバーが検出すると、警告レポートが表示されます。構成は間違っていないと思われるのにパリティ保護を開始できる装置が表示されない場合は、/var/log/messages にあるエラー・ログを調べてください。これは手動で、またはオプション 4 (「ログの分析 (Analyze log)」) を使用して SISCONFIG によって実行できます。
6. 継続することにした場合、「装置パリティ保護開始の確認 (Confirm Starting Device Parity Protection)」画面が表示されます。この画面には、選択したディスク装置サブサーバーと、保護を開始可能な個々のディスク装置がすべて表示されます。
7. 選択したディスクが正しい場合、Enter キーを押します。
8. フォーマットおよびパリティ保護操作を開始してよい場合、c を押します。選択した装置のすべてのデータが失われます。ここで実行キーを押すと、装置パリティ保護を開始するための手順が開始されます。開始後は、完了まで実行が続けられます。
9. 選択したサブサーバーが正しい場合、実行キーを押して継続します。

論理区画における Linux の管理

このトピックでは、Linux を実行する区画の管理についての情報を提供します。

Linux を実行する区画を開始する方法や、論理区画と OS/400 区画の間で情報を交換および共有する方法について説明されます。区画の管理に関する追加情報は、論理区画の管理を参照してください。Linux に特有のタスク管理については、それぞれの Linux ディストリビューターの資料を参照してください。

関連情報

論理区画の計画

論理区画に必要な論理区画権限

保守ツールのユーザーに付与される権限は、そのユーザーがどのような論理区画情報にアクセスできるか、どのようなタスクを実行できるかを決定します。区画のセキュリティを管理するためには、保守ツール・ユーザー・プロフィールに特権を割り当てる際に注意が必要です。

論理区画と関係のある保守ツール機能の特権には 2 つあります。これらの特権は、基本操作または拡張管理をサポートします。

以下の表は、論理区画のタスクを完了するために必要な権限を示しています。

表 12. 論理区画権限：この表は、論理区画のタスクを完了するために必要な権限を示しています。

| 機能 | 管理者権限 | 操作権限 |
|------------------------|-------|------|
| 区画の NWSD のバックアップ | X | |
| 論理区画の作成 | X | |
| 論理区画のホスト情報の変更 | X | |
| 論理区画用ディスク・ドライブの削除 | X | |
| 論理区画用 NWSD の削除 | X | |
| 2 次区画の稼働環境の表示 | X | X |
| 2 次区画用の参照コード・ヒストリーの表示 | X | X |
| 論理区画のサーバー構成の印刷 | X | X |
| 論理区画用 NWSD の復元 | X | |
| 論理区画構成データの保管 | X | X |
| 論理区画からのディスク・ドライブのリンク解除 | X | |
| NSWD をオフに構成変更する | X | |
| NSWD をオンに構成変更する | X | |

関連情報

論理区画権限

ハードウェア構成の表示および変更

サーバーのハードウェア構成を表示および変更する方法については、以下のトピックを参照してください。

論理区画用のコンソール・ログの表示

論理区画用のコンソール・ログの表示を使用して、Linux を実行している論理区画のコンソール情報を見ることができます。

この操作は、1 次区画上のサーバー保守ツール (SST) または専用保守ツール (DST) が実行できます。「ゲスト環境コンソール・ログの表示 (Display Guest Environment Console Log)」画面を利用するには、以下のステップに従ってください。

- 1 次区画で、SST または DST を開始します。
- 「SST で、オプション 5 (サーバーの処理 (Work with servers)) を選択して **Enter** を押します。
- DST の場合はオプション 11 (サーバーの処理 (Work with servers)) を選択して **Enter** を押します。
- オプション 1 (区画情報の表示 (Display partition information)) を選択して **Enter** を押します。

5. オプション **10** (論理環境コンソール・ログの表示 (Display logical environment console log)) を選択して **Enter** を押します。

「ゲスト環境コンソール・ログの表示 (Display Guest Environment Console Log)」に、論理区画のコンソール情報が表示されます。

2 次区画の稼働環境の表示

区画稼働環境の表示ディスプレイを使用して、各論理区画で実行中のオペレーティング・システムのリリースを表示できます。

各区画のオペレーティング・システムを表示するには、以下のステップを実行してください。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」(またはアクティブな環境) を展開します。
2. サーバーの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開して、「**論理区画**」を選択します。
4. 区画を右マウス・ボタン・クリックして「**プロパティ**」を選択します。
5. 「**一般**」ページを選択してオペレーティング・システムを表示します。このフィールドについてさらに情報が必要な場合は、「**ヘルプ**」をクリックしてください。
6. 「**OK**」をクリックします。

2 次区画用の参照コード・ヒストリーの表示

参照コードは、状況またはエラー条件を示します。

サーバーは、2 次区画用の参照コード・ヒストリー (最後の 200 個の参照コード) を記録します。

論理区画用のサーバー参照コード・ヒストリーを表示するには、以下のステップに従ってください。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」(またはアクティブな環境) を展開します。
2. サーバーの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開して、「**論理区画**」を選択します。
4. **論理区画**を右クリックして、「**プロパティ**」を選択します。
5. 「**参照コード (Reference Code)**」ページを選択して、最近の 200 個のサーバー参照コードのリストを表示します。このフィールドについてさらに情報が必要な場合は、「**ヘルプ**」をクリックしてください。
6. 「**OK**」をクリックします。

関連資料

71 ページの『Linux のシステム参照コード (SRC)』

次のリストには、Linux に固有の SRC と推奨される修正処置が示されています。

論理区画のホスト情報の変更

ホストされる論理区画は、一部または全部の入出力資源に関して、OS/400 区画に依存します。ホスト OS/400 区画は、1 次区画または 2 次区画のどちらでも差し支えありません。

論理区画のホスト情報を変更するには、以下のステップに従います。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」(またはアクティブな環境) を展開します。
2. サーバーの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開して、「**論理区画**」を選択します。
4. **論理区画**を右クリックして、「**プロパティ**」を選択します。

5. 「環境」ページを選択して、サーバーとなる OS/400 区画の名前を指定します。このフィールドについてさらに情報が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックしてください。
6. 「OK」をクリックします。

論理区画の LAN への接続

iSeries 上の論理区画を LAN に接続する方法を説明します。

TCP/IP を使用して、論理区画を LAN に接続することができます。直接接続された LAN アダプターを使用して LAN に接続するか、あるいは仮想イーサネットとサーバーを使用することができます。

論理区画の LAN への接続について、詳しくは以下のトピックを参照してください。

直接接続された LAN アダプター

Linux を実行する論理区画には、独自の LAN アダプターを設置することができます。

サポートされる LAN アダプターを論理区画に割り振った場合、OS/400 はハードウェアの存在を認識しなくなり、入出力資源を使用できなくなります。

ネットワーク TCP/IP のセットアップについては、Linux ディストリビューターの資料を参照してください。

関連概念

7 ページの『Linux を実行する論理区画における、直接接続された入出力』
直接接続された入出力を使用すれば、Linux がハードウェア資源を直接管理し、すべての入出力資源は Linux オペレーティング・システムによって制御されるようになります。

関連タスク

17 ページの『入出力アダプター (IOA) の論理区画への割り当て』
入出力アダプターを論理区画に割り当てる方法を説明します。

仮想イーサネット

論理区画は仮想イーサネットを使用して、複数の高速区画内接続を確立できます。

論理区画ソフトウェアを使用すると、最大で 16 の別々の仮想ローカル・エリア・ネットワークを構成できます。仮想イーサネットは、1 GB のイーサネット・アダプターを使用する場合と同じ機能を提供します。OS/400 区画と Linux 区画は、仮想イーサネット通信ポート上で TCP/IP を使用して相互に通信できます。

仮想イーサネットの構成方法に関連した詳細については、以下を参照してください。

論理区画での仮想イーサネットの使用:

論理区画は仮想イーサネットを使用して、複数の高速区画内接続を確立できます。

論理区画ソフトウェアを使用すると、最大で 16 の別々の仮想ローカル・エリア・ネットワークを構成できます。仮想イーサネットは、1 GB のイーサネット・アダプターを使用する場合と同じ機能を提供します。OS/400 区画と Linux 区画は、仮想イーサネット通信ポート上で TCP/IP を使用して相互に通信できます。

仮想イーサネットを使用可能にしてセットアップするには Linux 区画を再始動する必要がありますが、特別なハードウェアやソフトウェアは必要ありません。論理区画用に特定の仮想イーサネットを使用可能にすると、その論理区画内にネットワーク装置 vethXX が作成されます。その後、ユーザーは TCP/IP 構成を

適切にセットアップして、他の区画との通信を始めることができます。仮想イーサネットは、各区画で実行されるさまざまなアプリケーション間の複数の通信パスを提供します。

関連情報

仮想イーサネット

Linux on iSeries

仮想イーサネットの利用:

仮想イーサネットは、各区画で実行されるさまざまなアプリケーション間の複数の通信パスを提供します。

仮想イーサネットを使用可能にしてセットアップするには Linux 区画を再始動する必要がありますが、特別なハードウェアやソフトウェアは必要ありません。論理区画用に特定の仮想イーサネットを使用可能にすると、その論理区画内にネットワーク装置 `vethXX` が作成されます。その後、ユーザーは TCP/IP 構成を適切にセットアップして、他の区画との通信を始めることができます。

仮想イーサネットを使用可能にするには、以下のステップに従ってください。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」(またはアクティブな環境)を展開します。
2. サーバーの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開して、「**論理区画**」を選択します。
4. 「**プロパティ**」を右クリックして、「**仮想イーサネット (Virtual Ethernet)**」ページを選択します。論理区画用の仮想イーサネット・オプションを表示させます。このフィールドについてさらに情報が必要な場合は、「**ヘルプ**」をクリックしてください。
5. 「**OK**」をクリックします。

仮想イーサネット用のイーサネット回線記述の作成:

イーサネット回線記述の作成は、仮想イーサネットを使用するよう OS/400 を構成するための第一歩です。

この構成によって、論理区画は仮想イーサネットを使用して OS/400 区画と通信できるようになります。

仮想イーサネットをサポートするために新しいイーサネット回線記述を構成するには、以下のステップに従ってください。

1. OS/400 コマンド行で `WRKHDWRSC *CMN` と入力して、**Enter** を押します。
2. 「通信資源の処理 (Work with Communication Resources)」画面から、適切な仮想イーサネット・ポートの横のオプション **7** (資源詳細の表示 (Display Resource Detail)) を選択します。268C と示されるイーサネット・ポートが仮想イーサネット資源です。これは、区画に接続するそれぞれの仮想イーサネットごとに 1 つ存在します。
3. 「資源明細の表示 (Display Resource Detail)」画面をスクロールダウンして、ポート・アドレスを見つめます。ポート・アドレスは、区画の構成時に選択した仮想イーサネットと一致します。
4. 「通信資源の処理 (Work with Communication Resources)」画面から、適切な仮想イーサネット・ポートの横のオプション **5** (構成記述の処理 (Work with configuration descriptions)) を選択して、**Enter** を押します。
5. 「構成記述の処理 (Work with Configuration Descriptions)」画面から、オプション **1** (作成 (Create)) を選択し、回線記述の名前を入力して、**Enter** を押します。

6. 「イーサネット回線記述の作成 (CRTLINETH) (Create Line Description Ethernet)」画面で、以下の情報を入力します。

- RSRCNAME
- LINESPEED (1G)
- DUPLEX (*FULL)

Enter を押します。最大フレーム・サイズは必ず 8996 にします。フレーム・サイズを 8996 に変更すると、仮想イーサネット全体にわたってデータ転送が改善されます。

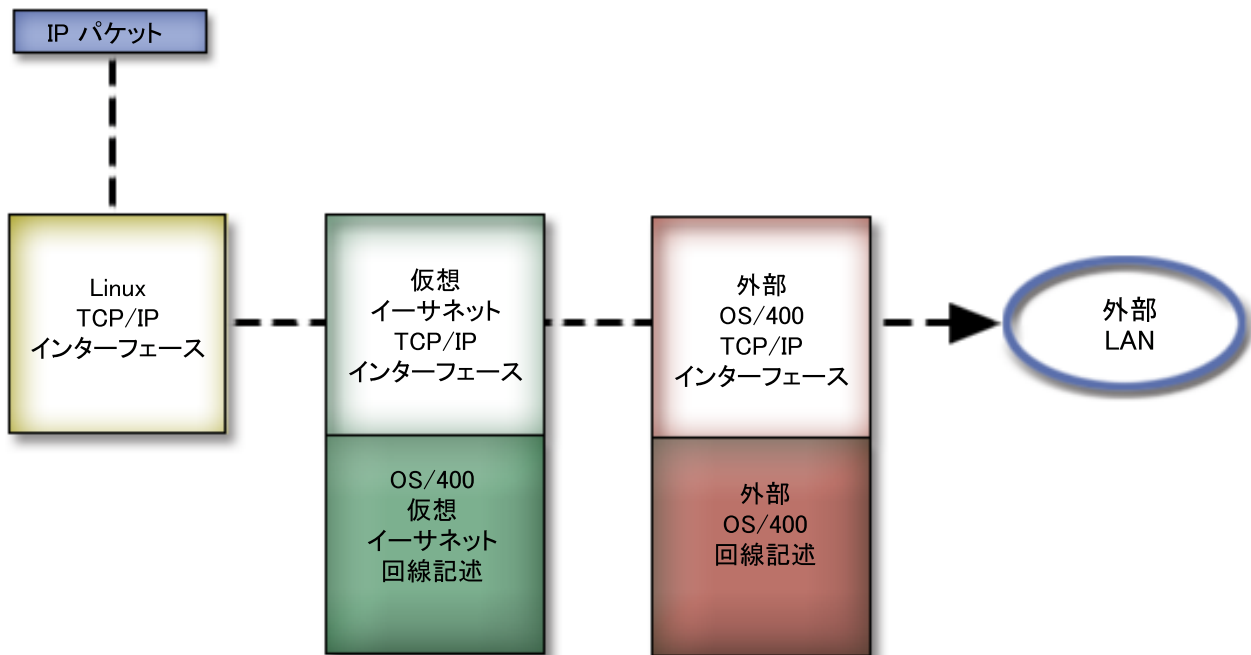
7. **Enter** を押します。

「構成記述の処理 (Work with Configuration Description)」画面に、回線記述が作成されたことを示すメッセージが表示されます。

仮想イーサネット接続方式:

仮想イーサネットは、iSeries の物理サーバー内の論理区画同士の接続に使用できる、高速仮想イーサネット・セグメントを作成します。

この LAN セグメントは、サーバーが接続されている可能性のある実際の LAN から切り離されています。仮想イーサネットは、仮想回線記述と OS/400 TCP/IP インターフェースで構成されています。Linux TCP/IP インターフェースは、独自の IP アドレスを持っていますが、ハードウェアには仮想ネットワーク・デバイスを使用します。論理区画が仮想イーサネット・セグメントのみに接続されている場合、論理区画が外部 LAN 上のサーバーと通信するためには、OS/400 外部 LAN と仮想 OS/400 LAN セグメントの間で TCP/IP トラフィックをブリッジする必要があります。IP パケットの論理フローは、次のようになります。



論理区画によって開始された IP トラフィックは、Linux ネットワーク・インターフェースから仮想 OS/400 インターフェースにフローします。仮想インターフェースが外部インターフェースに関連付けられている場合は、IP パケットは外部インターフェースを経て、宛先までフローします。

外部イーサネット・セグメントと仮想イーサネット・セグメントをブリッジするための方式は 3 つあります。TCP/IP と環境についての知識に基づいて、各方式を活用することができます。以下のいずれかの方式を選んでください。

プロキシ ARP:

プロキシ ARP 方式は、一般に透過性サブネットとして知られる手法を用います。

以下では、仮想ネットワークと外部ネットワークとの接続を作成するための手順を説明しますが、透過性サブネットについて理解を深めたい場合は、以下のリンクが役立ちます。

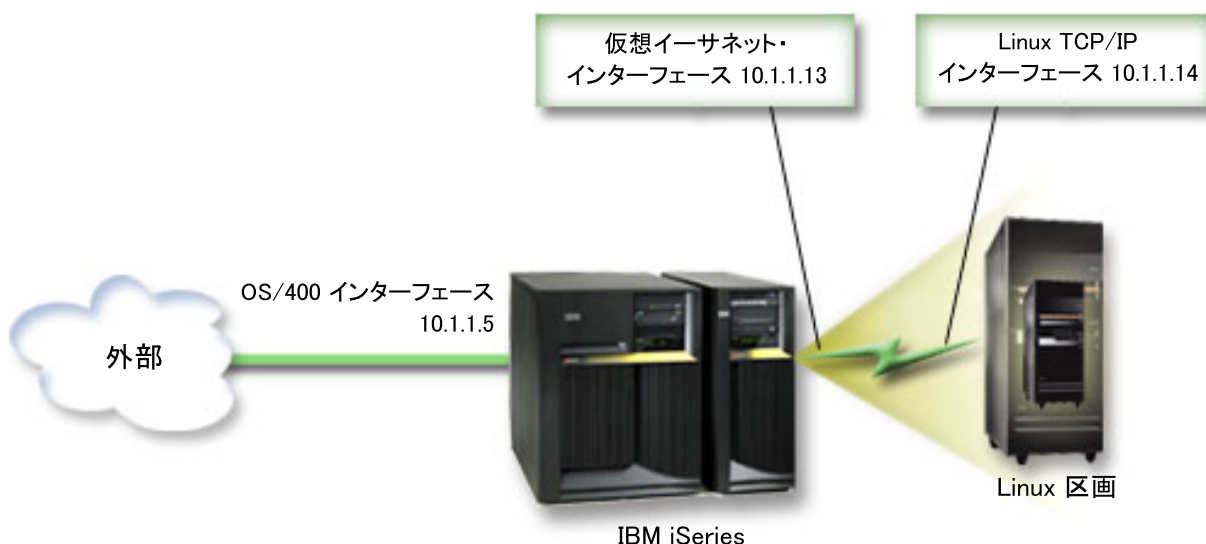
V4 TCP/IP for AS/400(R): More Cool Things Than Ever

このレッドブックでは、一般的なソリューションをさまざまな構成例で明示するサンプル・シナリオが提供されています。これは、iSeries サーバーでの TCP/IP の計画、インストール、調整、構成、およびトラブルシューティングにも役立ちます。

TCP/IP ルーティングおよびワークロード・バランシング

このトピックでは、ルーティングおよびワークロード・バランシングを行うための手法が提供されています。

プロキシ ARP 方式を使用する場合は、サブネットと TCP/IP についてしっかりと理解する必要があります。ネットワークによってルーティング可能な IP アドレスの連続したブロックを入手する必要があります。次の図で説明されているとおりに、論理区画内で IP アドレスのこのブロックをサブネットし、あるアドレスを仮想 TCP/IP インターフェースに、別のアドレスを TCP/IP 接続に割り当てます。



この例では、10.1.1.12 - 10.1.1.15 の 4 つの IP アドレスの連続したブロックが使用されています。これは 4 つの IP アドレスのブロックなので、これらのアドレスのサブネット・マスクは 255.255.255.252 となります。これと類似したセットアップを構成するには、以下の説明に従ってください。

1. ネットワークによってルーティング可能な IP アドレスの連続したブロックを入手します。論理区画が 1 つしかないので、必要な IP アドレスは 4 つだけです。このブロックの最初の IP アドレスの 4 番目のセグメントは、4 で割り切れる値でなければなりません。このブロックの最初と最後の IP アドレスは、それぞれサブネット IP アドレスとブロードキャスト IP アドレスであるため、使用することは

できません。2番目と3番目のIPアドレスは、論理区画内の仮想TCP/IPインターフェースとTCP/IP接続に使用できます。この例の場合、IPアドレス・ブロックは10.1.1.12 - 10.1.1.15で、サブネット・マスクは255.255.255.252です。

外部TCP/IPアドレス用の単一のIPアドレスも必要です。このIPアドレスは、連続したアドレスのブロックに属している必要はありませんが、そのブロックと同じ元のアドレス・サブネット内になければなりません。この例では、外部IPアドレスは10.1.1.5で、サブネット・マスクは255.255.255.0です。

2. サーバー用のOS/400 TCP/IP インターフェースを作成します。この例では、10.1.1.5をIPアドレスとして割り当て、サブネット・マスクを255.255.255.0にします。
3. 33ページの『仮想イーサネット用のイーサネット回線記述の作成』。論理区画内でTCP/IPをセットアップするときに必要なので、ハードウェア資源のポートを書き留めてください。上記の例の場合、ハードウェア資源がCMN05(ポートは0)で、回線記述名(任意)がVETH0であるとしします。
*CRTLINETH LIND(VETH0) RSRCNAME(CMN05) LINESPEED(1G) DUPLEX(*FULL)*
4. イーサネット回線記述用のTCP/IPインターフェースを追加します。この例の場合は、次のようにすることができます。

```
ADDTCPIFC INTNETADR('10.1.1.13') LIND('VETH0') SUBNETMASK ('255.255.255.252')  
LCLIFC('10.1.1.5')
```

重要: 仮想TCP/IPインターフェースの4番目のセグメントが、プロキシーARPのIPアドレスの4番目のセグメントより大きい場合は、このインターフェースではAUTOSTARTを*NOに設定する必要があります。

OS/400はTCP/IPインターフェースを数値順に開始しますが、どの仮想TCP/IPインターフェースを開始するよりも前に、プロキシーARPインターフェースを開始しておく必要があります。

5. IPデータグラム転送をオンにします。これによって、OS/400 TCP/IPインターフェース間でIPパケットがやり取りされます。
*CHGTCPA IPDTGFWD(*YES)*
6. TCP/IPインターフェースを開始します。*STRTCPIFC INTNETADR(yourIPAddress)*などのコマンドを使用できます。たとえば、次のようなコマンドを発行します。
 - *STRTCPIFC INETADDR('10.1.1.5')* // starts the external proxy ARP interface
 - *STRTCPIFC INETADDR('10.1.1.13')* // starts the virtual Ethernet interface
7. Linux ディストリビューションで提供される説明またはツールを使用して、論理区画でネットワークをセットアップします。IPアドレス、サブネット・マスク、ポート、およびルーターIPアドレスは、正確なものを使用してください。

LinuxでのTCP/IPセットアップ中は、ネットワーク・デバイスを知っておく必要があります。バージョン2.4.9以前の32ビット・カーネルを実行している場合は、ネットワーク・デバイスは、VETHの後ろにイーサネット回線記述を構成したときからのポート番号を付加したものとなります。2.4.10以降の64ビット・カーネルまたは32ビット・カーネルを実行している場合は、ネットワーク・デバイスは、ETHの後ろにポート番号を付加したものとなります。詳しくは、33ページの『仮想イーサネット用のイーサネット回線記述の作成』を参照してください。この例では、以下のとおりです。

- インターフェースIPアドレスは10.1.1.14
- サブネット・マスクは255.255.255.252
- ゲートウェイIPアドレスは10.1.1.13
- ネットワーク・デバイスはVETH0またはETH0(カーネルのバージョンによる)。

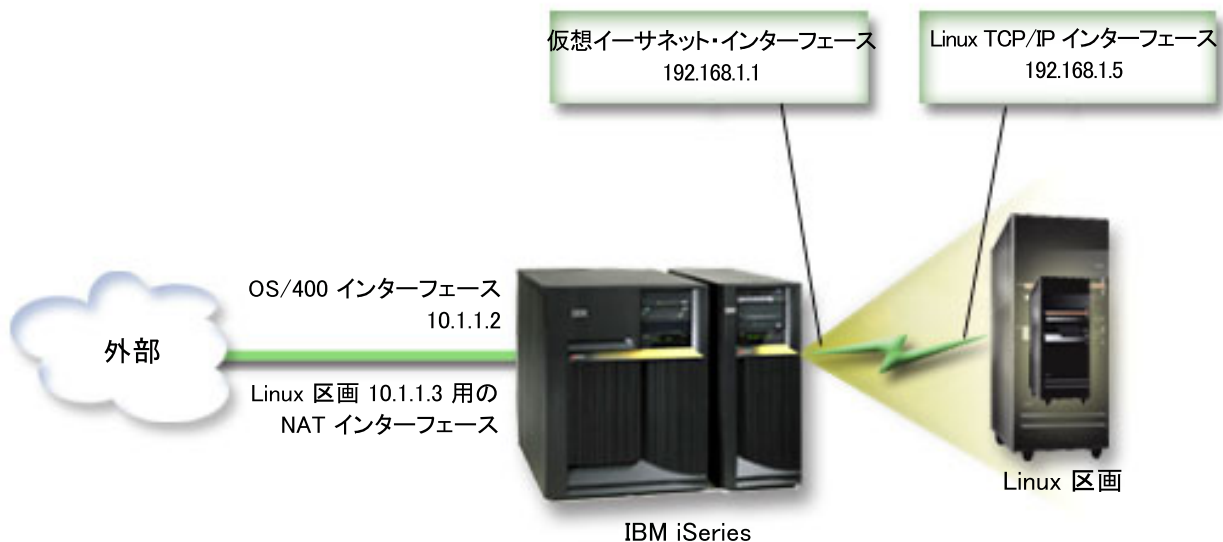
8. ネットワーク通信を検査するには、仮想イーサネット・インターフェースと外部ネットワーク上のホストを論理区画から PING します。次に、OS/400 から仮想イーサネット・インターフェースと Linux インターフェースを PING します。

ネットワーク・アドレス変換 (NAT):

NAT は、仮想イーサネットを使用して、論理区画と外部ネットワーク間でトラフィックの経路を定めることができます。

NAT のこの特殊な形式は静的 NAT と呼ばれ、これにより、論理区画間のインバウンドおよびアウトバウンド IP トラフィックが可能となります。マスカレード NAT などの他の形式の NAT も、論理区画が外部クライアントによって開始されたトラフィックを受信する必要がない場合に機能します。TCP/IP ルーティング方式とプロキシ ARP 方式と同様に、既存の OS/400 ネットワーク接続を利用できます。IP パケット規則を使用することになるので、iSeries ナビゲーターを使用して規則を作成および適用する必要があります。

以下の図は、NAT を使用して論理区画を外部ネットワークに接続する方法の例です。10.1.1.x ネットワークは外部ネットワークを表し、192.168.1.x ネットワークは仮想イーサネット LAN を表します。



この例では、iSeries ホスト区画の既存のすべての TCP/IP トラフィックは、10.1.1.2 インターフェースを通ります。これは静的マップ・シナリオなので、インバウンド・トラフィックは 10.1.1.3 インターフェースから 192.168.1.1 インターフェースに変換されます。アウトバウンド・トラフィックは、192.168.1.1 インターフェースから外部 10.1.1.3 インターフェースに変換されます。論理区画は、仮想インターフェース (192.168.1.1) と論理区画自体の 192.168.1.5 インターフェースを使用してサーバーと通信します。

静的 NAT を機能させるには、まず OS/400 と Linux の TCP/IP 通信をセットアップする必要があります。次に、IP パケット規則を作成して適用します。次の手順に従ってください。

1. 論理区画の構成時に、仮想イーサネットを作成するようにします。これについては、論理区画の構成で説明されています。
2. 33 ページの『仮想イーサネット用のイーサネット回線記述の作成』。論理区画内で TCP/IP をセットアップするときに必要なになるので、ハードウェア資源のポートを書き留めてください。上記の例の場

合、ハードウェア資源が CMN05 (ポートは 0) で、回線記述名 (任意) が VETH0 であるとします。
*CRTLINETH LIND(VETH0) RSRNAME(CMN05) LINESPEED(1G) DUPLEX(*FULL)*

3. 仮想回線記述用の TCP/IP インターフェースを追加します。次の使用例に従います。*ADDTCPIFC INTNETADR('192.168.1.1') LIND('VETH0') SUBNETMASK ('255.255.255.0')*

この例の場合は、*STRTCPIFC INTNETADR(yourIPAddress)* または *STRTCPIFC INTNETADR('192.168.1.1')* コマンドを使用して、新しい TCP/IP インターフェースを開始します。

4. Linux ディストリビューションで提供される説明またはツールを使用して、論理区画でネットワークをセットアップします。IP アドレス、サブネット・マスク、ステップ 2 のポート、およびゲートウェイ IP アドレスは、正確なものを使用してください。

Linux での TCP/IP セットアップ中は、ネットワーク・デバイスを知っておく必要があります。バージョン 2.4.9 以前の 32 ビット・カーネルを実行している場合は、ネットワーク・デバイスは、VETH の後ろにイーサネット回線記述を構成したときからのポート番号を付加したものとなります。2.4.10 以降の 64 ビット・カーネルまたは 32 ビット・カーネルを実行している場合は、ネットワーク・デバイスは、ETH の後ろにポート番号を付加したものとなります。詳しくは、33 ページの『仮想イーサネット用のイーサネット回線記述の作成』を参照してください。この例では、以下のとおりです。

- インターフェース IP アドレスは 192.168.1.5
- サブネット・マスクは 255.255.255.0
- ゲートウェイ IP アドレスは 10.1.1.3
- ネットワーク・デバイスは VETH0 または ETH0 (カーネルのバージョンによる)

5. 外部ネットワークに接続する別の TCP/IP インターフェースを作成します。このインターフェースは、既存の外部 TCP/IP インターフェースと同じ回線記述を使用する必要があります。このインターフェースが、最終的に区画のためにアドレス変換を実行します。新しいインターフェースが外部 LAN と正しく通信していることを確認してください。この例の場合、このインターフェースは、ETHLINE と呼ばれる回線記述上で 10.1.1.3 という IP アドレスを持ちます。
6. 外部 TCP/IP インターフェースを開始します。 *STRTCPIFC INTNETADR('10.1.1.3')*
7. 仮想イーサネット接続が機能していることを検証する必要があります。論理区画から Linux ゲートウェイを PING し、OS/400 から論理区画を PING します。PING が成功すれば、次のステップに進みます。
8. IP データグラム転送をオンにします。これによって、OS/400 TCP/IP インターフェース間で IP パケットがやり取りされます。 *CHGTCPA IPDTGFWD(*YES)*
9. iSeries ナビゲーターを使用して、サーバーに接続します。作成したばかりの NAT インターフェースを使用してサーバーに接続してはなりません。
10. パケット規則にナビゲートします。パケット規則インターフェースを使用して、静的 NAT を使用可能にするための規則を最低 3 つ作成します。新規定義済みアドレス規則を 2 つ、新規のマップされたアドレス規則を 1 つ作成する必要があります。
 - a. 「パケット規則」ウィンドウで、「ファイル」メニューから「新規ファイル」を選択して新しい規則ファイルを作成します。
 - b. 「新しい規則ファイル」メニューの「定義済みアドレス」を右クリックして、「新規定義済みアドレス」を選択します。
 - c. アドレス名、論理区画の IP アドレス、タイプとして TRUSTED を入力します。たとえば、次のように入力します。

アドレス名 = LINUXPART

定義済みアドレス = IP アドレス (この場合、IP アドレスは 192.168.1.5)

タイプ = TRUSTED

- d. 「新しい規則ファイル」メニューの「定義済みアドレス」を右クリックして、「新規定義済みアドレス」を選択します。
- e. アドレス名、論理区画の IP アドレス、タイプとして BORDER を入力します。たとえば、次のように入力します。

アドレス名 = SHELL
定義済みアドレス = IP アドレス (この場合、IP アドレスは 10.1.1.3)
タイプ = BORDER
- f. 「新しい規則ファイル」メニューの「アドレス変換」メニュー項目を展開します。
- g. 「マップされたアドレス」を右クリックして、「新規のマップされたアドレス」を選択します。
- h. マップされたアドレス名、宛先アドレス名、回線名を入力します。 ジャーナル処理はオフのままにしておいて構いません。たとえば、次のように入力します。

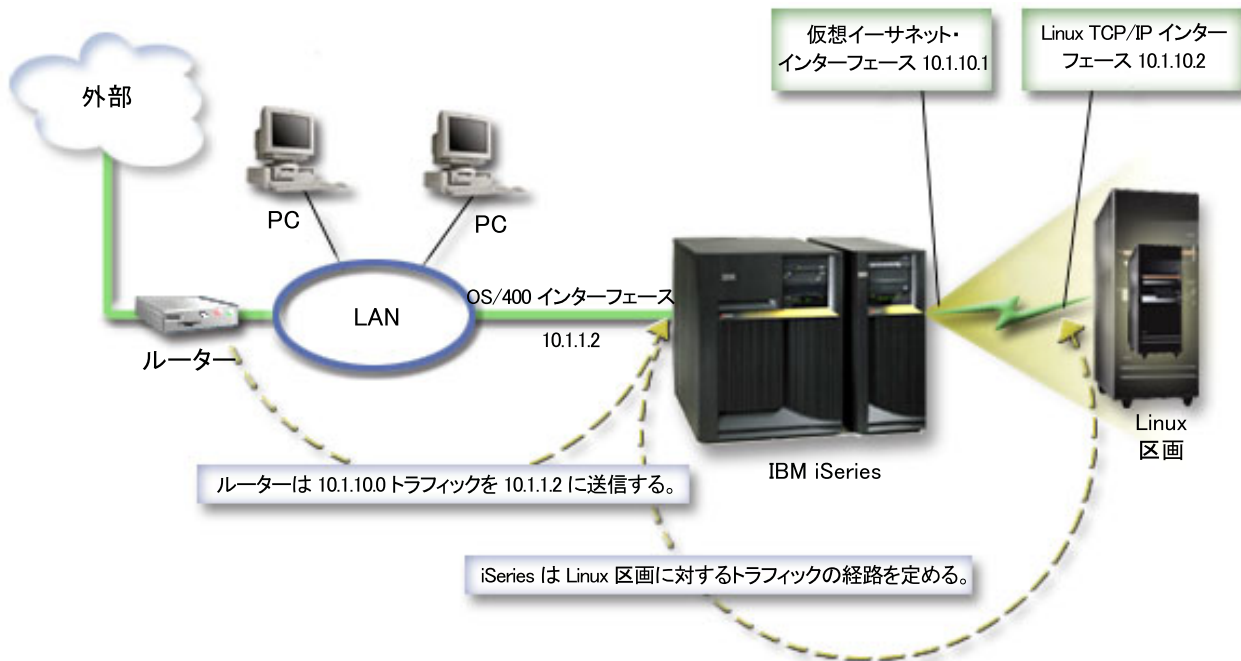
マップされたアドレス名 = LINUXPART
宛先アドレス名 = SHELL
回線 = ETHLINE
ジャーナル処理 = OFF
- i. 「ファイル」メニューから「検査」を選択して規則を検査します。
- j. 規則ファイルを保管します。
- k. 検査の結果が正常だった場合は、「ファイル」メニューから「活動化」を選択します。これで、静的 NAT 規則が活動状態になります。

アウトバウンド通信をテストするために、論理区画から外部ホストを PING します。次に、インバウンド通信をテストするために、外部ホストから論理区画を PING します。

TCP/IP ルーティング:

さまざまなルーティング手法を用いながら iSeries サーバーを介して、論理区画へのトラフィックの経路を定めることもできます。

このソリューションは、iSeries 上で簡単に構成できますが、ネットワークのトポロジーによってはインプリメントすることが実際的でない場合があります。次の図を考慮してください。



既存の TCP/IP インターフェース (10.1.1.2) が LAN に接続します。LAN はルーターを使用してリモート・ネットワークに接続されています。Linux TCP/IP インターフェースのアドレスは 10.1.10.2 で、仮想イーサネット TCP/IP インターフェースのアドレスは 10.1.10.1 です。OS/400 では、IP データグラム転送をオンにすると、iSeries と論理区画との間で IP パケットが發送されるようになります。Linux TCP/IP 接続を定義する場合は、ルーター・アドレスは 10.1.10.1 でなければなりません。

このルーティングの難点は、iSeries への IP パケットの發送です。このシナリオでは、ルーターが 10.1.10.0 ネットワーク宛てのパケットを 10.1.1.2 インターフェースに渡すよう、ルーターを定義することができます。これは、リモート・ネットワーク・クライアントにとってはうまく機能します。ローカル LAN クライアントが同じルーターをネクスト・ホップとして認識する場合は、ローカル LAN クライアント (iSeries と同じ LAN に接続されているクライアント) に対しても機能します。認識しない場合は、各クライアントが、10.1.10.0 トラフィックを iSeries 10.1.1.2 インターフェースに送信する経路を持つ必要があります。その時点でこの方式は実行不可能になり始めます。何百もの LAN クライアントがあれば、何百もの経路を定義する必要があります。

これと類似したセットアップを構成するには、以下の説明に従ってください。

1. 論理区画の構成時に、仮想イーサネットを作成するようにします。詳しくは、17 ページの『論理区画の構成』を参照してください。
2. 33 ページの『仮想イーサネット用のイーサネット回線記述の作成』。論理区画内で TCP/IP をセットアップするときに必要なので、ハードウェア資源のポートを書き留めてください。上記の例の場合、ハードウェア資源が CMN05 (ポートは 0) で、回線記述名 (任意) が VETH0 であるとし、
`CRTLINETH LIND(VETH0) RSRNAME(CMN05) LINESPEED(1G) DUPLEX(*FULL)`
3. 仮想回線記述用の TCP/IP インターフェースを追加します。次の使用例に従います。ADDTCPIFC
`INTNETADR('10.1.10.1') LIND('VETH0') SUBNETMASK ('255.255.255.0')`

この例の場合は、STRTCPIFC INTNETADR (*yourIPaddress*) または STRTCPIFC INTNETADR('10.1.10.1') コマンドを使用して、新しい TCP/IP インターフェースを開始します。

- Linux ディストリビューションで提供される説明またはツールを使用して、論理区画でネットワークをセットアップします。IP アドレス、サブネット・マスク、ポート、およびゲートウェイ IP アドレスは、正確なものを使用してください。

Linux での TCP/IP セットアップ中は、ネットワーク・デバイスを知っておく必要があります。バージョン 2.4.9 以前の 32 ビット・カーネルを実行している場合は、ネットワーク・デバイスは、VETH の後ろにイーサネット回線記述を構成したときからのポート番号を付加したものとなります。2.4.10 以降の 64 ビット・カーネルまたは 32 ビット・カーネルを実行している場合は、ネットワーク・デバイスは、ETH の後ろにポート番号を付加したものとなります。詳しくは、33 ページの『仮想イーサネット用のイーサネット回線記述の作成』を参照してください。この例では、以下のとおりです。

インターフェース IP アドレスは 10.1.10.2

サブネット・マスクは 255.255.255.0

ゲートウェイ IP アドレスは 10.1.10.1

ネットワーク・デバイスは VETH0 または ETH0 (カーネルのバージョンによる)

- IP データグラム転送をオンにします。これによって、OS/400 TCP/IP インターフェース間で IP パケットがやり取りされます。CHGTCPA IPDTGFWD(*YES)

論理区画のサーバー構成の印刷

OS/400 V5R2 を 1 次区画で実行している場合で、サーバー上の他のすべての区画が論理区画である場合は、すべての入出力資源のサーバー構成を印刷することを強くお勧めします。

1 次区画補助記憶域は、論理区画構成の喪失を最小限に抑えるために、RAID またはミラーリングを使用して保護する必要があります。論理区画構成情報は保管プロセスでは保管されません。したがって、万が一災害時回復シナリオでサーバーを回復しなければならない場合は、適切な資源を割り振るために印刷出力が必要となります。

論理区画を持つサーバーに対するハードウェア・アップグレードとも呼ばれる MES (各種装置仕様) を実行しなければならない場合に備えて、すべての論理区画のサーバー構成レポートを印刷する必要もあります。この情報は、サーバー入出力資源がどのように論理区画に割り当てられているかを、IBM ビジネス・パートナーまたは IBM 営業担当員が理解するのに役立ちます。

注: SST 内のハードウェア・サービス・マネージャーを使用してラック構成リストを印刷すると、特定の区画に割り振られている資源の構成リストしか提供されません。このレポートでは、サーバー全体の詳細情報は提供されません。このため、1 次区画を使用して、以下に概略を示すステップを実行する必要があります。

サーバー構成を印刷するには、以下のステップを実行してください。

- 1 次区画から SST または DST を開始します。
- SST の場合はオプション 5 (サーバーの処理 (Work with servers))、DST の場合はオプション 11 (サーバーの処理 (Work with servers)) を選択して **Enter** を押します。
- オプション 1 (区画情報の表示 (Display partition information)) を選択します。
- オプション 5 (サーバー入出力資源の表示 (Display server I/O resources)) を選択します。
- 「表示する詳細のレベル (Level of detail to display)」フィールドに、*ALL と入力して詳細のレベルを ALL に設定します。
- サーバー入出力構成を印刷するには、**F6** を押します。
- スプール・ファイルに印刷するには、オプション 1 を選択して **Enter** を押します。

8. 区画情報の表示ディスプレイに戻るには、**F12** を押します。
9. オプション **2** (区画処理構成の表示 (Display partition processing configuration)) を選択します。
10. 処理構成を印刷するには、**F6** を押します。
11. 区画情報の表示ディスプレイに戻るには、**F12** を押します。
12. オプション **7** (通信オプションの表示 (Display communications options)) を選択します。
13. 通信構成を印刷するには、**F6** を押します。
14. スプール・ファイルに印刷するには、オプション **1** を選択して **Enter** を押します。
15. OS/400 コマンド行に戻って、これらの 3 つのスプール・ファイルを印刷します。

関連概念

60 ページの『論理区画構成データの保管』

論理区画構成データは、物理サーバーのライフ全体にわたって自動的に保守されます。

共用プロセッサ装置の動的移動

論理区画間で共用プロセッサ装置を動的に移動できます。

プロセッサ能力を動的に移動できることは、変化するワークロードに順応する必要がある場合に重要となります。プロセッサには、最小値と最大値が関連付けられています。これらの値の間で、論理区画をオフに変更することなく資源を動的に移動できる範囲を設定できます。共用プロセッサには、論理区画をサポートするのに必要な処理能力の最低限の量と等しい最小値を指定できます。最大値は、サーバーで使用可能な処理能力の量より少なくなければなりません。最小値か最大値のどちらかを変更する場合は、ゲスト区画をオフに変更する必要があります。

ある論理区画から別のゲスト区画に共用プロセッサ能力を移動するには、以下のステップを実行してください。

1. iSeries ナビゲーターで、「**ユーザー接続**」(またはアクティブな環境)を展開します。
2. サーバーの 1 次区画を選択します。
3. 「**構成およびサービス**」を展開して、「**論理区画**」を選択します。
4. 「**論理区画**」を右クリックして、「**区画の構成 (Configure Partitions)**」を選択します。「**論理区画の構成**」ウィンドウが表示されます。
5. 「**論理区画の構成**」ウィンドウで、共用プロセッサ能力を移動したい区画を選択します。
6. 「**共用プール・プロセッサ (Shared pool processors)**」を右マウス・ボタン・クリックして、「**移動 (Move)**」を選択します。
7. 「**装置の表示 -- プロセッサ・プール (Display units in -- Processor pool)**」で処理する装置を選択します。このフィールドについてさらに情報が必要な場合は、「**ヘルプ**」をクリックします。
8. 「**移動する量 (Amount to move)**」フィールドに、移動する共用プロセッサ能力の量を指定します。この値は、論理区画に使用可能な現在の共用プロセッサ能力の量より少なくなければなりません。ソースの「**移動後の量 (Amount after move)**」値は、両方の区画の共用プロセッサ能力に指定された最小値と最大値の範囲内になければなりません。
9. 「**移動先 -- 論理区画 (Move to -- Logical partition)**」で、専用プロセッサを受け取る区画を選択します。
10. 「**OK**」をクリックして、指定した共用プロセッサ能力を移動します。

Linux 区画へのディスクの動的追加

仮想装置を使用すると、物理装置をサーバーに追加せずに Linux を実行できるため、iSeries サーバーでのハードウェア構成作業が簡略化されます。

使用するディストリビューションによって異なりますが、1 つの Linux 区画には最大 64 個の仮想ディスクを割り振ることができ、Linux は最大 20 個のディスクを認識できます。各ディスクは最高 1000 GB の記憶域をサポートします。Linux にとって各仮想ディスクは、それぞれ単一の物理装置のように見えます。しかし、OS/400 統合ファイル・システムにおいてそれに対応するスペースは、iSeries サーバー上で利用できるすべてのディスク・アームにわたって存在しています。それにより、Linux カーネルの RAID サポートによるオーバーヘッドを回避しつつ、RAID のメリットを活用することができます。

OS/400 には、Linux 区画に仮想ディスクを動的に追加する機能があります。OS/400 や Linux を再始動することなく統合ファイル・システム内にディスク・スペースを割り振り、それを Linux で使用可能にすることができます。さらに、Linux サーバー管理者も、サーバーを中断することなく新たに割り振ったディスク・スペースを構成して、それを使用可能にすることができます。

Linux 区画に仮想ディスクを動的に追加するには、以下のようにします。

1. iSeries ナビゲーターを使用して、ディスク・ドライブを作成します。
 - a. 「ネットワーク」 → 「Windows 管理」をクリックします。
 - b. 「ディスク・ドライブ」フォルダーを右クリックして、「新規ディスク (New Disk)」をクリックします。
 - c. 「ディスク・ドライブ名 (Disk drive name)」フィールドで、ディスク・ドライブ名を指定します。
 - d. 「記述」フィールドで、このディスクの説明を指定します。
 - e. 別のディスクからデータをコピーしたい場合は、「別ディスクのデータによるディスクの初期化 (Initialize disk with data from another disk)」を選択します。次に、データのコピー元のソース・ディスクを指定します。
 - f. 「容量 (Capacity)」フィールドで、ディスクの容量を指定します。
 - g. 「OK」をクリックします。
2. iSeries ナビゲーターを使用して、ディスク・ドライブをリンクします。
 - a. 「ネットワーク」 → 「Windows 管理」 → 「ディスク・ドライブ」をクリックします。
 - b. 使用できるディスク・ドライブを右クリックして、「リンクの追加 (Add Link)」を選択します。
 - c. ディスクのリンク先にしたいサーバーを選択します。
 - d. 使用できるリンク・タイプの 1 つとリンク・シーケンス位置を選択します。
 - e. 使用できるデータ・アクセス・タイプの 1 つを選択します。
 - f. 「OK」をクリックします。
3. 新しいディスクの装置名を決定します。OS/400 に関する限り、Linux 区画に対してスペースが利用可能になります。次に、ディスクを区画に分割し、フォーマットし、アクセスするため、Linux 側でいくつかのステップを実行する必要があります。その名前は、次の 2 つの要素によって決まります。
 - Linux ディストリビューション
 - 現在割り振られているディスクの数

たとえば、単一のディスクが割り振られている SUSE ディストリビューションの場合、第 1 のディスク装置は /dev/hda です。第 2 のディスク (新たに割り振る仮想ディスク) は /dev/hdb です。

4. Linux の fdisk コマンドを使用して、新規ディスク上に区画を作成します。 fdisk コマンドは標準 Linux コマンドで、どのディストリビューションでも同じです。このコマンドを実行するには、スーパーユーザー (root) 権限を持っている必要があります。
 - a. コマンド行から fdisk /dev/hdb と入力して、**Enter** を押します。

次のようなプロンプトが表示されます。Command (m for help):

5. このプロンプトに対して **p** (p は print の p)、ディスクの現行区画表を表示します。デフォルトの動作として、新しい仮想ディスクには FAT16 としてフォーマットされている 1 つの区画が表示されます。たとえば、

```
Disk /dev/hdb: 64 heads, 32 sectors, 200 cylinders
Units = cylinders of 2048 * 512 bytes
```

```
Device Boot    Start        End    Blocks   Id  System
/dev/hdb1      1          199    203760    6   FAT16
```

6. 区画を削除します。FAT16 区画は不要です。現行区画を削除して、新しい区画を作成する必要があります。
 - a. 区画を削除するには、コマンド・プロンプトに対して **d** を入力します。

fdisk コマンドが次のようなプロンプトを表示します。Partition number (1-4):

7. 区画番号 (この場合は 1) を入力して **Enter** を押します。fdisk プロンプトは、削除が正常に実行されたことを示すメッセージを戻します。
8. 新しい区画を作成します。
 - a. 新しい区画の作成コマンド **n** を入力します。fdisk プロンプトは以下を戻します。

```
Command action
E   extended
P   primary partition (1-4)
```

- b. コマンド **p** を入力して、**Enter** を押します。fdisk プロンプトは以下を戻します。

Partition number (1-4):

- c. これはディスクの最初の区画であるため、**1** を入力して **Enter** を入力します。fdisk プロンプトは以下を戻します。

First cylinder (1-200, default 1):
 - d. **1** を入力して、**Enter** を押します。fdisk プロンプトは以下を戻します。

Last cylinder or +size or +sizeM or +sizeK (1-200, default 200):
 - e. **200** を入力して、**Enter** を押します。区画が正常に作成されたなら、再び fdisk プロンプトが表示されます。

注: 区画のタイプのデフォルトは Linux です。それ以外のタイプのディスク (LVM、Linux Extended など) を指定するには、**t** コマンド (type の **t**) を使用して区画のタイプを変更してください。

9. **w** (write の **w**) を入力して変更をコミットし、**Enter** を押します。この段階で、まだディスクの構造は変更されていません。変更をコミットすると、次のような診断メッセージが表示されます。

```
The partition table has been altered!
```

```
Calling ioctl() to re-read partition table.
Syncing disks.
```

10. **mkfs** と入力して、新規区画をフォーマットします。mkfs コマンドは、Linux の標準コマンドであり、どの Linux ディストリビューションにも用意されているはずですが、mkfs にはたくさんのオプション・パラメーターがありますが、ほとんどの場合はデフォルトで十分です。ここまでのステップで作

成した区画をフォーマットするため、次のコマンドを入力します。fdisk コマンドの場合と同じように、mkfs コマンドを実行するためには、root としてログインする必要があります。

```
mkfs /dev/hdb1
```

第 2 のディスクには、区画が 1 つしかありません。/dev/hdb1 の hdb は第 2 のディスクであることを示すもの、そして 1 は区画 1 を示すものです。次のような診断メッセージが表示されます。

```
mke2fs 1.28 (31-Aug-2002)
Filesystem label=
OS type: Linux
Block size=1024 (log=0)
Fragment size=1024 (log=0)
51200 inodes, 204784 blocks
10239 blocks (5.00%) reserved for the super user
First data block=1
25 block groups
8192 blocks per group, 8192 fragments per group
2048 inodes per group
Superblock backups stored on blocks:
 8193, 24577, 40961, 57345, 73729
```

```
Writing inode tables: done
```

```
Writing superblocks and filesystem accounting information: done
```

```
This filesystem will be automatically checked every 29 mounts or
180 days, whichever comes first. Use tune2fs -c or -i to override.
```

11. 新しいディレクトリーを作成します。最後に、Linux ファイル・ツリーの中で、新しいファイル・システムにアクセスするために使用するディレクトリーを作成する必要があります。また、新しいファイル・サーバーを、ディレクトリー・ツリー内のその位置に割り振ることも必要です。そのためには、次のようにしてディレクトリーを作成し、物理資源をマウントします。
 - a. mkdir /mnt/data と入力して、**Enter** を押します。
 - b. mount /dev/hdb1 /mnt/data と入力して、**Enter** を押します。
12. 項目を追加します。これで、実行中の Linux 区画から、新しい仮想ディスク・スペースを利用できるようになりました。資源アクセス Linux 開始の自動マウント機能を利用するため、/etc/fstab ファイル (マウント定義の保存されているファイル) にエントリーを 1 個追加します。この例の場合、/etc/fstab に追加するエントリーは次のとおりです。

```
/dev/hdb1 /mnt/data ext2 defaults 1 1
```

ネットワーク・サーバー記述

ネットワーク・サーバー記述をリンクしたり削除する方法については、以下のトピックを参照してください。

ネットワーク・サーバー記述 (NWS) は、構成に名前を付け、Linux 区画を開始および停止するためのインターフェースを提供し、Linux と仮想ディスクとの間のリンクを提供するために使用されます。

複数の NWS 間での NWSSTG のリンク

ネットワーク・サーバーの記憶スペースを、複数のネットワーク・サーバー記述にリンクすることが可能です。

ゲスト区画またはネットワーク・サーバー記述は、他のネットワーク・サーバー記述とデータを共有することができます。他のネットワーク・サーバー記述とデータを共有すれば、複数のネットワーク・サーバー記述が読み取り専用でデータにアクセスできることとなります。複数の区画がアクセスするようなアプリケー

ションが存在する場合、複数のネットワーク・サーバー記述の間でデータを共有するオプションは役立ちません。共有データを読み取れるネットワーク・サーバー記述の数には、制限がありません。

さらに、共有更新ネットワーク・サーバー記憶スペースを実装することも可能です。複数のネットワーク・サーバー記述がデータにアクセスできますが、ある時点でデータを更新できるネットワーク・サーバー記述はただ 1 つです。他のネットワーク・サーバー記述がデータをドライブから読み取っている間は、データを更新できません。このオプションが役立つのは、共有データの変更が、複数の区画によって共有されたアプリケーションに影響を及ぼすような場合です。

NWSSTG を複数の NWSD にリンクするには、以下のステップに従ってください。

1. OS/400 コマンド行で、コマンド ADDNWSSTGL を入力して **Enter** を押します。
2. 「サーバー記憶域リンクの追加 (Add Server Storage Link display)」画面で、以下の情報を入力します。
 - NWSSTG (名前)
 - NWSD (名前)
 - DYNAMIC (*YES)
 - DRVSEQNBR (*CALC)
3. **F10** (追加のパラメーター) を押します。
4. 記憶スペースのアクセス・タイプを入力して **Enter** を押します。

論理区画用 NWSD の削除

ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) をリンク解除して、論理区画から削除する方法を説明します。

NWSD を削除する前に、その NWSD に関連付けられている記憶スペースをリンク解除する必要があります。その後、NWSD を削除することができます。

NWSD 用サーバー・ドライブの記憶スペースをリンク解除するには、以下のステップを実行します。

1. OS/400 コマンド行で、RMVNWSSTGL NWSSTG(nwsdname1) NWSD(nwsdname) と入力し、
2. **Enter** を押します。

関連タスク

47 ページの『論理区画用ディスク・ドライブの削除』

論理区画内のディスク・ドライブを削除するには、OS/400 コマンドを使用する必要があります。

64 ページの『論理区画からのディスク・ドライブのリンク解除』

Linux 仮想ディスク・ドライブ (ネットワーク・サーバー記憶スペース) をリンク解除すると、それは論理区画から切断され、ユーザーからはアクセスできなくなります。論理区画をアンインストールする場合にも、ディスク・ドライブをリンク解除する必要があります。

記憶スペースのリンク解除:

インストール・ソース・ドライブの記憶スペースをリンク解除するには、以下のステップを実行します。

1. OS/400 コマンド行で、RMVNWSSTGL NWSSTG(nwsdname2) NWSD(nwsdname) と入力し、**Enter** を押します。
2. このとき、NWSD にリンクされた任意のユーザー定義記憶スペースを削除することもできます。そうするには、必要な回数だけ次のコマンドを使用します。
 - a. OS/400 コマンド行で、RMVNWSSTGL NWSSTG(nwsstgname) NWSD(nwsdname) と入力し、
 - b. **Enter** を押します。

NWSD の削除:

論理区画用のネットワーク・サーバー記述 (NWSD) を削除するには、以下のステップを実行します。

1. OS/400 コマンド行で、WRKNWSD と入力して、**Enter** を押します。
2. ネットワーク・サーバーの左横のオプション・フィールドに **8** と入力して、**Enter** を押します。「構成状況の処理 (Work with Configuration Status)」画面が表示されます。
3. NWSD の状況がオフに変更されていない場合、ネットワーク・サーバーの左横のオプション・フィールドに **2** と入力して、**Enter** を押します。そうでない場合は、次のステップに進みます。
4. **F3** を押して元の画面に戻ります。
5. ネットワーク・サーバーの左横のオプション・フィールドに **4** と入力して、**Enter** を押します。
6. 「ネットワーク・サーバー記述の削除の確認 (Confirm Delete of Network Server Descriptions)」画面で、**Enter** を押します。

論理区画用ディスク・ドライブの削除

論理区画内のディスク・ドライブを削除するには、OS/400 コマンドを使用する必要があります。

ディスク・ドライブを削除する前に、それを NWSD からリンク解除しなければなりません。リンク解除が終わったら、削除が可能になります。

関連タスク

64 ページの『論理区画からのディスク・ドライブのリンク解除』

Linux 仮想ディスク・ドライブ (ネットワーク・サーバー記憶スペース) をリンク解除すると、それは論理区画から切断され、ユーザーからはアクセスできなくなります。論理区画をアンインストールする場合にも、ディスク・ドライブをリンク解除する必要があります。

46 ページの『論理区画用 NWSD の削除』

ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) をリンク解除して、論理区画から削除する方法を説明します。

iSeries ナビゲーターでの論理区画用ディスク・ドライブの削除:

ディスク・ドライブを削除するには、以下のようになります。

1. 「ネットワーク」 → 「Windows 管理」 → 「ディスク・ドライブ」をクリックします。
2. 削除したいディスク・ドライブを右クリックします。
3. 「削除」をクリックします。
4. 確認パネルで、「削除」をクリックします。

CL コマンドでの論理区画用ディスク・ドライブの削除:

「ネットワーク・サーバー記憶スペースの削除」 CL コマンド DLTNWSSTG を使用してディスク・ドライブを削除するには、以下のステップに従います。

1. DLTNWSSTG と入力して、**F4** を押します。
2. 「ネットワーク・サーバー記憶スペース (Network server storage space)」フィールドにディスク・ドライブの名前を入力します。**Enter** を押します。

ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) のパラメーターと説明

ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) は、構成に名前を付け、Linux 区画を開始および停止するためのインターフェースを提供し、Linux と仮想ディスクとの間のリンクを提供するために使用されます。

論理区画の NWSD を作成する前に、各パラメーターの説明を理解しておく必要があります。

次の表は、各パラメーター値と、論理区画を実行する場合に各パラメーターを使用する方法について説明しています。

表 13. NWSD のパラメーターと説明

| プロンプト | パラメーター | パラメーターの説明 |
|-----------------|------------|--|
| ネットワーク・サーバー記述 | NWSD | ネットワーク・サーバー記述に付ける名前を指定します。区画と同じ名前を使用することをお勧めします。同じ区画を指す複数の NWSD を作成できますが、1 つの区画で同時にアクティブにできる NWSD は 1 つだけです。 |
| 資源名 | RESCUE | ハードウェアを識別する資源名を指定します。このオプションは、*GUEST 区画には適用されません。 |
| ネットワーク・サーバー・タイプ | TYPE | 作成するネットワーク記述のタイプを指定します。 |
| IPL 時のオンライン化 | ONLINE | このオブジェクトが、初期プログラム・ロード (IPL) 時に自動的にオンに変更されるかどうかを指定します。 |
| オンに変更するまでの待機時間 | VRYWAIT | ネットワーク・サーバー記述のオンへの変更が非同期と同期のどちらで行われるかを指定します。オンに同期変更する場合は、オンへの変更が完了するまでサーバーが待機する時間を指定します。 |
| 区画 | PARTITION | 論理区画の構成中に与えられた区画の名前を指定します。間違った区画名をここで指定すると、その名前は NWSD をオンに変更するまで検出されません。 |
| コード・ページ | CODEPAGE | ASCII コード・ページは、Linux が使用する文字セットで、Linux コンソールで使用されていると OS/400 が想定する文字セットを表します。 |
| TCP/IP ポート構成 | TCPPORTCFG | TCP/IP情報を設定します。この設定は OS/400 にいかなる構成を起こしません。ここに入力されるすべての情報は、/proc/iSeries/config で Linux に使用可能となります。Linux はこの情報を使用して、TCP/IP 情報を自動的に構成できます。TCP/IP 経路構成が CRTNWSD 画面に表示されないようにする機能があります。構成オプションを表示するには、オプション F9 を選択します。 |

表 13. NWSD のパラメーターと説明 (続き)

| プロンプト | パラメーター | パラメーターの説明 |
|------------------|------------|--|
| TCP/IP 経路 | TCPRTE | リモート宛先サーバーへの経路またはネットワーク・サーバーの TCP/IP 構成へのネットワークを識別できるようになります。経路の指定には、経路の宛先、サブネット・マスク、およびネクスト・ホップ IP アドレスという 3 つの要素が関係しています。最大で 24 のルート指定を入力できます。 |
| TCP/IP ホスト名 | TCPHOSTNAM | ネットワーク・サーバーに関連付ける略式のホスト名を指定します。ホスト名は、2 - 63 文字のテキスト・ストリングです。ホスト名には、以下の文字を使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> • A - Z の英字 • 0 - 9 の数字 • 負符号 (-) |
| TCP/IP ドメイン・サーバー | TCPDMNNAME | ネットワーク・サーバーに関連付けられたローカル・ドメイン・ネームを指定します。ドメイン・ネームは、2 - 255 文字のテキスト・ストリングです。ドメイン・ネームは、ピリオドで区切られた 1 つ以上のラベルで構成されます。各ラベルの文字数は最大で 63 です。ドメイン・ネームには、以下の文字を使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> • A - Z の英字 • 0 - 9 の数字 • 負符号 (-) • ピリオド (.)。ピリオドは、ドメイン・スタイル名のラベル同士を区切る場合に限り使用できます (RFC 1034 を参照)。 |
| TCP/IP ネーム・サーバー | TCPNAMESRV | ネットワーク・サーバーが使用する、ネーム・サーバーの IP アドレスを指定します。通常、これは iSeries サーバーの値と同じ値です。 |
| 制限装置リスト | RSTDDEVRSC | Linux を実行する論理区画が、アクセスできるサーバー内のすべての光ディスク装置と磁気テープ装置を指定できます。Linux がこれらの装置を使用できないように制限するために、この機能を使用します。 |

表 13. NWSD のパラメーターと説明 (続き)

| プロンプト | パラメーター | パラメーターの説明 |
|----------------|----------|---|
| 日付と時刻の同期化 | SYNCTIME | iSeries がネットワーク・サーバーの日付と時刻を、iSeries サーバーの日付と時刻と同期化するかどうかを指定します。TCP/IP 構成の場合と同様、このパラメーターは /proc/iSeries/config ファイル内でのみ反映されます。 |
| IPL ソース | IPLSRC | Linux カーネルのロード元を指定します。 |
| IPL ストリーム・ファイル | IPLSTMF | Linux カーネルへのパスを指定します。オンへの変更コマンドを実行しているユーザーは、ファイルとファイルに先行するパスに対する読み取りアクセスを持っている必要があります。 |
| IPL パラメーター | IPLPARM | 開始時に Linux カーネルに渡される一連の文字を指定します。これは、コマンド、またはカーネルの構成情報で構成されます。 |
| 権限 | AUT | サーバーは、オブジェクトが作成されたライブラリーの作成権限プロンプトに指定された値を使用して、オブジェクトの権限を判別します。 |
| テキスト | TEXT | ネットワーク・サーバーを簡単に説明するテキスト。テキスト記述は、50 文字以内でアポストロフィで囲む必要があります。 |

関連タスク

22 ページの『ネットワーク・サーバー記述とネットワーク・サーバー記憶スペースの作成』

ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) は、構成に名前を付け、Linux 区画を開始および停止するためのインターフェースを提供し、Linux と仮想ディスクとの間のリンクを提供するために使用されます。

アプリケーションのサポート

論理区画内で iSeries Access for Linux および Samba を効果的に使用方法について、以下のトピックを参照してください。

ODBC ドライバーおよび 5250 セッションの iSeries Access for Linux サポート

iSeries Access for Linux には、ODBC API に対応して作成された Linux アプリケーションから iSeries データベース・データにアクセスする ODBC ドライバーと、iSeries サーバーにアクセスする 5250 エミュレーターが組み込まれています。ODBC ドライバーは、iSeries Access for Windows の ODBC ドライバーに基づいています。

関連情報

iSeries Access for Linux

OS/400 NetServer による Samba のサポート

iSeries NetServer™ は Linux をサポートしています。このサポートにより、Samba を実行する Linux クライアントが iSeries NetServer に接続することができます。

Samba とは、Microsoft® Networking と互換性のあるオープン・ソースのクライアントおよびファイル・システムで、Linux の現行ディストリビューションに付属しています。

関連情報

Linux on iSeries

『SAMBA と NFS を使用して統合ファイル・システムのファイルにアクセスする方法』

Linux 区画のユーザーやアプリケーションは、さまざまなツールを使用することによって、統合ファイル・システム内に保存されているファイルにアクセスできます。その中には、ネットワーク・ファイル・システム (NFS) および SAMBA が含まれます。

SAMBA と NFS を使用して統合ファイル・システムのファイルにアクセスする方法

Linux 区画のユーザーやアプリケーションは、さまざまなツールを使用することによって、統合ファイル・システム内に保存されているファイルにアクセスできます。その中には、ネットワーク・ファイル・システム (NFS) および SAMBA が含まれます。

関連情報

『OS/400 NetServer による Samba のサポート』

iSeries NetServer は Linux をサポートしています。このサポートにより、Samba を実行する Linux クライアントが iSeries NetServer に接続することができます。

論理区画のバックアップと回復

iSeries で論理区画を組み込むと、2 つのオペレーティング・システム (OS/400 および論理オペレーティング・システム) が結合されます。バックアップを管理するために OS/400 のユーティリティまたは Linux のユーティリティ、あるいは両方を組み合わせたものを使用できます。

仮想および直接接続ディスクのバックアップ・オプション

Linux および OS/400 ユーティリティの仮想および直接接続ディスクのバックアップ・オプションについて説明します。

iSeries サーバー上の Linux 区画の関係するデータのバックアップおよびリカバリーには、2 種類のオプションがあります。

- Linux 内で実行されるユーティリティ
- OS/400 内で実行されるコマンド

Linux 内で実行されるユーティリティ

Linux 内で実行されるユーティリティは、ネイティブ・ディスクに Linux をインストールしたユーザー、およびデータのバックアップ中に Linux 区画をオフに変更できないユーザーにとって役立ちます。Linux において最も広く使用されるデータ・バックアップ・ユーティリティは、tar (Tape ARchive) ユーティリティです。tar ユーティリティは、ファイルおよびディレクトリーを 1 つのファイルにアーカイブします。そのアーカイブ・ファイルは、次の 2 種類の方法で保存できます。

- 仮想テープ装置または直接接続磁気テープ装置に、直接ファイルを書き込むことができます。
- 区画のファイル・システム内のファイルにファイルを書き込むことができます。この方法は、たとえば次のようにして実行します。

例: `tar -cvf /tmp/etc.tar /etc`

上記の例では、以下のとおりです。

表 14. 変数の説明

| 変数 | 説明 |
|---------------------------|----------------------------------|
| <code>c</code> | tar ファイルを作成する |
| <code>v</code> | verbose (tar ファイルに追加するファイルを表示する) |
| <code>f</code> | この後に tar ファイルの名前を指定 |
| <code>/tmp/etc.tar</code> | tar ファイルの名前 |
| <code>/etc</code> | tar ファイルに追加するオブジェクト |

注: `/etc` はディレクトリーなので、そのディレクトリーとそのサブディレクトリーの内容すべてが tar ファイルに追加されます。

tar が作成されたなら、さまざまな方法によってそれをオフライン媒体に保管できます。たとえば、仮想テープ装置や直接接続磁気テープ装置に書き込むことができます。あるいは、IFS にコピーしておき、後で保管/復元操作を実行する時点でそれを含めることができます。

Linux 区画のデータの tar アーカイブは、通常のサーバー稼働中に作成できます。また、区画の cron デーモン (chronology の略、Linux のスケジューリング・メカニズム) を使用することによって、tar ユーティリティーを自動的に開始することも簡単にできます。さらに、at ユーティリティーを使用すれば、1 回限りのバックアップ要求のスケジューリングも可能です。たとえば、9 月 19 日の午後 10 時に、tar ユーティリティーを使用して `/etc` ディレクトリーをバックアップするには、次の Linux コマンドを入力することができます。

```
at 10pm Sep 19 -f tar.command
```

注: tar、at、および cron ユーティリティーについては、Linux の man コマンド (manual の略) を使用してください。例: `man tar`

OS/400 コマンド

仮想ディスクを使用している場合は、OS/400 において使用できる、バックアップおよびリカバリーのための強力なツールがあります。オブジェクト保管 (SAV) コマンドとオブジェクト復元 (RST) コマンドを使用すると、仮想ディスク全体を現在の状態のまま保管したり復元したりできます。

SAV コマンドは、統合ファイル・システムの中で、QFPNWSSTG ディレクトリーの下にある仮想ディスクと同じ名前のディレクトリーを保管します。Linux カーネルが仮想ディスク上の PReP 開始区画に保管されている場合、バックアップおよびリカバリーを実行する方法としては、これが最も効率的です。ほとんどの Linux ディストリビューションでは、デフォルトのインストール・システムの一部としてそのようになっているのが普通です。

Linux カーネルが PReP 区画に保管されている場合には、iSeries を完全に再インストールした後で Linux 区画を復元し、開始することができます。また、保管した仮想ディスクは、FTP やテープ装置を使用することにより他の iSeries サーバーに送ることもできます。

読み取り専用共用記憶スペースの使用法

共用記憶スペースからのデータの読み取り方法を説明します。

バージョン 5 リリース 2 では、複数の Linux 区画の間で仮想ディスクを共有する機能が追加されました。複数の区画が、1 つの共有記憶スペースから同時にデータを読むことが可能になりました。仮想ディスクの共有機能は、複数の Linux 区画で同じファイルを使用することが必要になった場合に便利です。たとえば、

- Web サーバーとして使用されている複数の Linux 区画が同じ Web ページを参照する場合。
- 複数の Linux 区画が同じファイルから文書を読む場合。
- 複数の Linux 区画で、Apache Web サーバー・プログラムの同じ複写を実行する場合。

記憶スペースを使用するには、仮想ディスクにリンクしてユーザー・アクセスを設けなければなりません。共有読み取り専用記憶スペースを使用するには、以下のいずれかの方式を使用してください。

関連タスク

55 ページの『読み取り/書き込みモードでのディスクの共有アクセス』
読み取り/書き込みモードでディスクに共有アクセスする方法を説明します。

iSeries ナビゲーターを使用します。:

iSeries ナビゲーターを使用してディスク・ドライブをリンクするには、次のようにします。

1. 「ネットワーク」「Windows 管理」「ディスク・ドライブ」をクリックします。
2. 使用できるディスク・ドライブを右クリックして、「リンクの追加 (Add Link)」を選択します。
3. ディスクのリンク先にしたいサーバーを選択します。
4. 使用できるリンク・タイプの 1 つとリンク・シーケンス位置を選択します。
5. 「共有 - 読み取り (Shared - Read)」アクセス・タイプを選択します。
6. 「OK」をクリックします。

「ネットワーク・サーバー記憶域リンクの追加」コマンドを使用します。:

「ネットワーク・サーバー記憶域リンクの追加」コマンドを使用してディスク・ドライブをリンクするには、次の指示に従います。

1. 「ネットワーク・サーバー記憶域リンクの追加 (ADDNWSSTGL)」コマンドを入力します。複数の Linux 区画が並行して共有する仮想ディスクの記憶域リンクのアクセス・タイプは、読み取り (*READ) でなければなりません。



「サーバー記憶域リンクの追加 (ADDNWSSTGL)」画面で、「動的記憶域リンク」フィールドには *YES か *NO のいずれかの値を入力します。「アクセス」オプションを表示するには、F9 キーを押します。複数の Linux 区画がディスクを共用する場合、それらの区画は、Linux から読み取り専用アクセスによりディスクにアクセス (マウント) しなければなりません。

2. Linux にディスクの読み取り専用アクセス権を付与するには、次の 2 種類の方法があります。

- mount コマンドのオプションを使用する
- /etc/fstab ファイルにパラメーターとして読み取り専用を指定する

mount コマンドを使用してファイル・システムを読み取り専用としてマウントするには、たとえば次のようになります。

```
mount -o ro /dev/hdb1 /mnt/data2
```

/etc/fstab ファイルにおいて、ディスク資源を読み取り専用としてマウントすることを指定するエントリーは、次のようになります。

```
/dev/hdb1 /mnt/data ext2 ro 1 1
```

ユーザー・アクセスの更新および提供:

共用記憶スペースを更新してユーザー・アクセスを設ける手順は、次のとおりです。

1. すべてのユーザーに、記憶スペースに対する *SHRUPD アクセス権を付与します。
2. すべてのユーザーが、その記憶スペースを読み取り専用アクセスで同時にオープンするようにします。
3. すべてのユーザーが、Linux 内からその記憶スペースのデータへのアクセスを停止し、その装置をクローズする (アンマウントする) ようにします。

4. 1 ユーザーが、読み取り/書き込みアクセスでその装置をオープンし、データを更新した後、装置をクローズするようにします。
5. すべてのユーザーが、並行読み取り専用アクセスでその装置を再びオープンするようにします。

その他の制約事項:

- OS/400 のバージョン 5 リリース 2 またはそれ以降が必要ですが、1 次区画である必要はありません。
- 記憶スペースとしてサポートされる最大のサイズは 1000 GB です。
- 記憶スペースの数としてサポートされる最大の数は 64 です。しかし、サーバーにリンクできる記憶スペースは 64 ですが、Linux に認識される記憶スペースはそのうち先頭の 20 のみで、しかも Linux デバイストリビューションごとに異なります。

読み取り/書き込みモードでのディスクの共用アクセス

読み取り/書き込みモードでディスクに共用アクセスする方法を説明します。

複数の論理区画から 1 つの仮想ディスクへの同時アクセスは読み取り専用アクセスに限られてはいますが、V5R2 の機能拡張により、複数の論理区画が同じ仮想ディスクをそれぞれのネットワーク記憶域記述子 (NWS) にリンクできるようになりました。しかし、読み取り/書き込みモードでディスクにアクセスできるのは、一度に 1 つの区画だけです。

読み取り/書き込みモードでディスクにアクセスするには、以下のいずれかの方式を使用してください。

関連タスク

52 ページの『読み取り専用共用記憶スペースの使用方法』
共用記憶スペースからのデータの読み取り方法を説明します。

iSeries ナビゲーターを使用します。:

iSeries ナビゲーターを使用してディスク・ドライブにアクセスするには、次のようにします。

1. 「ネットワーク」「Windows 管理」「ディスク・ドライブ」をクリックします。
2. 使用できるディスク・ドライブを右クリックして、「リンクの追加 (Add Link)」を選択します。
3. ディスクのリンク先にしたいサーバーを選択します。
4. 使用できるリンク・タイプの 1 つとリンク・シーケンス位置を選択します。
5. 「共用 - 更新 (Shared - Update)」アクセス・タイプを選択します。
6. 「OK」をクリックします。

「ネットワーク・サーバー記憶域リンクの追加」コマンドを使用します。:

「ネットワーク・サーバー記憶域リンクの追加」コマンドを使用してディスク・ドライブをリンクするには、次の指示に従います。

1. 「ネットワーク・サーバー記憶域リンクの追加 (ADDNWSSTGL)」コマンドを入力します。このコマンドは、ネットワーク記憶スペースをネットワーク・サーバー記述子にリンクします。アクセス・タイプを共用アップデート (*SHRUPD) に設定する必要があります。



2. 「動的記憶域リンク」フィールドに、*YES または *NO のいずれかを指定できます。
3. **F9** キーを押して、「アクセス」フィールドを表示します。

ネットワーク記憶域を区画にリンクすれば、`mount` コマンドを使用することによって Linux がその記憶域にアクセスできるようになります。たとえば、仮想ディスクを読み取り/書き込みモードでマウントするには、次のような `mount` コマンドを使用します。

```
mount /dev/hdb1 /mnt/data2
```

他の区画がそのディスクをマウントしていなければ、`mount` は正常に実行されます。他のいずれかの区画がそのディスクをマウントしていた場合、次のようなエラーになります。

```
mount: /dev/hdb5: can't read superblock
```

その区画にアクセス権を付与するためには、第 1 の区画 (つまり現在その資源にアクセスしている区画) がまずアクセス権を解放する必要があります。そのためには、次のようにして Linux の `umount` コマンドを使用します。

```
umount /dev/hdb1
```

第 1 の Linux 区画が資源を解放した場合、第 2 の Linux 区画がそれをマウントし、アクセスできるようになります。

iSeries 区画内の Linux サーバーの複製を短時間で作成する

仮想装置 (ディスクおよびネットワーク) を使用すると、Linux のハードウェア構成を変更することなく、ある iSeries サーバー上の Linux 区画の複製を作成し、それを同じまたは別の iSeries サーバーに復元する場合に、Linux 区画に直接接続することの必要なハードウェア装置の数が少なくなります。

仮想ディスクを複製するには、次のようにします。

1. 専用保守ツールにサインオンします。
2. ネットワーク・サーバー記述の作成 (CRTNWS) コマンドを実行します。
3. ネットワーク・サーバー記憶スペースの処理 (WRKNWSSTG) コマンドを実行します。
4. 複製するネットワーク・サーバー記憶スペースの横のオプション・フィールドに、3 (コピー) を入力します。「NWS 記憶スペースの作成 (Create NWS Storage Space)」画面が表示されます。「サイズ」パラメーターおよび「複製元の記憶スペース (From storage space)」パラメーターの入力フィールドには、すでに値が入力されています。
5. 新しい仮想ディスクの名前と説明を指定してから、**Enter** キーを押してください。この時点で、既存の仮想ディスクの複製となる新しい仮想ディスクがサーバーによって作成されます。
6. 複製を作成する仮想ディスクごとに、ステップ 1 - 5 を繰り返します。
7. ネットワーク・サーバー記憶域リンクの追加 (ADDNWSSTGL) コマンドを使用することによって、各ネットワーク・サーバー記憶スペースを、該当するネットワーク記憶域記述にリンクします。
8. VRYCFG コマンドを使用することによって、新しい論理区画をオンに変更します。

1 つの仮想ディスクを 2 つのディスクに分割して、付加的なディスク記憶域を保管します。読み取り専用アクセス用に大きいディスク、読み取り/書き込みアクセス用に小さいディスクを使用します。これで読み取り/書き込みディスクをコピーし、読み取り専用ディスクを共用できるようになりました。

ホスト管理の Linux ファイルをホスト上の共用テープ装置に保管および復元する

ホスト管理の Linux データを共用磁気テープ装置に保管し、その磁気テープ装置からデータを復元するには、Linux の tar コマンドか、または OS/400 のオブジェクト保管 (SAV) コマンドとオブジェクト復元 (RST) コマンドを使用します。

tar を使用してデータを保管した場合、データを復元するには再び tar を使用するしかありません。同じように、SAV を使用してデータを保管した場合、データを復元するには RST を使用する以外に方法はありません。データのバックアップおよび復元のためのこれら 2 つの方法には、互換性がありません。

次のような制限があります。

- Redhat および SUSE での磁気テープ装置の名前は、/dev/iseries/vt0、vt1、などです。Turbo Linux の場合は、独自の命名規則が使用されます。
- Linux から磁気テープ装置を使用するには、OS/400 でテープをオフに変更する必要があります。OS/400 の SAV または RST コマンドを使用して NWSD への保管または復元を実行するには、Linux が非アクティブになっていなければなりません (NWSD がオフに変更されていなければなりません)。
- 記憶スペースの保管は、大抵の場合、tar を使用した保管よりもずっと高速ですが、ファイル・レベルのバックアップやりかばりの機能はありません。
- Linux では、1 つのライブラリー装置の中のテープを切り替える機能はサポートされていません。現在装置に入っているテープのみ、使用できます。
- 同じテープ・ボリュームに、OS/400 データと tar データの両方を保管することはできません。

Linux の tar を使用してホスト管理の Linux ファイルを保管および復元する

Linux の tar によるバックアップは、ファイル・レベルのバックアップです。tar コマンドで指定されたファイルおよびディレクトリだけが保管されます。そのため、tar を使用する場合、ファイル・サーバーに含まれない Linux データは保管されません。たとえば、tar コマンドを使用した場合、PReP 開始区画にあるカーネルは保管できません。

Linux の tar によるファイルの保管

ホスト管理の Linux ファイルをホストの共用磁気テープ装置に保管するための Linux コマンドは、次のとおりです。

```
tar -b 40 -c -f /dev/iseries/vt0 files
```

ここで、

| | |
|---------------------|--------------------------|
| tar | = コマンド名 (Tape ARchive) |
| -b 40 | = ブロック・サイズ (セクター単位) |
| -c | = コマンド・アクション (create、作成) |
| -f /dev/iseries/vt0 | = 仮想テープ装置とその番号 |
| files | = 保管するファイルの名前 |

通常 Linux は、磁気テープを「キャラクター型デバイス」として処理します。つまり、データの長いストリームとしては高速に読み書きできるが、特定のデータには短時間でアクセスできないものとして処理します。一方、Linux においてディスクまたは CD は「ブロック型デバイス」として処理されます。つまり、そのデバイスのどの位置についても読み取りと書き込みを高速に実行でき、mount コマンドに適したものとして処理します。-b 40 引数は、Linux ではアーカイブ・ストリームを 40 セクター (20 KB) のブロックを単位として書き込むように指定しています。この引数の値を指定しない場合、デフォルト値は 20 セクター (10 KB) です。その場合、値に 40 を指定した場合に比べて、仮想テープに関するパフォーマンスは低くなります。

-c 引数は、tar コマンドによって、(アーカイブからファイルを復元するのではなく、また既存のアーカイブに個々のファイルを追加するのでもなく)、新しいアーカイブを作成すること、または古いものが存在する場合はそれを上書きすることを指定しています。

-f /dev/iseries/vt0 引数は、iSeries サーバー上の仮想テープ 0 を使用することを指定しています。tar コマンドの実行後、Linux はその磁気テープ装置をクローズし、テープを巻き戻します。1 つのテープに複数のアーカイブを保管する場合は、テープを一度使用した後も巻き戻さないようにし、次のファイル・メーカーまでテープを移動する必要があります。その場合は、装置として vt0 の代わりに nvt0 (nonrewinding virtual tape (巻き戻しなし仮想テープ)) を指定します。

files 引数には、保管するファイルおよびディレクトリーの名前を指定します。

Linux の tar によるファイルの復元

ホスト管理の Linux ファイルをホストの共用磁気テープ装置から復元するための Linux コマンドは、次のとおりです。

```
tar -b 40 -x -f /dev/iseries/vt0 files
```

これは、ファイルをテープに保管した際に使用した tar コマンドにおいて、-c (create) 引数を、-x (extract) 引数に置き換えたものです。

OS/400 の SAV および RST を使用してホスト管理の Linux データを保管および復元する

ホスト管理の Linux データを OS/400 からバックアップする場合、ドライブ・レベルのバックアップになります。つまり、個々の Linux ファイルではなく、仮想ディスクまたはネットワーク記憶スペースの内容全体がバックアップされます。したがって、正しい SAV コマンドを使用した場合、PRreP 開始区画内のカーネルも含め、ドライブ上のすべての情報がバックアップされます。

OS/400 SAV によるホスト管理の Linux データの保管

OS/400 の場合、データはネットワーク・サーバー記憶スペースに入っています。ホスト管理の Linux ファイルをホストの共用磁気テープ装置に保管するための OS/400 コマンドには、次のものが含まれます。

1. オブジェクト保管 (SAV)。ネットワーク・サーバー記憶スペースを保管ファイルに保管します。「オブジェクトの保管 (Save Object)」画面で、次のパラメーター値を入力します。
 - 「装置」フィールドで、関連する OS/400 装置記述を入力します。たとえば、磁気テープ装置の名前が TAP01 の場合は `/qsys.lib/tap01.devd` と入力します。QGPL などのライブラリーに含まれている保管ファイルに保管するには、`/qsys.lib/qgpl.lib/myfile.file` と入力します。
 - 「オブジェクト: 名前 (Objects: Name)」フィールドに、ネットワーク・サーバー記憶スペースの IFS 位置を入力します。たとえば、ネットワーク・サーバー記憶スペースの名前が TEST1 の場合は、`/qfpnwsstg/test1` と入力します。
2. 「保管オブジェクトの表示 - 保管ファイル (DSPSAVF)」を実行して、変更された保管ファイルが存在していることを確認します。新しい保管ファイル名の左にある「オプション」フィールドに、5 (サブディレクトリー内のオブジェクトを表示 (Display objects in subdirectory)) を入力します。保管ファイル内のストリーム・ファイルのリストが表示されます。

OS/400 RST によるホスト管理の Linux データの復元

ホスト管理の Linux ファイルをホストの共用磁気テープ装置から復元するための OS/400 コマンドは、オブジェクト復元 (RST) コマンドです。「オブジェクトの復元 (Save Object)」画面で、次のパラメーター値を入力します。

- 実磁気テープ装置から復元する場合は、「装置」フィールドに、関連する OS/400 装置記述を入力します。たとえば、磁気テープ装置の名前が TAP01 の場合は `/qsys.lib/tap01.devd` と入力します。QGPL など、ライブラリーに含まれている保管ファイルから復元するには、`/qsys.lib/qgpl.lib/myfile.file` と入力します。
- 「オブジェクト: 名前 (Objects: Name)」フィールドに、ネットワーク・サーバー記憶スペースの IFS 位置を入力します (`/qfpnwsstg/test1` など)。

Linux 仮想テープのトラブルシューティング

Linux 仮想テープへのアクセス中にエラーが発生した場合は、ファイル `/proc/iSeries/viotape` を調べてください。これには、OS/400 装置名と Linux 装置名間のマッピングの記述と、各テープ装置で最後に発生したエラーが記録されています。以下に、よくあるエラーとその対処方法を示します。

Device unavailable (装置が利用不可)

OS/400 で装置をオフに変更してください。

「準備未完了 (Not ready)」

操作を再試行してください。`/proc/iSeries/viotape` 内の同じ記述を使用しても、やはり操作がエラーになる場合は、磁気テープ装置内に正しい媒体が入っていることを確認してください。

Load failure (ロード障害) または Cleaning cartridge found (クリーニング・カートリッジ)

磁気テープ装置内に正しい媒体が入っていることを確認してください。

Data check (データ・チェック) または Equipment check (装置チェック)

テープの読み取りまたは書き込みで、サポートされているブロック・サイズを使用していることを確認してください。現在のところ、IBM でサポートされている磁気テープ装置で使用できるブロック・サイズは、20 KB です (tar の `-b 40` 引数で指定)。

Internal error (内部エラー)

サービス技術員に連絡してください。

論理区画構成データの保管

論理区画構成データは、物理サーバーのライフ全体にわたって自動的に保守されます。

OS/400 の各区画ロード・ソースには、構成データのコピーが入っています。論理区画の開始デバイスには、区画構成データは入っていません。1 つの 1 次 OS/400 区画と 1 つ以上の論理区画で構成されるシステムは、OS/400 ロード・ソース・デバイスを 1 次区画にミラーリングする必要があります。

構成を始めから再作成することが必要となるのは、別の物理サーバーへの災害時回復を行う場合のみです。論理区画構成を変更する場合は、論理区画のサーバー構成を印刷する必要があります。この印刷出力があれば、構成を再作成するときに役立ちます。

保管操作中は、論理区画の構成データはメディア・ボリュームには保管されません。サーバーに論理区画があるかどうかにかかわらず、データはサーバーに復元されます。ただし、必要に応じて、回復の目的で論理区画の構成データを処理することは可能です。

注: 長期間電源をオフにしていた論理区画は、論理区画構成の変更後に少なくとも一度は再始動する必要があります。これによって、サーバーが論理区画のロード・ソースに対する変更を更新できるようになります。

関連タスク

41 ページの『論理区画のサーバー構成の印刷』

OS/400 V5R2 を 1 次区画で実行している場合で、サーバー上の他のすべての区画が論理区画である場合は、すべての入出力資源のサーバー構成を印刷することを強くお勧めします。

関連情報

すべての構成データの保管

構成データ

区画の再始動

論理区画に関連した NWSD およびディスク・ドライブのバックアップ

仮想ディスクを使用する論理区画を iSeries 上にインストールするとき、ホスト OS/400 区画は、バックアップ対象となる論理オペレーティング・システム用のネットワーク・サーバー記述およびディスク・ドライブを作成します。このうち一部のディスク・ドライブはサーバー関連 (インストール・ドライブおよびサーバー・ドライブ) であり、他のディスク・ドライブはユーザー関連です。論理オペレーティング・システムはこれらを全体として単一のサーバーと見なす場合があるため、正常に復元するためには、すべてのディスク・ドライブとネットワーク・サーバー記述を保管する必要があります。

iSeries の論理区画のインプリメンテーションでは、仮想ディスクを OS/400 ネットワーク・サーバーの記憶スペース・オブジェクトとして保管および復元できます。これらのオブジェクトは、OS/400 サーバー全体のバックアップを実行するとき、OS/400 サーバーの一部として保管されます。そのほか、iSeries 上の論理区画に関連したネットワーク・サーバー記述と記憶スペースを特定して保管することもできます。サーバー・ドライブを毎日バックアップすることをお勧めします。

関連タスク

63 ページの『論理区画用 NWSD のバックアップ』

iSeries サーバー上の論理区画仮想ディスクに関連した記憶スペース・オブジェクトを保管するとき、ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) も保管する必要があります。そうしないと、論理区画が一部のアイテム (例: 区画のファイル・システム許可) を再確立できなくなる可能性があります。

関連情報

バックアップおよび回復

NWSSTG 上でのレスキュー・イメージの作成

論理区画のレスキュー・ソリューションとして、論理区画をレスキューする目的のためだけに IFS 上に置いておくことができる、小さいネットワーク記憶スペース (NWSSTG) を作成する方法があります。

まず、Linux レスキュー・サーバーに通常必要なことを簡単に説明します。多くのディストリビューターは、インストール・ディスクにレスキュー・イメージを組み込んでいます。これは、開始すると、すべての基本診断ツール、ドライバー、および以前に存在していた論理区画を調べるのに役立つ他のユーティリティーが含まれている最小のディストリビューションになります。論理区画のインストール時に、レスキュー・サーバーを含むネットワーク記憶スペースを作成することで、このプロセスを簡略化できます。

ネットワーク記憶域上にレスキュー・イメージを作成する前に、各論理区画の構成情報を記録しておくことは重要です。/etc/fstab ファイルから得られるドライブ構成を記録することができます。「ifconfig」コマンドを実行すると報告されるネットワーク情報を取り込むこともできます。各区画で必要なモジュールのリストを作成しておくのもよいでしょう。Linux から「lsmod」コマンドを使用することによって、使用中のモジュールを調べることができます。上記のコマンドやファイルから得られた情報を、レスキュー・ネットワーク記憶スペースに保管可能なファイルに入れることをお勧めします。

レスキュー記憶スペースを作成するには、まず Linux の資料を調べて最小インストールに必要なスペースの量を確認してください。ディストリビューターの資料にリストされている値よりわずかに大きいネットワーク記憶スペースを作成します (CRTNWSSTG)。たとえば、サーバーの最小インストールが 291 MB であると資料に記されている場合は、425 MB の記憶スペースを作成してください。記憶スペースをさらに大きくしておく、スワップ区画、PReP 開始区画を作成するスペースができ、レスキュー・イメージ内で使用できるようにしたい追加のソフトウェアをインストールする余裕もできます。レスキュー・イメージを作成するのに使用されたディストリビューションを示すメモを記憶スペースの説明フィールドに書き、保管の必要があることを警告することができます。次に、この記憶スペースをネットワーク記憶域記述子 (NWS) にリンクします。このステップで新しい NWS を作成する必要はありません。既存の記憶スペースをリンク解除し、一時的にレスキュー記憶スペースを既存のどの NWS にでもリンクできます。

次に、資料の説明に従ってディストリビューターのインストール・サーバーを開始し、プロンプトに従います。手動でインストールの区画を作成する場合は、PReP 開始区画を作成するようにしてください。ディストリビューターのパッケージ・グループを選択する段階に到達したら、サポートされる最小のパッケージ数を選択したいことを示します。パッケージ・グループの名前はディストリビューションによって異なります。最後に、インストーラーによってパッケージのインストールと構成が完了されます。

インストールの終了後、インストーラーによってサーバーが始動されます。この時点で、時間を取って、レスキュー・サーバーに必要なユーティリティーのすべてが揃っていることを確かめてください。論理区画の場合は、ネイティブ・ディスクを処理するためのユーティリティーが使用可能であることを確認するために、「rpm -qa | grep ibmsis」を実行します。区画に必要なデバイス・ドライバー (すなわち、イーサネットの場合は pnet32、トークンリングの場合は Olympic) がインストールされていることを確認する必要があります。コンパイル済みのカーネル・モジュールは、/lib/modules/kernel version/kernel/drivers ディレクトリ構造にあります。この時点で、論理区画に必要な他のすべての特別なドライバーまたはソフトウェア・パッケージをインストールし、ファイルを他の論理区画の構成情報と一緒にレスキュー・サーバー・ネットワーク記憶スペースに FTP で転送する必要もあります。

一部の Linux ディストリビューションでは、インストール後にカーネルを手動でインストールしなければならない場合があります。カーネルのインストールの詳細については、適切なインストール資料を調べてください。

レスキュー記憶スペースをネットワーク記憶域から開始することになるので、ルート区画へのパスをレスキュー記憶スペースにメモしておく必要があります。ルート区画は、「`cat /etc/fstab`」コマンドを実行することによって判別できます。2 番目の列に「/」がある区画がルート区画です。ディストリビューターの資料にも、ルート区画の判別に役立つ情報があります。

これでレスキュー・イメージの作成が完了しました。「`shutdown -h now`」を使用して論理区画をシャットダウンし、シャットダウンが完了したら区画をオフに変更します。区画をオフに変更したら、レスキュー記憶スペースをリンク解除して、NWSSTG の正規の記憶スペースを再リンクします。

関連タスク

『NWSSTG からのレスキュー・イメージの使用』

レスキュー・イメージには、すべての基本診断ツール、ドライバー、および以前に存在していた論理区画を調べるのに役立つ他のユーティリティの最小バージョンが含まれています。

NWSSTG からのレスキュー・イメージの使用

レスキュー・イメージには、すべての基本診断ツール、ドライバー、および以前に存在していた論理区画を調べるのに役立つ他のユーティリティの最小バージョンが含まれています。

NWSSTG 上に作成したレスキュー・イメージを使用するには、以下のステップを実行します。

1. WKRNNWSSTG を使用して、障害が起こった区画の仮想記憶スペースを切断します (可能な場合)。
2. レスキュー記憶スペースを最初のドライブとして NWSSTG に接続し、元の記憶スペースを 2 番目のドライブとして再接続します (可能な場合)。
3. 障害が起こった区画の NWSSTG を、IPL Source *NWSSTG から開始するように編集します。IPL パラメーター・フィールドも、レスキュー記憶スペース上のルート区画を反映するように編集します。ほとんどのディストリビューションの場合、これは「`root=/dev/hda3`」や「`root=/dev/vda1`」などのパラメーターです。Linux の資料を参照するか、「`cat /proc/iSeries/mf/B/cmdline`」コマンドを使用して他の実行中の区画を調べてください。
4. 区画をブートします。
5. 既存のルート区画がネイティブ・ディスク上にある場合は、「`insmod ibmsis`」コマンドを使用して `ibmsis` ドライバーを挿入する必要があります。
6. レスキュー対象のネットワーク記憶スペースのルート区画をマウントするマウント・ポイントを作成します。「`mkdir /mnt/rescue`」などのコマンドを使用できます。
7. レスキュー対象のネットワーク記憶スペースのルート区画をマウントします。「`mount -t 区画のタイプ 区画の位置 マウント・ポイント`」コマンドを使用してドライブをマウントします。ここで、区画のタイプは `ext2` や `reiserfs` などの区画形式で、区画の位置は `/dev/hdb3` (非 `devfs` の場合)、`/dev/hd/disc1/part3` (`devfs` サーバーの場合)、またはネイティブ・ディスク上の区画の場合は `/dev/sda2` です。仮想ディスクを使用している場合は、レスキュー対象のドライブは、最初のドライブではなく 2 番目のドライブであることに注意してください。(すなわち、区画が正常に実行されていたときのドライブが `/dev/hda3` だった場合は、このドライブはレスキュー・サーバーでは `/dev/hdb3` になります。) この場合も、Linux の資料またはレスキュー NWSSTG を作成したときの構成ファイルが、レスキュー対象の区画のルートのデバイスを判別するのに役立ちます。最後に、マウント・ポイントは、上記の例を使用する場合は `/mnt/rescue` のようになります。

上記のステップを実行した後で、レスキュー記憶スペースで提供されるレスキュー・ツールを、作成したマウント・ポイントに対して使用できます。または、「`chroot mount point`」を使用して区画のルートを変更し、その区画を区画自体の記憶スペースから操作することができます。

関連概念

61 ページの『NWSSTG 上でのレスキュー・イメージの作成』

論理区画のレスキュー・ソリューションとして、論理区画をレスキューする目的のためだけに IFS 上に置いておくことができる、小さいネットワーク記憶スペース (NWSSTG) を作成する方法がありません。

論理区画用 NWSD のバックアップ

iSeries サーバー上の論理区画仮想ディスクに関連した記憶スペース・オブジェクトを保管するとき、ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) も保管する必要があります。そうしないと、論理区画が一部のアイテム (例: 区画のファイル・システム許可) を再確立できなくなる可能性があります。

NWSD を保管するには、構成の保管 (SAVCFG) コマンドを以下のように使用します。

1. OS/400 コマンド行で、SAVCFG と入力します。
2. **Enter** を押すと、OS/400 は NWSD 構成を保管します。

重要: 構成の保管コマンド (SAVCFG) によって、NWSD に関連したオブジェクト、および現在の静的ネットワーク・サーバーの記憶スペースが保管されます。動的に追加された記憶スペースに関連したリンクは保管されません。構成、および動的にリンクされる記憶スペースを復元した後、これらのリンクを手動で追加する必要があります。

関連情報

60 ページの『論理区画に関連した NWSD およびディスク・ドライブのバックアップ』

仮想ディスクを使用する論理区画を iSeries 上にインストールするとき、ホスト OS/400 区画は、バックアップ対象となる論理オペレーティング・システム用のネットワーク・サーバー記述およびディスク・ドライブを作成します。このうち一部のディスク・ドライブはサーバー関連 (インストール・ドライブおよびサーバー・ドライブ) であり、他のディスク・ドライブはユーザー関連です。論理オペレーティング・システムはこれらを全体として単一のサーバーと見なす場合があるため、正常に復元するためには、すべてのディスク・ドライブとネットワーク・サーバー記述を保管する必要があります。

バックアップおよび回復

論理区画の NWSD の復元

災害時回復の状況では、すべての構成オブジェクトを復元します。これらのオブジェクトには、論理区画のネットワーク・サーバー記述 (NWSD) も含まれます。

状況によっては、たとえば、新しいハードウェアにマイグレーションする場合などは、特に NWSD を復元する必要があります。OS/400 が統合ファイル・システム内のディスク・ドライブを、復元された NWSD に自動的に再リンクするようにするには、それらのディスク・ドライブを最初に復元してください。

NWSD を復元するには、以下のようにして構成情報保存 (RSTCFG) コマンドを使用します。

1. OS/400 コマンド行で RSTCFG と入力して **F4** (プロンプト) を押します。
2. オブジェクト・フィールドに NWSD の名前を指定します。
3. メディアから復元する場合は、装置フィールドに装置名を指定します。保管ファイルから復元する場合は、*SAVF を指定し、適切なフィールドで保管ファイルの名前とライブラリーを識別します。
4. Enter を押して、OS/400 が NWSD を復元するようにします。

関連タスク

28 ページの『NWSD の開始と停止』

Linux を実行している論理区画の IPL を実行するには、NWSD を開始して停止する (オフに変更してからオンに変更する) 必要があります。

論理区画からのディスク・ドライブのリンク解除

Linux 仮想ディスク・ドライブ (ネットワーク・サーバー記憶スペース) をリンク解除すると、それは論理区画から切断され、ユーザーからはアクセスできなくなります。論理区画をアンインストールする場合にも、ディスク・ドライブをリンク解除する必要があります。

NWSD を開始して停止するには、以下のいずれかの方式を使用してください。

関連タスク

47 ページの『論理区画用ディスク・ドライブの削除』

論理区画内のディスク・ドライブを削除するには、OS/400 コマンドを使用する必要があります。

46 ページの『論理区画用 NWSD の削除』

ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) をリンク解除して、論理区画から削除する方法を説明します。

iSeries ナビゲーターでのディスク・ドライブのリンク解除:

論理区画からディスク・ドライブをリンク解除するには、以下のようになります。

1. 論理区画用の NWSD をオフに変更します。詳しくは、28 ページの『NWSD の開始と停止』を参照してください。
2. 「ネットワーク」 → 「Windows 管理」 → 「ディスク・ドライブ」をクリックします。
3. 除去したいディスク・ドライブの名前を右クリックします。
4. 「リンクの除去 (Remove Link)」をクリックします。
5. リンクされているサーバーのリストから、サーバーを選択します。
 - a. 再リンクする予定のディスク・ドライブをリンク解除する場合は、「リンク・シーケンスの圧縮 (Compress link sequence)」のチェックマークを外します。サーバーをオンに変更する前に、ディスク・ドライブを同じリンク・シーケンス番号で再リンクする必要があります。リンク・シーケンス値を圧縮しないことによって、すべてのディスク・ドライブをリンク解除してから正しいシーケンスで再リンクすることを避けることができます。
6. 「除去 (Remove)」をクリックします。

CL コマンドでのディスク・ドライブのリンク解除:

サーバー記憶域リンクの除去 (RMVNWSSTGL) CL コマンドを使用して、論理区画からディスク・ドライブをリンク解除するには、以下のようになります。

1. 論理区画用の NWSD をオフに変更します。詳しくは、28 ページの『NWSD の開始と停止』を参照してください。
2. RMVNWSSTGL と入力して、F4 を押します。
3. 「ネットワーク・サーバー記憶スペース (Network server storage space)」フィールドにリンク解除したい記憶スペースの名前を入力します。Enter を押します。
4. 「ネットワーク・サーバー記述 (Network server description)」フィールドに、記憶スペースをリンク解除したいサーバーの名前を入力します。Enter を押します。
 - a. 再リンクする予定の、リンクされたディスク・ドライブをリンク解除する場合は、「再番号付け」フィールドに *NO を指定します。サーバーをオンに変更する前に、ディスク・ドライブと同じシーケンス番号で再リンクする必要があります。自動番号付けを防ぐことによって、すべてのディスク・ドライブをリンク解除してから再リンクすることを避けることができます。
5. Enter を押します。

論理区画をアンインストールする場合は、次のステップはディスク・ドライブの削除です。詳しくは、47 ページの『論理区画用ディスク・ドライブの削除』を参照してください。アンインストールしない場合は、論理区画用の NWS D をオンに変更します。詳しくは、28 ページの『NWS D の開始と停止』を参照してください。

保管するオブジェクトと OS/400 上のそのオブジェクトの位置

論理オペレーティング・システムを区画にインストールして仮想記憶を使用することによって、多くのオブジェクトが作成されます。

これらのオブジェクトの一部はサーバー関連オブジェクトであり、他のオブジェクトはユーザー関連オブジェクトです。厳密に復元を行いたい場合は、これらすべてのオブジェクトを保管する必要があります。これらのオブジェクトは、サーバーで OS/400 GO SAVE コマンドのオプションを使用して保管することができます。オプション 21 を指定すると、サーバー全体が保管されます。オプション 22 を指定すると、サーバー・データ (QUSRSYS 内のオブジェクトを含む) が保管されます。オプション 23 を指定すると、すべてのユーザー・データ (QFPNWSSTG 内のオブジェクトを含む) が保管されます。

特定のオブジェクトを保管したい場合は、次の表を使用して、OS/400 上のそのオブジェクトの位置と使用するコマンドを調べてください。

表 15. 保管するオブジェクト

| オブジェクトの内容 | オブジェクト名 | オブジェクトの位置 | オブジェクト・タイプ | 保管コマンド |
|-----------------------------|---------|-------------|-------------------------------|---|
| 仮想ディスクを使用する論理区画の場合 | | | | |
| ゲスト区画と仮想ディスク・ドライブ | stgspc | /QFP NWSSTG | サーバー内のユーザー定義ネットワーク記憶スペース | GO SAVE、オプション 21 または 23 SAVOBJ OBJ('/QFPNWSSTG /stgspc') DEV('/QSYS.LIB/ TAP01.DEVD') |
| | | | ユーザー ASP 内のユーザー定義ネットワーク記憶スペース | SAVOBJ((('/QFPNWSSTG /stgspc') ('/dev/QASPnn /stgspc.UDFS')) DEV('/QSYS.LIB/ TAP01.DEVD') |
| サーバーを使用するすべての論理区画の場合 | | | | |
| 論理区画からのメッセージ | 不特定 | 不特定 | サーバー・メッセージ・キュー | GO SAVE、オプション 21 または 23 SAVOBJ OBJ(msg) LIB(qlibrary) DEV(TAP01) OBJTYPE(*MSGQ) |
| | | | | 論理区画の OS/400 構成オブジェクト |
| 不特定 | 不特定 | QUSRSYS | 不特定 | GO SAVE、オプション 21 または 23 SAVLIB LIB(*NONSYS) または LIB(*ALLUSR) |

関連情報

サーバーの一部を手操作で保管する

論理区画の開始

論理区画を開始する方法については、以下のトピックを参照してください。

Linux 実行時に使用する IPL タイプの決定

NWSD 上の IPL タイプ・パラメーターは、論理オペレーティング・システムのロード元となるソースを判別します。

まず最初に、iSeries サーバーの初期プログラム・ロード (IPL) が、LPAR 構成によって管理される 4 つの場所のいずれかから行われることを理解する必要があります。これら 4 つの場所をそれぞれ A、B、C、および D と呼びます。初期プログラム (Linux の場合、Linux カーネル) は、以下の 2 つの方法でこれらの場所にロードされます。

- Linux 自体から
- 場所 C には、ネットワーク・サーバー記述 (NWSD) を使用する OS/400 によってロードされます。

NWSD 自体に IPLSRC というパラメーターがあり、これは論理区画のロード元を指定します。このパラメーターの値として、以下のものが可能です。

表 16. IPLSRC の値

| IPLSRC の値 | 説明 |
|-----------------------------|---|
| A | 場所 A から論理区画をロードします。場所 A には、すでに Linux からカーネルがロード済みでなければなりません。安定した既知のカーネルを保管するには、場所 A を使用することをお勧めします。 |
| B | 場所 B から論理区画をロードします。場所 B には、すでに Linux からカーネルがロード済みでなければなりません。新しいカーネルをテストするとき、場所 B を使用することをお勧めします。 |
| D | この IPL タイプは、将来の使用のために IBM によって予約されています。 |
| *Panel | この区画は、オペレーターのパネルに示されたソースから始動されます。 |
| *NWSSTG (ネットワーク・サーバー記憶スペース) | この IPL タイプは、仮想ディスクから区画を開始するために使用されます。OS/400 は仮想ディスク内にカーネルを見つけて、それを場所 C にロードします。その後、区画は C から IPL に設定されます。OS/400 は、NWSD に接続されている最初の仮想ディスクを検索して、開始可能かつタイプ 0x41 (PReP 開始) の区画を見つけようとします。この場所にあるコンテンツは C にロードされます。このタイプの区画が存在しない場合、区画は失敗します。 |
| *STMF (ストリーム・ファイル) | この IPL タイプは、OS/400 統合ファイル・システムにロードされたカーネルから区画を開始するために使用されます。統合ファイル・システムには、OS/400 上の光ディスク (CD) ドライブにあるファイルが含まれることに注意してください。OS/400 は指定されたファイルを場所 C にロードして、区画が C から IPL に設定されます。通常、Linux の初期インストールはこの方法で行われます。 |

LPAR 構成画面からのブート

LPAR 構成画面を使用して、論理区画を 4 つの場所から IPL に設定することができます。これらの場所は A、B、C、および D です。現在のところ、D は将来の使用のために予約されています。IPL タイプは、初期プログラム・ロード (IPL) 中にサーバーがどのプログラム・コピーを使用するかを決定します。このパラメーターの値として、以下のものが可能です。

表 17. IPLSRC の値

| IPLSRC の値 | 説明 |
|-----------|---|
| A | 場所 A から論理区画をロードします。場所 A には、すでに Linux からカーネルがロード済みでなければなりません。安定した既知のカーネルを保管するには、場所 A を使用することをお勧めします。 |
| B | 場所 B から論理区画をロードします。場所 B には、すでに Linux からカーネルがロード済みでなければなりません。新しいカーネルをテストするとき、場所 B を使用することをお勧めします。 |
| C | ネットワーク・サーバー記述 (NWS) またはストリーム・ファイル (STMF) から区画がロードされる時、通常、この IPL タイプが使用されます。C IPL タイプの使用方法について、詳しくは *NWSSTG を参照してください。 |
| D | この IPL タイプは、将来の使用のために IBM によって予約されています。 |

A および B IPL ソースからのブート

Linux を実行する論理区画は、A または B IPL ソースから開始することができます。

このオプションを使用するには、Linux がサーバーにインストール済みで、別のソースからすでにロードされていなければなりません。このタスクを実行する前に、管理者権限を取得する必要があります。カーネルを A または B IPL ソースにコピーするには、/proc ファイル・システムを使用します。カーネルを A IPL ソースにコピーするとき、以下のコマンドを使用します。dd if=/path/to/vmlinux of=/proc/iSeries/mf/A/vmlinux bs=4096 カーネルを B IPL ソースにコピーするとき、以下のコマンドを使用します。dd if=/path/to/vmlinux of=/proc/iSeries/mf/B/vmlinux bs=4096 この開始ソースを使用する利点は、Linux の方がより速く開始することです。欠点は、開始ソースを保管および復元できないことです。さらに、どちらの IPL ソースがカーネルを保管したかの区別も難しくなります。開始時にカーネルに引き数を渡す必要がある場合、OS/400 1 次区画上の区画作業保守ツール、または Linux の /proc ファイル・システムを介して、カーネル・コマンド行パラメーターを変更することができます。

以下のステップに従って、カーネル・コマンド行を設定します。

- OS/400 コマンド行で STRSST と入力して、**Enter** を押します。
- 「開始保守ツール (STRSST) サインオン (Start Service Tools (STRSST) Sign On)」画面で、保守ツールのユーザー ID とパスワードを入力して、**Enter** を押します。
- 「システム保守ツール (SST) (System Service Tools (SST))」画面で、オプション 5 (サーバーの処理 (Work with servers)) を選択して **Enter** を押します。
- 「システム区画の処理 (Work with System Partitions)」画面で、オプション 3 (区画構成の処理 (Work with partition configuration)) を選択して **Enter** を押します。
- 「区画構成の処理 (Work with Partition configuration)」画面で、変更したい論理区画の横のオプション 14 (論理コマンドの変更 (Change logical commands)) を選択して、**Enter** を押します。
- 「ゲスト環境のコマンド行パラメーターの変更 (Change Guest Environment Command Line Parameters)」画面で、新しいカーネル・コマンドを入力して **Enter** を押します。

A IPL ソースの /proc ファイル・システムを介してカーネル・コマンド行を設定するには、以下のコマンドの一部を変えて入力します。echo -n "root=/dev/iSeries/vda1" >> /proc/iSeries/mf/A/cmdline

B IPL ソースの /proc ファイル・システムを介してカーネル・コマンド行を設定するには、以下のコマンドの一部を変えて入力します。echo -n "root=/dev/iSeries/vda1" >> /proc/iSeries/mf/B/cmdline

関連情報

直接接続されたディスクの回復

直接接続されたディスクを回復する方法を説明します。

直接接続されたディスク資源を使用して論理区画に Linux をインストールすると、カーネルは *NWSSTG ではなく A スロットと B スロットにロードされます。この構成で Linux 区画を回復した場合には (例: 1 次区画を消去した後で 1 次区画の構成データを回復した場合)、統合ファイル・システムにあるカーネル (*STMF) から開始するため、Linux 区画のネットワーク・サーバー記述を変更する必要があります。その区画から開始したなら、さまざまな Linux コマンドを使用することによって Linux カーネルの再書き込みを実行し、その区画を開始可能にすることができます。

直接接続されたディスク上の Linux 区画を開始してカーネルを書き込むことにより、それ以降の再始動においてシステムを始動できるようにするには、次のようにします。

1. カーネルを統合ファイル・システムにロードします。
2. 構成状況の処理 (WRKCFGSTS) コマンドを実行し、構成の種類としてネットワーク・サーバー (*NWS) を指定します。ネットワーク・サーバー記述のリストが表示されます。
3. 開始する Linux 区画の横の「オプション (Option)」欄に **8** を入力して、記述を表示します。そのネットワーク・サーバーの記述が表示されます。
4. 「開始ソース (Start source)」、「開始ストリーム・ファイル (Start stream file)」、および「開始パラメーター (Start parameters)」の横の「オプション (Option)」欄に **2** を入力して、編集します。
5. それらのフィールドを編集して、次の値を指定します。
 - 「IPL ソース (IPL source)」 = *STMF
 - 「IPL ストリーム・ファイル (IPL stream file)」 = <カーネルの IFS パス (例: /home/kernels/vmlinux64)>
 - 「IPL パラメーター (IPL parameters)」 = root=/dev/sdaX (X はルート・ファイル・システムが含まれているディスク区画。多くの場合、sda1 または sda2。)
6. 変更内容を保管します。
7. 仮想コンソールに接続します。telnet <your machine> 2301 を入力します。
8. 区画をオンに変更します。
9. 区画にログインします。
10. インストールするカーネルのコピーがサーバーにない場合には、FTP によってそれをサーバーに転送します。OS/400 から NFS 共用によって利用することも可能です。
11. 次のコマンドを使用することによって、カーネルを B スロットに書き込みます。

```
dd if <カーネルのパス名> = of=/proc/iSeries/mf/B/vmlinux bs=4096
```

このコマンドの実行には、少し時間がかかる場合があります。

12. コマンド行を前述の開始パラメーターで使ったのと同じ値に設定します。まず、echo により cmdline ファイルに多量のスペースを書き込んで、それ以前のパラメーターをクリアするとよいでしょう。それには、次のようなコマンドを使用します。

```
echo root=/dev/sdax > /proc/iSeries/mf/B/cmdline
```

13. コマンド行を echo します。

```
echo root=/dev/sdaX > /proc/iSeries/mf/B/cmdline
```

14. 次のコマンドを使用することによって、コマンド行が正しく入力されたことを確認します。

```
cat /proc/iSeries/mf/B/cmdline
```

それ以前に echo したのと同じ内容が表示されることを確認してください。

15. 次のコマンドを使用することによって、区画をシャットダウンします。

```
shutdown -h now
```

16. 構成状況の処理 (WRKCFGSTS) コマンドを使用することにより、ネットワーク・サーバー記述を前述のステップ 2 および 3 で説明したように編集します。
17. 「開始ソース (Start source)」 = B、および「開始ストリーム・ファイル (Start stream file)」 = *NONE と設定します。
18. これで、区画をオンに変更し、 iSeries サーバーのスロット B にインストールされたカーネルを使用することができます。

論理区画で実行される Linux のトラブルシューティング

このトピックは、論理区画内の、iSeries 上で実行される Linux に固有のエラーを分析および解決する方法を理解するために活用してください。

関連情報

論理区画のトラブルシューティング

NWSD エラー・メッセージのデバッグ

NWSD エラー・メッセージについて理解し、デバッグを行います。

Linux 区画をオンに変更しようとする時、エラー・メッセージを受け取る場合があります。NWSD の作成時に、サーバーで実行される論理区画に当てはまらないような情報を提供すると、これらのエラー・メッセージが生成されます。NWSD に関連したすべてのエラー・メッセージは QSYSOPR に含まれ、問題の説明と解決策が示されています。

表 18. NWSD エラー・メッセージ

| 理由コード | コードの説明 |
|----------|--|
| 00000001 | *NWSSTG が IPL ソースとして指定されましたが、記憶スペースが見つかりません。 |
| 00000002 | PARTITION パラメーターで指定された区画が見つかりません。 |
| 00000003 | PARTITION パラメーターで指定された区画は、GUEST 区画ではありません。 |
| 00000004 | NWSD の PARTITION パラメーターで指定された区画を使用するアクティブな NWSD が、すでに OS/400 区画に存在します。 |
| 00000005 | NWSD の PARTITION パラメーターで指定された区画は、電源オンになっています (おそらく LPAR 構成インターフェースを介して、または他の OS/400 区画から)。 |
| 00000006 | この区画はストリーム・ファイル (stmf) から開始するよう設定されていますが、何らかの理由で正常に作動しませんでした。オンへの変更を実行するユーザーは、IPL STMF パラメーターへの読み取りアクセスが必要であることに注意してください。 |
| 00000007 | NWSD は記憶スペース (NWSSTG) から開始するよう設定されていますが、何らかの理由で、カーネルが見つかりませんでした。考えられる原因として、タイプ 0x41 区画でない、または開始可能でない可能性があります。 |
| 00000008 | 区画が始動しません。区画が始動しない原因として、さまざまな理由が考えられます。カーネルが破壊しているか、プロセッサ・フィーチャー・コードが共用プロセッサ・プールをサポートしていない可能性があります。カーネルやプロセッサに問題がない場合、この区画の情報を分析して SRC を確認する必要があります。 |

表 18. NWSD エラー・メッセージ (続き)

| 理由コード | コードの説明 |
|----------|---|
| 00000009 | 論理区画として識別される区画が、構成されていません。 ホスト区画を選択するには、「区画状況の処理 (Work with Partition Status)」画面で F11 (区画構成の処理) を押します。「区画の構成 (Partition Configuration)」画面で、区画の横のオプション 13 を選択して、区画にホストを割り当てます。 |
| 00000010 | 問題の適切な解決方法を判別するために、次のレベルのサポートにお問い合わせください。 |
| 00000011 | |
| 00000080 | |
| 00001088 | カーネルが無効と認識されました。このエラーは、カーネルの FTP 転送がバイナリー・モードでない場合に頻繁に発生します。 |
| 00001089 | |
| 0000108A | |
| 0000108B | カーネルが、1 次区画の OS/400 のバージョンと非互換であると認識されました。 |
| 0000108C | |
| 000010A3 | 十分な数のプロセッサが区画に割り当てられていません。または、十分な量の共用プロセッサが使用できません。 |
| 000010A9 | |
| 000010AA | |
| 000010A4 | 十分な量のメモリーが区画で使用できません。 |
| 000010A5 | |
| 000010AE | このエラーは、Linux 区画用に共用プロセッサを指定した場合、または QPRCMLTTSK サーバー値を 1 に設定した場合に、専用プロセッサのみをサポートするサーバーで発生します。 |

プロセッサ・マルチタスキング・エラーのデバッグ

一部の iSeries サーバーで Linux を実行する場合、プロセッサ・マルチタスキングを OS/400 で使用不可にする必要があります。

プロセッサ・マルチタスキングを使用すると、iSeries プロセッサはタスク間で切り替えるときに情報をキャッシュに入れます。この機能は、一部の iSeries サーバーにおける Linux ではサポートされません。変更をアクティブにするには、サーバーの IPL を実行する必要があります。OS/400 コマンド行からプロセッサ・マルチタスキングを使用不可にするには、1 次区画で QPRCMLTTSK サーバー値を 0 (CHGSYSVAL QPRCMLTTSK '0') に変更します。マルチタスキング機能を使用不可にせずに論理区画を開始した場合、論理区画の IPL は、サーバー参照コード (SRC) B2pp 8105 000010AE を出して失敗します。

論理区画を作成する前に、以下のフィーチャー・コードを持つサーバーのプロセッサ・マルチタスキングを使用不可にしてください。

| サーバー | QPRCMLTTSK (0) を必要とするフィーチャー・コード |
|------|---------------------------------|
| 820 | 2397 |
| | 2398 |
| | 2426 |
| | 2427 |

| サーバー | QPRCMLTTSK (0) を必要とするフィーチャー・コード |
|------|--------------------------------------|
| 830 | 2400 2402 2403 2351 |
| 840 | 2418 2420 2416 2417 2419 |

Linux のシステム参照コード (SRC)

次のリストには、Linux に固有の SRC と推奨される修正処置が示されています。

論理区画の追加の SRC については、論理区画のサーバー参照コード (SRC) の解決 (Resolve server reference codes for logical partitions) を参照してください。SRC がリストされない場合は、論理区画に関連付けられていない可能性があります。トラブルシューティングまたは次のサービス・レベルを調べる必要があります。

以下は論理区画のシステム参照コード (SRC) およびそれをどのように識別するかについて説明しています。

参照コード

B2pp 1270 (pp は区画 ID に相当)

原因: Linux を実行する 2 次区画の IPL の実行中に問題が発生しました。1 次区画がフル・ページング環境になっているために、区画の IPL を実行できません。

回復処置: 記憶域管理フル・ページング IPL ステップ後に 1 次区画の IPL を実行してください。

問題分析手順: 1 次区画と障害が起こった 2 次区画の IPL モードを調べます。1 次区画が C モードになっている場合は、論理区画の IPL を実行できません。

B2pp 6900 (pp は区画 ID に相当)

原因: 2 次区画のカーネルのサイズが、2 次区画によってロード域に割り振られたサイズを超えています。

回復処置: 2 次区画のメモリ割り振りのサイズが、カーネルをロードするのに十分な大きさになっていることを確認します。正しいカーネルを使用してください。

問題分析手順: ワード 3 と 4 の値を識別して、エラーの原因を判別します。各ワードの値は、次のとおりです。

- ワード 3: 2 次区画に割り振られているサイズ。
- ワード 4: カーネルに必要なサイズ。

B2pp 6905 (pp は区画 ID に相当)

原因: Linux を実行する 2 次区画の IPL の実行中に問題が発生しました。カーネルは、論理区画の指定された IPL モードでは無効です。カーネルは、この IPL モードでは使用できません。

回復処置: ロード対象として指定したカーネルが有効であり、指定した IPL モードがカーネルの存在する位置になっていることを確認してください。

問題分析手順: プロセッサと 2 次区画へのメモリー割り振りを調べます。区画のサーバーに、十分な数の機能しているプロセッサとメモリー資源が十分であることを確認する必要があります。

B2pp 6910 (pp は区画 ID に相当)

原因: Linux を実行する 2 次区画の IPL の実行中に問題が発生しました。論理区画のロード中に記憶域管理上の問題が発生しました。

回復処置: サーバーから詳細な 16 進データを収集して、サポート担当者に連絡してください。

問題分析手順: プロセッサと 2 次区画へのメモリー割り振りを調べます。区画のサーバーに、十分な数の機能しているプロセッサとメモリー資源が十分であることを確認する必要があります。

B2pp 6920 (pp は区画 ID に相当)

原因: Linux を実行する 2 次区画の IPL の実行中に問題が発生しました。論理区画のロード中に問題が発生しました。

回復処置: サーバーから詳細な 16 進データを収集して、サポート担当者に連絡してください。

問題分析手順: サーバーの SRC ヒストリーを検討します。

B2pp 6930 (pp は区画 ID に相当)

原因: Linux を実行する 2 次区画の IPL の実行中に問題が発生しました。論理区画のロード中に問題が発生しました。

回復処置: サーバーから詳細な 16 進データを収集して、サポート担当者に連絡してください。

問題分析手順: プロセッサと 2 次区画へのメモリー割り振りを調べます。区画のサーバーに、十分な数の機能しているプロセッサとメモリー資源が十分であることを確認する必要があります。

B2pp 8105 (pp は区画 ID に相当)

原因: 2 次区画の主記憶域データ構造の初期化が失敗しました。 IPL は終了しました。

回復処置: これは、ロード・ソース・メディアが破壊されているか無効であるために生じている問題である可能性があります。回復するには、おそらく 2 次区画をインストールし直す必要があります。継続して障害が起こる場合は、サービス提供者に連絡してください。

問題分析手順: 理由コードを SRC のワード 13 から識別します。ワード 13 の理由コードの値は、次のとおりです。

- 000000AE: プロセッサ・マルチタスキングが OS/400 で使用不可になっている

関連タスク

31 ページの『2 次区画用の参照コード・ヒストリーの表示』

参照コードは、状況またはエラー条件を示します。

関連情報

論理区画のサーバー参照コードの解決

トラブルシューティングとサービス

論理区画のシステム参照コード (SRC)

仮想イーサネット・ネットワーク障害からの回復

カーネル・アップグレード後の仮想イーサネット・ネットワーク障害からの回復方法を説明します。

(2.4.10 より下の 32 ビット・カーネルから) 64 ビット・カーネルにアップグレードした場合、または 2.4.10 より上の 32 ビット・カーネル・レベルにアップグレードした場合には、ネットワーク装置情報が変更された可能性があります。Linux の仮想ネットワーク装置の表記が、vethXY から ethXY に変更されています。

それぞれの仮想イーサネット回線記述にどのネットワーク装置が関連しているかを判別するには、以下のコマンドを使って、メッセージ・ログを表示することができます。

```
dmesg | fgrep veth | less
```

このコマンドの出力として、たとえば以下のようなメッセージが生成されます。

```
veth.c: Found an Ethernet device eth0 (veth=0) (addr=c000000000ff2800)
```

このケースでは、OS/400 仮想回線記述 `veth0` が Linux ネットワーク装置 `eth0` に現在関連していることをメッセージが示し、`veth=0` は OS/400 の VLAN0 に関連しています。何らかの理由でメッセージ・ログ表示が超過した場合、以下のコマンドを使って、`proc` ファイル・サーバー内のネットワーク装置を分析することもできます。

```
cat /proc/iSeries/veth/[netdevice]
```

適切なネットワーク装置を指定してこのコマンドを実行すると、たとえば以下のような出力が生成されます。

```
Net device: c000000000ff2800
Net device name: eth0
Address: 0201FF00FF01
Promiscuous: 0
All multicast: 0
Number multicast: 0
```

このファイルは、Linux ネットワーク装置 `eth0` が OS/400 上の最初の仮想 LAN (つまり VLAN0) にマップすることを示しています。

論理区画中の Linux に関する関連情報

論理区画における Linux のトピックに関連した IBM Redbooks (PDF 形式)、Web サイト、および Information Center のトピックを次にリストします。いずれの PDF も表示したり印刷したりできます。

Redbooks

Linux on the IBM iSeries Server: An Implementation Guide

この IBM Redbook は、Linux について冒頭で概説し、オープン・ソースの意味を定義し、iSeries 上で Linux を使用すると利点がある理由について説明します。また、iSeries サーバー上でサーバーを管理したり Linux アプリケーションを開発したりするのに役立つ、基本的なサーバー管理タスクと Linux アプリケーション開発について説明します。さらにファイアウォール、Apache、Samba、および電子メールなどの広範囲のサービスを紹介し、それぞれの機能について説明します。

追加情報については、IBM RedBooks (www.redbooks.ibm.com ) を参照してください。

Web サイト

Linux on iSeries

このページには役に立つ情報が記載されており、ご使用の iSeries に Linux をインストールするためのリンクがあります。

iSeries ODBC Driver for Linux

iSeries ODBC Driver for Linux を使用すると、Linux クライアントから iSeries データベースにアクセスできます。このページには、iSeries ODBC Driver for Linux のインストールと使用に関する情報が記載されています。

その他の情報


- 論理区画

PDF ファイルの保管

表示または印刷のために PDF をワークステーションに保管するには、以下のようになります。

1. ブラウザーで PDF を右マウス・ボタン・クリックする (上部のリンクを右マウス・ボタン・クリック)。
2. Internet Explorer を使用している場合は、「対象をファイルに保存...」をクリックする。Netscape Communicator を使用している場合は、「リンクを名前を付けて保存...」をクリックする。
3. PDF を保存したいディレクトリーに進む。
4. 「保存」をクリックする。

Adobe Acrobat Reader のダウンロード

これらの PDF を表示または印刷するには、Adobe Acrobat Reader が必要です。このアプリケーションは、Adobe Web サイト (www.adobe.com/products/acrobat/readstep.html  外のリンク) からダウンロードできます。

関連情報

1 ページの『トピックの印刷』

ここで、関連資料の PDF の表示や印刷を行えます。

付録. 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとしします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
Software Interoperability Coordinator, Department 49XA
3605 Highway 52 N
Rochester, MN 55901
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、IBM 機械コードのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

強行法規で除外を禁止されている場合を除き、IBM、そのプログラム開発者、および供給者は「プログラム」および「プログラム」に対する技術的サポートがある場合にはその技術的サポートについて、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。

IBM、そのプログラム開発者、または供給者は、いかなる場合においてもその予見の有無を問わず、以下に対する責任を負いません。

1. データの喪失、または損傷。
2. 特別損害、付随的損害、間接損害、または経済上の結果的損害
3. 逸失した利益、ビジネス上の収益、あるいは節約すべかりし費用

国または地域によっては、法律の強行規定により、上記の責任の制限が適用されない場合があります。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

この「論理区画における Linux」には、プログラムを作成するユーザーが Linux のサービスを使用するためのプログラミング・インターフェースが記述されています。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

AIX
AIX 5L
e(ロゴ)server
eServer
i5/OS
IBM
iSeries
pSeries
xSeries
zSeries

Intel、Intel Inside (ロゴ)、MMX および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

資料に関するご使用条件

お客様がダウンロードされる資料につきましては、以下の条件にお客様が同意されることを条件にその使用が認められます。

個人使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商業的使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

これらの資料の著作権はすべて、IBM Corporation に帰属しています。

お客様が、このサイトから資料をダウンロードまたは印刷することにより、これらの条件に同意されたものとさせていただきます。



Printed in Japan